
Todestrieb ~ 翼失き墮天使 ~

タトバスティツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T o d e s t r i e b 〈翼失き墮天使〉

【Nコード】

N 8 1 0 8 V

【作者名】

タトバステイツ

【あらすじ】

「逃げ出した先に、樂園はなかった。」

バーハラ事件から2ヶ月後、セリスたちは平穏な日々を送っていた。そんなある日、セリスと新米兵士のフロリーナは仮面ライダーディエンド・海東大樹と再会する。その彼の口から告げられたのは、海東の訪れた異世界のセリスがファンガイアであるという、耳を疑いたくなるような事実であった。セリスたちは海東大樹と共に、事実を確かめるためにもうひとつの『聖戦の系譜の世界』へと赴く。

これはもうひとつのり・イメージネーション、そしてある一人の「翼を失くした天使」にまつわる物語。

『真・NOVEL大戦2011 仮面ライダーディケイド×聖戦の系譜 母と子と世界の破壊者』（<http://ncode.syosetu.com/n5784p/>）の続編。今回は紋章の謎、烈火の剣、聖魔の光石からのキャラクターも登場します。

テーマソング『天使の翼』

<http://ncode.syosetu.com/n2068x/>

10/10 【お知らせ】Arcadia様への投稿を始めました
10/8 誤表記を修正

プロローグ

「セリス様、先行っちゃいますよ！」

「待ってよ、フロリーナ」

皆さん、初めまして。わたしはフロリーナ、シアルフィ公子セリス様の世話役を務めております。

わたしはシレジアという北方の雪国出身の天馬騎士^{ペガサスナイト}で、その名の通り天高く翔けるペガサスの乗り手。ちなみに、わたしはシアルフィにとって初めてのペガサスナイトなんだそうです。

今日は母の日、文字通り母親を労り、感謝するための日。というわけで、わたしとセリス様は、セリス様の母君であるディアドラ様に綺麗な花束をプレゼントするため、シアルフィ郊外の花畑に向かっております。

わたしがペガサスに乗っているのにたいして、セリス様は馬。スピードではペガサスの方が上なのでどうしてもセリス様を引き離しちゃうんです。でも、セリス様はわたしを咎めず、むしろ追いついてやると言わんばかりにこの状況を楽しんでらっしゃるようです。セリス様もシアルフィの将来を担う公子様とはいえ、まだまだ子供なのです。わたしも昨日一三回目の誕生日を迎えたばかりの年頃で大人とは言えませんが、八歳になって間もないセリス様と一緒にいると、なんだかセリス様のお姉さんになったようで、見守りたくなるような気持ちになります。

今日もこの世界は平和です。先日は異世界からの魔物によりグランベル王国の首都バーハラが襲撃され、アルヴィス王が重傷を負われて一大事だったのに、それが何事も無かったかのような日々。フリージ公パント様の話によれば、王は腕と脚に重傷を負われまともには動けない状態だったとか。でも、王が一命を取り留めてくれて良

かったです。だって、王はグランベルの民から慕われてらっしゃる立派なお人ですから。

花畑にたどり着いたわたしたちは、早速ディアドラ様が喜んでくれそうなお花を摘み始めました。

「ねえフロリーナ、このチューリップとかどうかな。花びらの赤みが生き生きしてるみたいでとても綺麗だよ」

「ふふ、本当に綺麗なお花ですね。わたしはこのパンジーに山百合、それからカーネーションも摘みましょう」

セリス様が手渡した赤いチューリップを片手に、わたしはお花をどんどん摘んでいきます。ただ単色に拘るのではなく、色鮮やかな花束になるよう考えてお花を選びます。

そうして、出来上がった花束にセリス様は目を丸くしました。

「わあ……色とりどりでとても鮮やか。やっぱりお花じゃフロリーナにはかなわないや」

「わたし、お花を摘むのが好きなんですよ。だからどうしてもお花の知識が頭に入っちゃうんです」

これなら母上も喜んでくれるよ、とセリス様はわたしを褒めてくださいました。セリス様に褒められて、わたしとっても嬉しい。そんな自らの喜びの余韻が続く中、わたしたちはシアルフィへと帰りました。

わたしたちがシアルフィに向かっている頃、ディアドラ様は産んで間もないセリス様の妹君にしてシグルド様の忘れ形見であるユリア様にお乳を与えておられました。

「ユリア、お乳をたくさん飲んで元気に育ってね」

さらけ出されたディアドラ様の豊かな乳房に、ユリア様は小さなお口でしゃぶりついてお乳を飲みます。そしてユリア様はお腹がいっぱいになると、顔を乳房にうずめて眠りにつかれます。そんなユリア様を愛おしそうに抱くディアドラ様のお姿は、まるで女神のような神々しささえ感じられます。

ディアドラ様はわたしにとって実の母のようにお慕いしているお方です。わたしが1年前シアルフィ公シグルド様に憧れてシアルフィ騎士団に志願した頃、あまりの男社会にわたしは居場所を見つけれませんでした。でもディアドラ様がわたしにお声をかけてくださったって、悩みを聞いてくれたんです。そんなディアドラ様は夫のシグルド様に懇願し、わたしを公一家の世話役にしてくださいました。しかし、その日から間もないころにシグルド様がグランベル軍救援のため出陣なされ、そのまま帰らぬ人となってしまいました。バーハラ事件から数日後のシグルド様の葬儀で、黒いフードを被ったディアドラ様の儚げな表情、とても印象に残っております。最愛の夫を失われたのだから、悲しまないのは無理があるというもの。でも、わたしもシグルド様がお命を落とされたことが信じられず、数日は憂鬱な日々を過ごしていました。あの憧れだったシグルド様はもういない……そんなことを考えると、わたしも居ても立ってもいられず、何度か泣き出しそうになりました。

「セリス様、そしてディアドラ様はお前よりもっと辛い思いをしておられる。少しは我慢せんか」

シグルド様の腹心であるオイフェ様に叱咤され、わたしは無理しなくても何事も感じないような素振りをするよう努力しました。間もないうちにディアドラ様に声をかけられ、わたしは空元気で応じま

した。

「あら、フロリーナ。今日はなんだか一段と元気みたいね」

「は……はいっ！ わ、わたしはいつもどおり元気ですよ。わたし……これから訓練ありますので、行ってきますっ！」

ディアドラ様の前で悲しんではならない……わたしは出来る限りの笑顔を作って、ディアドラ様に応えようと思いました。そして訓練に向かうため立ち去ろうとすると、ディアドラ様に止められました。

「お待ちなさい、フロリーナ。さっきからなんだか変よ？ 無理して元気してるみたい。……本当の気持ちをおっしゃい、何言っても決して怒らないから」

ディアドラ様は、わたしが空元気していることを見通しておられたのです。わたしは、穏やかな眼差しで見つめるディアドラ様に本心を打ち明けました。

「わたし……シグルド様がお亡くなりになられたことに……耐えられなくて……」

「フロリーナ……」

「でも、ディアドラ様はわたしなんかよりもっと悲しんでますよね……だってディアドラ様とシグルド様は心から愛し合っていた夫婦でしたもの。だからわたしが、赤の他人であるわたしが……シグルド様のことで悲しむ姿を……ディアドラ様に見せられなくて……でも、でも……う……うわああん……！」

わたしは今まで抑えていた感情を溢れさせ、ディアドラ様の目の前で泣き出しました。わたしだって、シグルド様は大好きなお方だった。だから大泣きするくらい悲しい。これがわたしの本心なのだ

から、感情を抑えようとしても抑え切れないの。

「あなたも、シグルド様が亡くなられたことが悲しかったのね」

感情の赴くままに泣きじゃくるわたしを、ディアドラ様は優しく慰めてくださったのです。

「わたしを気遣ってくれるのは結構なことだけれど、それで自分を抑えこんでやせ我慢するのはよくないことだわ。フロリーナ、あなたにとってもシグルド様は大切な存在だものね、泣きたくなくなる気持ちわかるわ」

「ひつく……」

「確かにシグルド様はわたしにとってとても大切なお方、そしてわたしの半身。シグルド様を失ったことは今も堪えられないくらいよ。でも、それがあなたの悲しみを否定する理由にはならないわ。だって、あなたの真心はあなただけのものなのだから……。遠慮せず泣いていいですよ、あなたの心が落ち着くまで……ね」

ディアドラ様の優しさに心をうたれ、わたしはディアドラ様の胸で思う存分涙を流しました。そんなわたしをディアドラ様は柔らかく包み込むように抱きしめ、宥めるように頭を撫でてくれました。それ以来、わたしはディアドラ様への慕情を強め、息子のセリス様も一緒にシグルド様の代わりとして二人を支えていきたいと決意しました。

さて、話を現在に戻しましょう。ディアドラ様の部屋に、青い半袖の上着と白いミニスカート、スカートの丈近くまであるロングブーツを穿いた銀髪の女の子が入ってきました。

「母上、赤ん坊のわたしを抱いておられるのですね」

そう、実は彼女こそ一五年後の未来から来られたユリア様なのです。未来のユリア様は『暁の女神の世界』なる異世界に存在する、ベグニオン帝国という国で作られた杖『レクスワープ』の杖を使っているシグルド様のご存命の時代へと行っていたのですが、ちよつとした経緯でこの時代に来られたのです。それはイマジンという異世界の魔物の生き残りがおとぎ話である『エレブ物語』の英雄ハルトムートの姿に化け、シアルフィを騒然とさせた事件なのですがそれはまた別の機会にお話しましょう。

未来のユリア様はセリス様のようにとても礼儀正しいお方です。でも、ちよつとお転婆なところもあるのだとか。

「わたしに自分を抱かせてもよろしいですか？」

「うふふ、いいわよ」

未来のユリア様はディアドラ様から赤ん坊のユリア様を受け取りますが、赤ん坊のユリア様の想像以上の重さに少々面をくらったようです。

「赤ん坊の頃のわたしって、こんなに重かったのですね」

「生命いのちはとても重いものなのよ。お母さんはね、自分で産んだ生命に責任を持たなければいけない……だからわたしはあなたが感じている以上に、抱いた赤ん坊を重く感じているの。あなたもお母さんになったら、その意味をもっと深く感じるようになるわ」

赤ん坊の自分を抱く一五年後のユリア様を、微笑ましく見守るディアドラ様。こうして人間は、生命の重みを学んでいくものなんですね。わたしも、いつかは二人と同じように生命の重みを知っていくのでしょつ。

「よう、ディアドラ。それにユリア。こないだ別の世界でちょっと面白い話を聞いてさ、知りたくないかい？」

突然現れた赤い髪の青年、チエイニーという名前で『暗黒竜と光の剣の世界』からこの世界にやって来た人らしいのです。彼はなぜか異世界を渡り歩く能力があり、さまざまな世界を渡り歩いているうちにここを気に入ったみたいでずっとこの城に住み着いているんです。

「あなたの話となると興味を持たずにはいられません。教えてくださいな」

「わたしもよ、チエイニー。ねえ聞かせて！」

「オッケー。そうじゃ、今回は生の欲動リビドーと死の欲動デストルドーの話だ」

簡単にいえばリビドーとは生きたいと思う気持ち、デストルドーとは死にたいと思う気持ちだとチエイニーさんはおっしゃっていました。

「こいつらはその世界の心理学者が提唱した概念でな、人間はリビドーとデストルドー、このふたつの気持ちを持ち合わせていて常にどちらかの気持ちに揺れ動きながら生きてるんだってさ」

「それは面白い考えですね」

「そこでおれは考えた、人はなぜ女のおっぱいが好きなのか」

チエイニーさん、なんてやらしいことを言う。でもチエイニーさんだって男なのだし、考えていても不思議じゃないわよね。

「人は産まれた時、母親の胸に抱かれる。柔らかな乳房に包まれて心地良さを感じ、この時人は初めてリビドーを感じるわけだ。産まれてきて良かったってな」

「それがおっぱい好きとどのような関係があるの？」

「女のおっぱいは言わば生命のゆりかご、生命が安らぐ場所。要するに最もリビドーを感じれるのがおっぱいなんだ。人は成長して赤ん坊の感覚を忘れ去っても、体に刻まれた生命の安らぎを忘れることはない。だから本能的におっぱいを見るだけで興奮する、というわけさ」

「なるほど、だから人は女性の胸を好むんですね」

「あともう一つ。セリスもユリアもとても健やかに育ってる。それもこれもディアドラ、あんたのでかいおっぱいに抱かれて育ったからさ」

「わたしが母上の胸で健やかになった？ オイフェの教育が良かったからじゃないかしら」

ユリア様の反論にもチエイニーさんは指を振って否定しました。

「ちつつち、わかってないなあ。オイフェは単に迷子にならないよう地図を用意しただけさ。赤ん坊は母親に抱かれ、愛情を注がれてリビドーを感じつつ人への思いやりを知り、健やかな人間へと成長していくんだ。逆に親に愛されない赤ん坊はデストルドーに満たされてしまい、荒んだ人間になってしまう。つまりセリスとユリアが立派なのもディアドラのおかげ、まあ母は偉大だってこった」

ディアドラ様とユリア様はチエイニーさんの話に納得したみたいでした。わたしも後で同様の話をユリア様からお聞きしましたがとても興味深かったです。ちなみにわたしとユリア様、とても仲良しですよ。時々ユリア様、わたしをライバル視してる部分がありますけど……ね。

「ただいま、母上」

「フロリーナ、ただ今戻りました」

わたしとセリス様はシアルフィ城に到着し、ディアドラ様が出迎えてくれました。セリス様は早速花束をディアドラ様にプレゼントします。

「はい、母上」

「まあ、とても綺麗なお花ね。まるで生を謳歌しているみたい。ありがとう、セリス」

「実はほとんどフロリーナが摘んだんです。わたしが選んだのは赤いチューリップくらいしかないのですけど……」

「ううん、それで十分よ。この花束だけで、あなたたちの想う気持ちが伝わってくるもの。それだけで、わたしは十分嬉しいわ」

ディアドラ様はにっこりと微笑んで、わたしたちの作った花束を受け取ってくださいました。そしてディアドラ様はその笑顔で、わたしにありがとうと言ってくださいました。喜んでいただいて良かったです。その笑顔を見るだけで、わたしは十分満足です。

花束を抱えたディアドラ様は、居間の窓際のテーブルに花瓶を置き、そこに花束を入れました。隣にはディアドラ様とセリス様、赤ん坊のユリア様を生き写したかのような小さな絵が飾ってあります。これはセリス様曰く「写真」というもので、バーハラ事件の時にこの世界を訪れた異世界の人間が描かれたものだそうです。確か通りすがりの仮面ライダーと自称していたらしいのですが、わたしはちよっとくらいしか会う機会がなくあまり印象に残っておりません。

今日の夕食はビーフシチュー。なんとディアドラ様がお作りになられた料理なのです。ディアドラ様は料理を作るのが好きで、一家の食卓は全てディアドラ様が担っておられます。その他の兵士のみなさんはお雇いのコックさんが作った料理を食べるのですが、世話

役であるわたしは特別にディアドラ様の手料理を食べることができません。

「本当は城内のみんなに料理を振舞いたいのだけど、オイフェが反对するから仕方が無いのよね」

ディアドラ様は城内の全員の分の食事を用意したいと思っておられますが、そうするとディアドラ様の負担が増える。オイフェ様は適切な判断を下したのですね。

ディアドラ様の作られたビーフシチュー、味付けも良くてとても美味しいです。正直な話、シレジアにいるフィオーラお姉ちゃんのビーフシチューより美味しいと感じます。きっと、ディアドラ様もわたしたちが喜んでくれるよう努力してるのですね。

翌日、わたしはシアルフィ城の玄関で変な格好をした男の人と出会いました。

「やあ。突然だけど、セリス公子に会わせてくれないかな」

その人は黒い髪にポケットのついた上着を着ておりました。わたしは疑惑を感じずにはいられず、念のため武器の提出を求めました。

「仕方ないな、はい」

その人は変な形をした道具を渡しました。その武器には水色と黒のストライプが入っており、周囲には大きな孔と取っ手らしき出張りがついておりました。そうしてわたしは怪しげな男の人をつれてセリス様のもとへと案内しました。

「あなたは……大樹さん！」
「セリス君。久しぶりだね」

どうやら男の人はセリス様とは知人のようです。わたしは、男の人の素性をセリス様に訪ねました。

「彼は海東大樹^{かいとうだいき}さん。仮面ライダーディエンドに変身するトレジャーハンターだよ」

「仮面ライダーって、通りすがりの仮面ライダーとかいう人となんか関係あるんですか？」

「まあね。話すと長くなるから、後にしよう。それよりも今日は君にちよつと来てほしいんだ」

海東大樹なる人は、セリス様に視線を向けて話し始めました。その内容は、わたしとセリス様を驚愕させるものだったのです。

「今ボクが訪れてる世界、そこのお宝が欲しくてね。そのお宝を持つてる人がお宝を渡す条件として君に会いたいんだってさ」

「その人とは……？」

「セリス。その世界の君にして、その世界における魔物の王だ」

わたしとセリス様は、耳を疑いました。セリス様が、魔物の王……！？ わたしはこの時、セリス様と同じ考えでした。大樹さんの言葉、その真偽を確かめねばならない。だけどこの先、悲惨な現実を目の前に突き付けられようとは、誰も知る由がなかったのです。

つづく

プロローグ（後書き）

この作品には結構重いテーマを盛り込んでおり、それゆえハードな展開になると思います。

興味を持たれた方、ぜひとも最後までお付き合いください。

第1話 Vorspiel（前書き）

生きる意味や価値を考え始めると我々は気がおかしくなってしまう
生きる意味など存在しないのだから

ジークムント・フロイト

第1話 Vorspiel

ここはユグドラルと呼ばれる大陸にある小さな国、シアルフィ。
わたし、フロリーナは青い髪の子セリス様と銀髪の公妃ディア
ドラ様の世話役として、唯一のペガサスナイトとして働いています。
今日はグランベル王子ユリウス殿下とフリージ公パント様がシ
アルフィを訪問される日。わたしは大物と会うことに緊張しつつも身
支度を済ませていました。そして誰よりもこの日を楽しみにしてい
たのがセリス様。なんとと言ってもセリス様とユリウス様はとも仲
良しなのですから。

ですが、ユリウス王子の来訪を目の前にして突然見慣れない格好
をした人が城を訪れました。彼の名前は海東大樹^{かいとうだいぎ}、異世界を渡り歩
くトレジャーハンターでセリス様とは面識があるようでした。その
大樹さんが発した言葉に、わたしとセリス様は耳を疑わざるをえま
せんでした。

「わたしが、魔物の王？ それってどういう事なのですか？」

この世界に似た異世界、そのセリス様は魔物の首領だと大樹さ
んは言いました。わたしとセリス様は驚かずにはいられず、わたし
が哑然とする傍らでセリス様は真っ先に大樹さんに疑問を投げかけ
ました。

「ボクが訪れた世界、そこは君たちの世界と酷似した世界。さらに
住人までもそっくりなんだ。けどその世界では人間が滅びつつあ
り、^{ファンガイア}魔物に征服されようとしている。彼らファンガイアを率いる長、
それがその世界の君というわけさ」

セリス様はもう一人の自分が魔物として存在していることに戸惑いを隠せないようでした。わたしももちろん同じ気持ちなのですが、大樹さんの発したファンガイアという言葉にピンと来なくて質問することになりました。

「あの、大樹さん」

「そういえば君の名前、聞いてなかったね」

「セリス様の世話役のフロリーナです。質問があるんですけどファンガイアって何なんですか？」

「ステンドグラスのような体色を持つ怪人さ。彼らは吸命牙という器官を持ち、そいつで人の生命力を吸って生きている。……この前この世界を襲った魔物と同じような奴らと考えていい」

大陸中が騒然となった異世界からの魔物と似たような存在・ファンガイア。今度は別の世界で人間たちを危機に陥れようとしている。それにしても、なぜ異世界のセリス様はファンガイアなのだろうか。最初からファンガイアとして産まれたのか、あるいは……。

「大樹さん、お久しぶりですね。異世界のセリスの話、わたしも興味あります」

大樹さんの話を耳にはさんだディアドラ様が部屋に入ってきました。ディアドラ様もセリス様と同様、大樹さんとの面識がありました。異世界のセリス様がファンガイアであることに、母として関心を持たずにいられないみたいです。

「セリス君はあなたの息子、異世界の存在であつても興味が沸かずにいられないようですね」

「ええ、もちろんです。今すぐお紅茶用意しますね、突然の訪問とはいえ客人ですから」

ディアドラ様は紅茶の用意をするためキッチンに向かわれました。その間、わたしはセリス様に大樹さんとの面識について訪ねてみました。

「セリス様とディアドラ様は大樹さんとお知り合いみたいですね。一体どのようにして知り合ったんですか？」

「ぼくと母上はバーハラで魔物に襲われた時、士さんと大樹さんに助けられたんだ」

「士さん……って、あの通りすがりの……？」

「うん……フロリーナ、あの時君は風邪で寝込んでて士さんとは会う機会がなかったみたいだね。ともかく士さんと大樹さんとはその時からの知り合いなんだ」

セリス様とディアドラ様はバーハラ事件の時に、大樹さんと行動を共にしていたそうです。それにしてもセリス様、いつのまにか意外な方とお知り合いになっていたのですね。

そうしているうちに、ディアドラ様がティーポットとティーカップを乗せたお盆を持ちながら部屋に入り、わたしを含めた四人分の紅茶をテーブルに用意しました。

全員椅子に座ったところでお話の始まり……の前に、ディアドラ様と大樹さんのちょっとした閑話がありました。

「いきなり関係ない話ですみませんけど、『エルランのメダリオン』を手に入れましたか？」

ディアドラ様が発されたエルランのメダリオンとは『蒼炎の軌跡の世界』という異世界にあるメダルの中で、大樹さんはバーハラ事件の後それを手に入れるためにわたしたちの世界を去ったそうで

す。

「いいえ、手に入れられませんでした。けれど、意外なお宝を手に入れることができましたよ」

一瞬残念がった表情を見せると同時に、大樹さんは懷から1枚のカードを出しました。その絵柄は、銀色の剣と、「ATTACK
RIDE ETTARD」という文字が描かれていました。

「これは蒼炎の軌跡の世界の剣『エタルド』を呼び寄せられるカードです」

「エタルド？」

「漆黒の騎士という名の騎士が持っていた剣で、その世界でも最強の剣の一つです。この剣の威力はおそらくこの世界の神器にも匹敵する威力、いやそれ以上かも知れません」

大樹さんの持つエタルド、それはわたしたちの世界の神器と同等以上の力を持つ剣。下手したらセリス様のテイルフィングやイザーク王シャナン様のバルムンクをも凌ぐかもしれないのです。

まあそれは一旦置いて、大樹さんは本題である異世界での出来事について話を始めました。

「さて、説明しての通りこの世界に酷似した世界があります。言わばこの世界の裏世界と言ってもいいかな。そこでは人間とファンガイアがユグドラル大陸に共生していました。しかし、ある日を境にファンガイアの勢力が拡大し、人間を駆逐していったというわけです」

「そのファンガイアの長が、その世界のセリスなのです」

「その通り。この世界のセリス君と違う点は二つ、まずファンガイアであること」

「もう一つは……？」

大樹さんは一旦一呼吸を置きました。その間わたしたちに緊張を走らせ、一瞬無音に感じたような気がしました。

「愛情や慈悲を持たない、冷酷で残忍な性格であること。人間からすれば悪人だと思ってもいいくらいだ」

大樹さんの語られる異世界のセリス様の人物像は、とてつもない悪人であることにわたしたちはショックを受けました。ここで、数刻も経たないうちにディアドラ様が口を開かれたのです。

「大樹さん。異世界のセリスが、わたしのセリスに会いたいと仰りましたね。それならわたしも一緒に行きます」

「デイ、ディアドラ様！ 危険です！！」

わたしだって魔物の恐ろしさは承知しております。なんたってこの世界で指折りの騎士であつたシグルド様を死に追いやり、聖戦士の直系すら手に負えない存在なのですから。

「危険は承知よ、フロリーナ。何と言ってもわたしが産んだセリスのことが心配ですもの。それにわたしも異世界のセリスに会ってみたいの。だって、大樹さんの言葉だけではすべてが真実かどうかわからないじゃない。あなたもそう思うでしょう、フロリーナ？」

ディアドラ様の言葉には一理ありました。大樹さんは異世界のセリス様の人物像を誇張して伝えているのかも知れない、真実に近づくためには実際に目で見ることがある。わたしも確かに同じ考えでした。

「わかりました、ならわたしもお供します。セリス様とディアドラ様をお守りするのがわたしの務め、そのためなら喜んで命をお捧げしましょう」

城内で孤立するわたしに手を差し伸べ、なおかつ平民であるわたしを家族の一員のように接してくださるセリス様とディアドラ様。そんなわたしはいつも甘えて、迷惑をかけるばかり。だからわたしは二人を守りたい、この体を張ってお守りすることで今までの恩を返したい。しかし、ディアドラ様はそんなわたしを心配するような表情で諭したのです。

「フロリーナ……わたしたちを守ってくれるのは良いのだけど、命を捧げるなんて言葉、あなたにはまだ早いわ。だってあなたは一三歳になったばかり、まだ人生これからでしょう？ だからそんな言葉、軽々しく口にしちゃ駄目」

「わたしだってシアルフィの兵士です、そのくらいの覚悟はあります！」

ディアドラ様は若い命を粗末にして欲しくないと伝えているのでしょう。わたしだってそんなことはわかっています。でも、ふたりに仕えてお守りすること……そうすることでわたしを褒めて、喜んでくれる。その居場所だけは自分の命と同じくらい大切なものだから、否定したくはない。

「フロリーナ、あなた……」

「すみません、ディアドラ様。正直魔物と闘うのは怖いし、死にたくないです。それでもわたし……どうしてもみんなに認められて、頼りにされたいんです。そうすることで自分がここにいてもいいんだって思えるから、生きてるって感じられるから……そのためならわたし、なんでもします」

わたしは三人を前に、本心を打ち明けました。みんなは一瞬わたしに、穏やかな視線を向けてきました。そこで、セリス様が口を開きました。

「君が命をかけなくても、ぼくたちはフロリーナを必要だと思ってるよ」

「セリス様……」

「君はとても思いやりがあるし、何たってがんばり屋さんだしね。ぼくも君の前向きな気持ちに、何度も羨ましいって思ったしいつも勇気づけられているよ。それにおしゃべりしてるだけで楽しくなってくるしね」

「決して強いからと言って必要とされるわけじゃないさ、フロリーナ。ボクのアドバイスは、大切なのは他の人が足りない部分を補おうとすること。ジグソーパズルと同じようなものさ、人間にはどこか欠けた部分があるから、互いに他人の持つ自分の足りないものに惹かれ合って生きているんだ。だから、君は自然体で接していればいいと思うよ。セリス君もディアドラさんもきつとありのままの君を好いてくれるはずだからね」

赤の他人である大樹さんも、わたしを励ましてくれました。

ありのままの、わたし……セリス様も、ディアドラ様も、わたしの中にある自身の欠けた部分を見出しているのかもしれない。

でも、まだ大樹さんの言ったことを理解出来てはいない。完全に理解するにはもっと歳を重ねる必要があるのだと、わたしは思いました。

「話がそれたけど、とりあえずボクとセリス君、ディアドラさん、フロリーナの四人で異世界に行くことにしましょう。ひとまずこれで決定ですね」

「ええ、でも今日はユリウス王子がこの城を訪問される日。出かけるのは明日にしましょう」

こうして話がまとまると、大樹さんはわたしに視線を向けました。

「フロリーナ、そろそろディエンドライバーを返したまえ。これでボクが信用に足りる人物だと分かっただろう？」

わたしは大樹さんと出会った時、用心のため武器の提出を求めました。ディエンドライバーとは、その時に預かった変な形状をした武器なのでしょう。後で耳にしたのですがこれは『銃』と呼ばれる武器で、取っ手についた引き金を引くと弾が飛び出す言わば弓に近いものなのだそうです。

「大樹さんの武器を預っていたんだね。彼は悪い人ではないから、ディエンドライバーを返してあげて」

セリス様の一言もあつて、わたしはディエンドライバーと呼ばれる武器を大樹さんに返しました。大樹さんはディエンドライバーを収納すると、紅茶を飲み干したティーカップを皿に置き、ごちそうさまとディアドラ様に一言述べて退室しました。

「母上、お腹が空いてきました。ユリウスが来る前に昼食を済ませましょう」

「そうね。フロリーナ、手伝ってちょうだい」

「はい！」

あともうちよつとでユリウス王子たちが到着するので、それまでに昼食をすませるべくわたしとディアドラ様は支度に取り掛かりました。

正午を過ぎ、ユリウス王子とパント様がシアルフィに到着されました。

ユリウス王子はグランベル王アルヴィス陛下とアイーダ王妃の一人息子で、ミドルネームはサイアス。セリス様の従兄弟にあたるお方です。とても真面目で勉強熱心だと聞きますが、セリス様の前では歳相応の一面を見せるようです。

一方のパント様は十二聖戦士の一人トードの血を引くグランベル王国の名門貴族フリージ家の当主で、神器『トールハンマー』の継承者。妃のルーズ様との溺愛ぶりですっかり有名になっているのだとか。ちなみにパント様とお亡くなりになられたシグルド様とは幼馴染であるようで、その縁でディアドラ様やセリス様とも交流があります。今回パント様はユリウス王子の護衛兼お目付け役として同行されているようです。

「ユリウス、久しぶりだね」

「こつちこそ会えて嬉しいよ」

互いに親しげな表情を交わすセリス様とユリウス王子。二人は早速お喋りを始めるため、居間に向かわれたようです。

そして、その場に残されたパント様に赤髪の青年チェイニーさんが声をかけました。

「あんたがフリージ公パントだってな。ちょっといい物見せたいからついてきてくれないかな」

相手の身分に関係なく、チェイニーさんは普段の口調で接します。パント様も気にしないのか、チェイニーさんの口調を咎めることは

ありませんでした。

「よかるう」

「よっしゃ、そんじゃ訓練場に行くぜ。フロリーナ、海東大樹って奴を呼んできてくれ」

チエイニーさんは一体何を見せるのでしょうか。大樹さんの協力も必要なようで、相当大それたものなのでしょう。わたしは大樹さんのいる食堂に向かい、ちょうど昼食を終えた大樹さんに訓練場に来てもらうことをお願いし、大樹さんを訓練場へと案内しました。

「バーハラ事件でこの世界を襲撃した魔物、聖戦士でも退けるのが難しかっただろ」

「うむ、アルヴィス王でさえ深傷を負われたからな」

「そこでだ。うちらも他世界の先端技術を導入して、軍事力を強化するのはどうだい？」

わたしたちの世界の戦力は剣士や騎兵、魔道士が主力。しかし、それでは魔物たちに対抗できず、今までの武器に変わる技術の開発が必要であるという認識がグランベル政府内に浸透していました。チエイニーさんはわたしたちの世界より科学力の発展した異世界から技術を導入し、次の魔物の襲撃に備えるべきだと主張したのです。

「私もそう考えていたところだ。ところでチエイニー、君は異世界を渡り歩くことができるそうだね？」

「もちろんさ」

「そこで君に異世界の先端技術を収集して、我々に紹介してもらいたい」

「ああ、その一つなら今すぐ見せられるぜ」

パント様の要請に応じ、チェイニーは手に下げていた銀色のケースを開くと中からベルトらしきものが出てきました。バックルの部分は大きく、中央部に球状のオブジェが填められておりました。

「こいつはオーズの世界で開発された、『仮面ライダーバース』に変身できるベルト・バースドライバーだ」

「仮面ライダー……か。先のバーハラ事件でセリス公子とディアドラ公妃を救ったという、異世界の戦士か？」

「そいつとはちよつと違うんだけどな。でもこいつを身につければ誰でもライダーの力が手に入るぜ！」

仮面ライダー——聖戦士直系を凌駕する力を持つ、異世界の戦士。そのライダーの力が誰でも身につけられるとチェイニーさんは言うておりました。そのチェイニーさんは、仮面ライダー・バースのデモンストレーションを行うべくベルトを装着しました。

「このセルメダルをバースドライバーに入れば、たちまち変身完了ってとこだ」

チェイニーさんが左手に持った銀色のメダル。これは『オーズの世界』という異世界に巣食う怪人グリードの肉体を形成するセルメダルと呼ばれるもので、バースはこのメダルを動力源に動いているのだそうです。そのメダルをチェイニーさんは上に向けて弾き、宙に舞ったメダルをそのまま左手で握りました。前から見ると、まるでガッツポーズをしているかのようです。

「変身！」

チェイニーさんは掛け声と同時にセルメダルをバースドライバーに投入し、バックル左部分のダイヤルを回します。すると、カポー

ンという音と同時に銀色と黒のスーツが生成されてチェイニーさんの体を包んで行き、異型の姿へと変えました。それは銀色の鎧を纏ったかのような胸部と肩部、顔の部分は黒いU字状の装飾がありこれは眼にあたるのだそうです。わたしやパント様他この世界の住人はチェイニーさんの変身したバースの姿に驚きを隠せませんでした。

「よっしゃ、さあ行くか。……海東大樹って言ったよな、確か仮面ライダーディエンド……かどやつかさ暁の女神の世界で門矢士って奴に会って聞いたことがある。早速ディエンドに変身してくれないか」

チェイニーさんは視線を大樹さんに向けると、仮面ライダーに変身するよう頼みました。それにしても、さっきわたしの持っていたディエンドライダーが、仮面ライダーに変身するための道具だったなんて。世の中何があるかわからないものです。

「お安い御用さ」

大樹さんは気軽にチェイニーさんの頼みを受け入れ、ディエンドライダーにカードを差し込んで右手で高く掲げました。

「変身!!」

【KAMEN RIDE DIEND】

掛け声を発した大樹さんの周りを無数のシルエットが飛び回り、一瞬で大樹さんの体を包みました。その瞬間、大樹さんの体はシアン色のスーツを纏い、水色と黒のストライプ模様の顔面を持つライダー・ディエンドへと変身したのです。

「ディエンドにはライダーを召喚する能力があるんだったな、早速

何でもいいから適当なライダーを出してくれ」

チェイニーさんはさらにライダーを召喚するように言いました。ディエンドの能力、それはライダーを召喚すること。そんな力を持つていた大樹さんは、とても凄い人なんですね。

大樹さんはチェイニーさんの言葉に頷いて新たにカードを挿入し、取っ手についたスイッチを押しました。

【KAMEN RIDE RIOTROOPERS】

ディエンドライバーの孔から人型のシルエットが飛び出し、同じ姿をしたライダーが五人も出現しました。先ほどの音声からライオトルーパーという名前なのでしょう。外見はディエンドやバースほど味気のあるものではなく、貧相な印象さえ感じました。

「さあかかって来い！」

チェイニーさんはライオトルーパーたちを挑発すると、五人一斉に襲いかかられました。そんなことで慌てることもなくチェイニーさんは銃型の武器・バースバスターを構え、ライオトルーパーめがけてメダルの銃弾を放ちました。しかしライオトルーパーたちも怯みながらも間合いを狭めてきます。

「こいつで行くか」

セルメダルを新たに取り出し、チェイニーさんはバースドライブにメダルを挿入しました。

【SHOVEL ARM】

バースドライバーから音声の流れ、バースの左手にシヨベルアームという鈍器のような武装が出現しました。チェイニーさんは襲いかかってきたライオトルーパーの一撃を巧みにかわしつつ、シヨベルアームで的確にカウンターを叩き込みます。

「もういつちょ！」

【D R I L L A R M】

今度は右手でセルメダルを投入し、右腕にドリルアームを出現させます。先端はとも太い錐揉みのような形状をしており、自動的に回転を始めたのです。チェイニーさんはドリルアームとシヨベルアームを拳闘のように構え、いつも通りにカウンター主体の戦法でライオトルーパーたちを一蹴し、ダメージに耐え切れなくなったライオトルーパーたちを次々と消滅させていきます。

こうして五体のライオトルーパーを片付けると、チェイニーさんは元の姿に戻りました。それと同時にバツクルに投入したセルメダルが射出されましたが、すぐに消滅したのです。

チェイニーさんの見せたバースの強さに、この世界の誰もが驚嘆の声を上げます。もちろん、わたしも例外ではありません。

「さて、誰かバースを体験したい人いない？」

チェイニーさんがベルトを外し、バースの装着者を募集します。それと同時に大勢の人が名乗りを上げますが、突然チェイニーさんの側に乱入した女性がベルトを強引に奪い取ったんです。

「私に変身します」

「ルーテさん？」

彼女はルーテさん。シアルフィの城下町に住む魔道の研究家で紫色の髪をもち、自分を優秀であると豪語する変わり者の女性。そんな彼女もバースに興味を持たれたのでしょうか。

ルーテさんはバースドライバーを装着し、セルメダルをバックルに投入します。

「変身」

ルーテさんはダイヤルを回すと同時に仮面ライダーバースに変身します。そしてルーテさんはディエンドを見るとこう要求したんです。

「その仮面ライダーディエンド、うんと強いライダーを召喚してください」

「いいのかい？」
「私、優秀ですから。しかし才能も披露しなくては意味がありません」

大樹さんはカードを取り出し、ディエンドドライバーに挿入します。

【KAMEN RIDER G3-X】

すると、ディエンドドライバーからシルエットが放たれそこに青いアーマーを纏ったライダー・G3-Xが出現します。他のライダーより鈍重そうな外見で、まるでアーマーナイトを彷彿とさせます。

ルーテさんはバースバスター、G3-XはGM-01と呼ばれるディエンドライバーに似た銃型の武器を構え、同時に射撃しました。

「見て、ユリウス。あれが仮面ライダーだよ」

「仮面ライダーは父上から話を聞いてるけど、生で見れるなんて最

高だよー!!」

セリス様とユリウス王子もバースとG3-Xの模擬戦を見に来たようです。異世界の戦士の対決は、子供心を踊らせるものがあるのでしょうか。

ルーテさんが変身するバースとG3-Xは双方の弾が命中し合い、互角の射撃戦を繰り広げます。その間にもルーテさんは魔道書を構えます。□が見えないのでわかりませんが、詠唱を始めたのには違いありません。G3-Xの方はというとGS-03という右腕に大剣のついたパーツを装備し、ルーテさんに斬りかかります。ルーテさんもそれに対応し、詠唱しつつバツクルにメダルを投入します。

【CRANE ARM】

ドリルアームと同じくバースの右腕にパーツが出現しますが、それとはまったく形状が違いました。ルーテさんは続け様にパーツの先端部を射出し、G3-Xにぶつけて怯ませます。射出したパーツはワイヤーで繋がれており、ルーテさんはそのワイヤーでG3-Xを捕縛し身動きがとれないようにします。それと同時に雷鳴が二度鳴り響き、G3-Xめがけて二発の雷が落ちたのです。雷を受けてもがき苦しむG3-X。おそらくサンダー系の魔法には違いありませんが、今まで二発同時に雷を発生できる魔法は見たことがありません。これも、ルーテさんが独自に開発した雷魔法なのでしょう。

【CELL BURST】

ルーテさんとはじめとしてバースの必殺技・セルバーストを放つべくセルメダルをバツクルに投入し、バースバスターの先端にエネルギーを充填します。そしてバースバスターから放たれたビームはG3-Xを包み込み、そのまま消滅させたのです。

「ライダーすらも倒せるとは、流石はバース！」

「いや、あの二発同時に放てる雷魔法も凄い」

観客からは様々な感想が飛び交う中、ルーテさんは変身を解除し元の姿に戻りました。

「魔法とライダーの力を同時に使いこなすとは、優秀というだけではありませんね」

わたしはルーテさんに声をかけました。するとルーテさんは手に持った魔道書を掲げ、口を開きました。

「これは、将来の魔物の襲撃を想定して私が開発した雷魔法『ダイムサンダ』。私の優秀さとライダーの力の合わせ技をもってすれば、魔物など赤子の手をひねるようなものです」

ルーテさんは自信満々な言葉を残し、チェイニーさんにバースドライダーを返して立ち去りました。受け取ったチェイニーさんはパント様にバースの売り込みを始めたようです。

「まあこんなもんだ。どうだい、採用してみないかい？」

「そうだな。でも他にも優れた技術があるかもしれない、それらとバースをコンペにかけて我が国に最適な技術を採用しようと思う。引き続き技術の収集を君に依頼する」

こうして仮面ライダーバースのお披露目は終わりとなりました。わたしはセリス様たちと合流し、バースの活躍について感想を言い合いました。

「仮面ライダーバース、すごかったですね」
「うん。ぼくも驚いたよ」

セリス様の眼はとても輝いていました。その一方で、ユリウス王子は意味深な意見を述べられたのです。

「でも、ライダーの力がぼくたちの世界に浸透すれば、聖戦士は必要とされなくなるんじゃないのかな」

何気に仰せられたユリウス王子の言葉。確かに聖戦士はこの世界で最も強い力を持ち、今まで平和を守ってきました。でも、しかも聖戦士の力に匹敵する力が誰でも扱えるライダーに取って代わるとなると聖戦士は居場所を失い、歴史に埋もれた存在となってしまうことは十分考えられます。でも、わたしにはそうは思えません。

「そんなことないと思いますよ、ユリウス王子」

「本当かなあ……」

「この世界を守る存在がライダーに取って代わるようなことがあっても、みんなは聖戦士を必要としてくれるはずですよ。確信はないけれど、きっとそうですよ」

わたしとて未来を予知できるわけではありませんが、不安になるユリウス王子を元気づけることはできます。今は王子を安心させること、そのために適切な言葉を投げかけるのがわたしのできることだったのです。

その後、セリス様はユリウス様に大樹さんの言っていたことを話し始めました。

「ユリウス。大樹さんに聞いたんだけどこの世界と同じ異世界があって、そこではぼくは魔物の王みたいなんだ」

「君が？」

「うん。まだわかんないけど、異世界のぼくは人間を殺して魔物だけの世界にしようとしてる」

セリス様の表情は明らかに不安げなものでした。それどころか、何かに怯えている様子さえ見えたのです。

「ぼくも、そうなりそうで怖いんだ。君や母上やフロリーナ……いや、ぼくに親しくしてくれるみんなが消えてしまったら……」

「ううん、君なんかよりもぼくの方が悪い人になりそうだと思う」

セリス様の不安を聞いたユリウス王子は、意外なことを口にされました。

「すっかりした君が、悪い人になるとは思えないけど……」

「もしそうなった時は、君の手で止めて欲しいんだ。いや、殺してくれてもかまわない。君の手で討たれるなら、ぼくは本望だよ」

自分が悪に堕ちたら止めて欲しいと、ユリウス王子は心を許せるセリス様に願います。ひょっとしたら王子も、セリス様の言葉に何らかの意味を感じ取っていたのかもしれない。それが何を意味しているのかは、わたしにはわかりません。

夕暮れになり、王子とパント様はワープの杖を使い、バーハラへと帰って行きました。セリス様は王子にまた会おうねと言かわして、わたしやディアドラ様と一緒にふたりの帰路を見送ったのでした。

翌朝、わたしたちは異世界へ向かうべく身支度を済ませ、大樹さんと合流しました。わたしとセリス様はいつも通りの格好ですが、ディアドラ様はノースリーブの上着と丈の短いスカートに黄緑色のケープを羽織った身軽な出で立ちをしておりました。長旅になりそうですね。動きやすい方がいいのでしょうか。

「未来のユリア様も付いて行きたかったでしょうね」

「そうね。でもシアルフィとグランベルのためにも、万一のことを考えてあの子に残ってもらったのよ」

「それでも、チェイニーさんあたりに頼んで勝手に付いて来そうな感じはします」

「ええ、あの子なら十分やりかねないわね」

未来のユリア様は十二聖戦士ヘイムの直系とバルド傍系の血筋を持つお方、その血筋を断絶させないための保険として残ってもらったのは良い判断だとわたしも考えます。でも、彼女は活発なので勝手に追って来る可能性は高いでしょう。でもそれが、この世界のユリア様の良さなのかもしれません。

「みんなこれでそろったみたいだね、さあ行こう」

大樹さんはディエンドライバーを構えようとすると、突然チェイニーさんの声が響いてきました。彼の手には大きめのポーチがあり、その中にバーストライバーとバースバスター、多量のセルメダルが入っていました。

「待ってくれ、ファンガイアのいる世界に行くんだろ？」

「ええ、そうですけど」

「ならバーストライバーも持ってきたな。備えあれば憂いなしって言うだろ」

チエイニーさんはバースドライバーの入ったポーチをわたしに手渡しました。それを受け取ったわたしは、自分の腰に下げました。

「チエイニーさんは行かないんですか？」

「おれはちよつと別の世界に行く用事があつてな、それを済ませたらあんたらの後を追うよ」

チエイニーさんが去った後、大樹さんがディエンドライバー引き金を引きました。すると、前方に世界をつなぐオーロラが現れたのです。

わたしたちはそのオーロラを潜って異世界へと渡ります。そこは、廃墟と化したシアルフィの街並み。空は不気味に赤く染まり雷鳴の鳴り響く、地獄のような世界でした。

つづく

第2話 H?ile

わたしたちが訪れた世界、そこに広がる光景は廃墟と化したシア
ルフィの街並みでした。建物はほとんどが倒壊し地面には無数の頭
蓋骨が転がっており、わたしたちはその凄惨な光景に戦慄を覚えま
した。

「ひどい……」

セリス様が青ざめた表情で辺りを見回します。わたしたちの世界
が一瞬で壊滅したような印象を与えるのですから、動揺せずに入ら
れません。

「ここが、君たちの世界の裏世界さ。鴉からすさえ鳴かない、まさに死の
世界と言ったところかな」

大樹さんはこの世界を一言で評しつつ、異世界のセリス様のいる
場所へとわたしたちを先導します。その道中で枯れつつある草木や
飢餓にあえぐ小動物を見かけ、人の気配さえ感じないおぞましい世
界にわたしたちは身震いしながらも進んでいきます。

「これも、この世界のセリスたちの仕業だということですか？」

「ちよつと違います。正確にはこのセリス一人の所業と言ってい
いでしょう」

「そんな、嘘でしょう……」

ディアドラ様も異世界の同一の存在とはいえ、息子が行った所業
にショックを受けているようです。当然、わたしも同じ気持ちです。
なんたつてわたしたちの持つセリス様のイメージ、それはとても優

しく人思いのお方なのですから。

「いる……」

突然、セリス様が何者かの気配を感じたようです。

「母上、感じますか？」

「ええ。人間ではない、邪悪な気配が」

ディアドラ様も同様に同じ気配を察知します。わたしや大樹さんは何も感じないのに二人は気配を感じておられるのです。実は、ふたりの祖先である聖戦士ヘイムは霊との視覚・対話能力や人非ざるものに対する感知能力などを持つシャーマンだったと伝えられており、ディアドラ様とセリス様が披露された能力はその一つだと言われています。そのせいで、ディアドラ様は亡くなられたシングル様の霊と夜な夜なひとときを楽しまれているなんてブラックジョークが街中に広まっていったのだとか。

その刹那、茂みから何者かが飛び出してきました。それは、ステンドグラス状の表皮を持つ人にあらざるもの……。

「ファンガイア！ ボクたちを襲うつもりか！」

姿を表したのは、クモを彷彿とさせる姿を持つスパイダーファンガイア。大樹さんは啖呵を切ると同時に、ディエンドライバーとディエンドの描かれたカードを構えます。だが、その二つが森の奥へとひとりでに飛んでいったのです。

「何だと！？」

突然の出来事に唖然とする大樹さん、そのディエンドライダーを奪ったと思われる存在を、セリス様が見つけたようです。

「みんな、あれを見て！！」

セリス様が視線を向けた先には、杖を持った人間らしき姿がありました。その姿は瞬時に森の奥深くへと姿を消したのです。

そうこうしているうちにも、出現したファンガイアは今に襲いかからんとばかりにわたしたちを睨みつけてきます。

「フロリーナ、バースドライダーを貸したまえ」

「は、はいっ！」

大樹さんはわたしにバースドライダーを要求すると、わたしは急いで腰に下げたポーチからバースドライダーとセルメダルを取り出し、大樹さんに渡しました。大樹さんは手にとったバースドライダーを装着すると、ディエンドに変身する要領で左手に持ったセルメダルを構えます。

「変身！」

大樹さんは掛け声と同時にセルメダルをバツクルに投入し、右手でダイヤルを回します。すると大樹さんの体にアーマーが出現し、彼は仮面ライダーバースへと変身を遂げたのです。変貌した大樹さんの姿にわたしとセリス様が平然と見守る中、ディアドラ様がただ一人既視感を抱いておられたのです。

「あのライダー、精霊の森で……」

「母上、バースを知っているのですか？」

「以前わたしと土さんで行方不明になっていたシグルド様を捜しに行っていたとき、突然あのライダーが土さんに襲いかかってきたのよ」

意外なことにディアドラ様はバースに見覚えがあったのです。その時は土さん——通りすがりの仮面ライダーを名乗る、異世界の旅人さんを襲ったところをその目で見ておられました。

「でも、変身していた人はわたしの知っている人ではなかったわ」
「そのライダー、正体を表したんですか？」

「いいえ、わたしの光魔法を受けてすぐに消えたから確認しようがなかった。だけど、その人からはわたしの記憶にある人とは違うオーラを放っていたの」

ディアドラ様は先祖より受け継がれるシャーマンの力である程度変身者の素性を把握していたようです。それでもバースに変身していた人がすぐに去ってしまったため、正体はわからずじまいといったところですね。

さて、バースに変身した大樹さんはそのままバースバスターを受け取ると、ファンガイアに向けて銃撃を行います。

「これがバースか、なかなか悪くない」

大樹さんはバースバスターで銃撃しつつ、セルメダル二枚をバツクルに投入します。

【CATERPILLAR LEG DRILL ARM】

すると、大樹さんの右腕にドリルアーム、両脚にキャタピラレッグと呼ばれる移動力とキック力を強化するパーツが装着されます。

大樹さんはキャタピラレッグの機能で高速移動しながらスパイダーファンガイアを翻弄し、キックやドリルアームの一撃を巧みに与えていきます。キャタピラレッグでの移動を見てみると、足を動かさず滑っているように見えます。これもわたしたちの世界より進んだ、異世界の先端技術なのでしょう。

そうこうするうちに、大樹さんはドリルアームをファンガイアの胸部に挟りこませます。ドリルが抜かれ、青い血の飛沫があたり一面に飛び散ります。開いた穴の奥からは不気味に鼓動する心臓が見え、わたしは生理的嫌悪感から一瞬目を背けてしまいました。

「とどめだ！」

大樹さんは露出したファンガイアの心臓に、バースバスターの銃弾を叩き込みます。心臓を破壊されたファンガイアは、ガラスのように砕け散って絶命したのです。その直後に大樹さんは変身を解き、バースドライバーに投入されたメダルは排出されて消滅します。

「さっきの人影、おそらく大樹さんのディエンドライバーを奪った張本人のはずです。急いで追いましょう」

「そうですね、ディアドラさん」

わたしたちは駆け足で人影が消えた森の奥へと踏み出して行きました。

ここは、鳥のさえずり声すら聞こえない不気味な静けさに満ちた森。そこに敷かれた獣道をわたしたちは踏みつつ進んでいきます。突然、大樹さんはあることに気が付きます。

「この方角、おそらく異世界のセリスの居場所へと通じているな」

「この世界のわたしのどこへ？ それじゃあディエンドライダーを奪ったのは……」

「挑むつもりか…… ファンガイアに……」

大樹さんは、ファンガイアであるこの世界のセリス様を倒すためにディエンドライダーを奪ったのだと推測します。

やがて、わたしたちは森を抜けると山道へ入りました。人影もすっかり見失ってしまい、疲れも見えたためかわたしたちは歩きになりました。

「見失ってしまいましたね、大樹さん」

「でもファンガイアに対抗するのにライダーの力は最適だ。慌てずともこの世界のセリスの居場所にたどり着けば取り返せるはずさ」

不確定要素なのでから大樹さんと完全に自信を持つことは難しかったでしょう。それでも、ディエンドライダーを取り戻すためには僅かな可能性にかけるしかなかったんです。

しかし、空も赤黒く染まり始めてきました。日が落ち始めたのでしょうか。それと同時に、ディアドラ様が湯気の立つ場所を見つめます。

「ねえ見て、温泉があるわ」

そこから伝わってくる熱気、見るからに温泉でした。着替え用の小屋があることから、かつては人で賑わったことが伺えます。近くには雨風凌げそうな洞穴もありました。

「今日はここで野宿しましょう」

大樹さんの提案にわたしたち三人は頷きました。わたしたちは薪木を集めて火をつけ、ディアドラ様がお作りになられたオニオンスープを食べた後温泉に入ることになりました。順番は先にセリス様とディアドラ様が、続いてわたし、最後に大樹さんが後に入ることになりました。

セリス様とディアドラ様の入浴は一時の団欒、話も弾まれておられるようでした。

「母上、こうやって一緒にお風呂に入るのは久しぶりですね」
「そうね」

「あの時は、父上もご健在でした。綺麗な星空の下、一家で露天風呂に入った時のこと未だに覚えています」

「わたしもよ……でもここは赤黒い空の下、せつかくの雰囲気も台無しね」

「ううん、わたしは母上と一緒に入れるだけで十分です」

互いの顔を見合うセリス様とディアドラ様。二人は互いに微笑みあった後、突然ディアドラ様がセリス様のほうへ体を寄せました。

「ねえセリス、ちょっといい？」

ディアドラ様はあろうことが、セリス様を自らの胸に顔を埋めるようにして抱いたのです。セリス様は突然の行為に取り乱します。

「母上、何を！？」

「こうやってセリスを抱くのも何年ぶりかしら。赤ん坊の頃は腕で抱えられるくらい小さかったのに、今じゃこんなに大きくなって…」

…」

左腕をセリス様の背中にかからめ、右手で優しく頭を撫でるディアドラ様。セリス様は頬を赤く染めながらも母親の体から引き離れま
す。

「やめてくださいっ！ もうそういう歳じゃありませんっ！！」

「うふふっ、顔赤くなっちゃって。可愛い」

ディアドラ様は、顔を赤くするセリス様をからかうように笑います。一方のセリス様も反発しているように見えてまんざらでもなさそう。ひょっとして、もうこの歳で性にお目覚めになられたのでしょうか。

その頃、わたしは大樹さんとふたりきりで岩肌に座り、赤黒い空を見ておりました。

「フロリーナ、野宿はこれが初めてかい？」

「いえ、小さい頃お姉ちゃんとキャンプしたことがあります。その時は、とても綺麗な自然の中で生活しているって感じで、生きてるってことを実感できたんです。でも……」

「でも？」

「赤黒い夜空に虫の鳴き声すら聞こえてこない、まさに死の世界にいるって感じです」

大樹さんいわく、この世界は死の世界。普段わたしたちが暮らしている生命の息吹にあふれた世界と比べると、確かにそのように形容してもおかしくはありません。

「そうだね、ボクもこの世界はあまり好きじゃない。ディエンドライバーを取り戻してお宝手に入れたら、さっさとこの世界を去ろう」

大樹さんも同じ考えでした。それほど、この世界にはわたしたちを拒絶させる何かがあるのでしょう。ここでわたしは話題を変えます。

「そういえば大樹さん、あなたはお宝探しが趣味だそうですね」

「趣味というより、ライフワークってとこかな」

「ライフワークですか。ディアドラ様の言っていたメダリオン以外でいままでどんなお宝を見つけてきましたか？」

「アギトの世界のG4チップ、カブトの世界のクロックアップシテム、響鬼の世界の秘伝書……他にも数えきれないほど見つけてる」

秘伝書はなんとなく想像がつくのですが、それ以外のチップやらクロックアップやらわたしには何なのかわかりません。大樹さんは、お構いなしに話を続けます。

「もちろん、君たちの世界でもお宝を手に入れたさ。家族愛というお宝をね」

「家族愛、ですか？」

「そう、家族愛だよ。最初はナーガの書を手に入れようと思ってたんだ。でもボクはセリス君たちと触れ合って、家族愛の素晴らしさに気付いたんだ。ボクの家環境はあまりよくないんだけど、それだけに味わい深いものがあつたね。だから、今ではナーガの書より価値のあるお宝を手に入れられたと思っているよ」

それでもまだ世界には知られざるお宝がある、と大樹さんはおっしゃっていました。それら全てを手に入れるまで、きっと大樹さんの旅は続くのでしょうかね。

そして、わたしたちは温泉のある山道から四日ほどかけて異世界

のセリス様の居場所らしき場所へとたどり着きます。そこは、広大なクレーターが広がっております。

「これも、この世界のセリス様がしたんですか……？」

「まあね」

ファンガイアとして強大な力を持つこの世界のセリス様。その力は大地を吹き飛ばし、クレーターが出来上がるほどのものだと言います。

「そして、かつてこの地はこの世界の人間の都だった」

「都……まさか……」

大樹さんが続けて発する都という言葉に、ディアドラ様が反応します。次に出た言葉はわたしたちを驚愕させるものだったのです。

「バーハラ。グランベルの都さ」

かつてこの地に、この世界のグランベルの都バーハラがあったというのです。わたしたちは一都市が消滅した事実に愕然としながらも、中心部にある白い建物を見出しました。

「あの白い建物が、この世界のセリスの居城だ。行こう」

わたしたちはクレーターの斜面を慎重に降り、この世界のセリス様の居城を目指します。

続いて建物付近に近づいたわたしたちは、建物が人間の頭蓋骨で出来ていることに気づきました。

「この建物……人間の頭蓋骨で出来てるといふの……？」

おそらくこれらの頭蓋骨も、ファンガイアたちが殺戮を繰り返した末に集まったものなのでしょう。

それにしても、なぜこの世界のセリス様を始めとするファンガイアたちは人間たちを殺戮するのでしょうか。怪人だから？ いや、そうとも限らない……。この時わたしには、もっと深いなんらかの理由があるのではないかという考えが思い浮かびました。きっと背後には、見えない何かが蠢いている。

やがて、わたしたちは玄闕らしきところへと差し掛かると、前方に二つの人の影が見えました。

「あれが、この世界のぼくなのか……？」

一人目は黒い衣服に身を包んだ青髪の青年。確かに一目見ただけでセリス様が成長したような姿だとわかるのですが、目付きは悪人そのものといっているほどで、光のない鋭いものでした。

そしてもう一人は銀髪の少女の姿をしていました。しかも、わたしたちがよく知る存在でした。

「ユリア様！？」

それはわたしたちの世界で未来からやってきたユリア様にそっくりでした。違いは清楚な白いローブを身にまとうていること。左手には杖を、そして右手には大樹さんの武器・ディエンドライバーがありました。なんと大樹さんのディエンドライバーを奪った犯人は、この世界のユリア様だったのです。

【KAMEN RIDE DIEND】

突然、この世界のユリア様はディエンドライダーにカードを挿入し引き金を引きます。無数のシルエットがユリア様の周囲を旋回し、一瞬で肢体を包んでユリア様を仮面ライダーディエンドへと変身させます。

「やはりこの世界のセリスと闘うただけに、ディエンドライダーを奪ったんですね。それにしても、奪ったのがこの世界のユリアだったなんて……」

自らが産んだもう一人の子の、異世界における同一の存在。彼女の大胆な行動にディアドラ様が呆気にとられている中、この世界のセリス様が言葉を発しました。その口調は、セリス様と思えないほど乱暴なものでした。

「ハッ、またやられに来やがったか。まあいい、死にたいなら今すぐ殺してやるよ」

この世界のセリス様は黒いコウモリらしき生物を呼び寄せ、右手で掴むとそのコウモリに左手を噛み付かせます。

「あれは、キバット族のモンスターか」

大樹さんがコウモリの正体について解説します。キバット族は『キバの鎧』を管理し、ファンガイアに与える使命を持ったモンスターの一族。その一族の一人がこの世界のセリス様と行動を共にしていたのです。

「ガブリー!!」

キバット族に噛み付かれると同時にベルトが出現し、この世界の

セリス様の頬にステンドグラス状の模様が現れます。

「変身……」

この世界のセリス様は静かに一言発し、ベルトにキバツト族を装着します。すると、この世界のセリス様の身体を暗黒の波動が包み次の瞬間に異型の姿となって現れます。その名はダークキバ——
国を滅ぼす力を持つ、最強最悪の魔人であつたのです。

つづく

第3話 Mi?gestalt

一面に広がるクレーター、かつてはわたしたちの世界と同様にグランベルの都バーハラがありました。しかし、今はクレーターの中に佇む無数の頭蓋骨で作られた異世界のセリス様の居城があるだけです。

そして現在居城の入り口にて、異世界のセリス様とユリア様の対決が始まったのです。

一方の異世界のユリア様は大樹さんから奪ったディエンドライダーで変身したシアン色の仮面ライダー・ディエンド、もう一方の異世界のセリス様は黒と赤を基調とした外見で、緑色の複眼を持つ異型の存在・ダークキバ。大樹さん曰く、この世界に存在する「仮面ライダー」。つまりこれは二人がライダーとして闘うことを意味しているのです。

まず最初に、この世界のユリア様が変身されたディエンドがディエンドライダーを構え、ダークキバを銃撃します。しかし、異世界のセリス様が変身したダークキバは銃撃を受けてもひるむ様子を見せず、両腕を広げた前傾姿勢で走ってディエンドに間合いを詰めます。ダークキバとディエンドが互いに拳を繰り出し、両者の腕が交差します。その瞬間鈍い音が鳴り、頬に拳を受けたディエンドが吹き飛ばされます。

「ユリアー!!」

セリス様とディアドラ様が同時に、異世界のユリア様の名前を叫びます。その叫び声を受けてか、悶々としながらも立ち上がるディエンド。一方のダークキバは平然と様子を伺っています。

今度はディエンドが高速移動でダークキバの周囲をまわり、パン

チやキツクを的確に叩き込んでいきます。

「そんなもん、素で出来んだよ!!」

ダークキバは余裕の態度をみせ、高速移動で背後に回ったディエンドの攻撃を同様の高速移動で交わし、攻撃の隙についてカウンター攻撃を放ちます。再び地面に崩れ落ち、力なく転がるディエンド。

「さあ、お遊びはここまでだ……」

ダークキバは右手を前に突き出し、念じる素振りを見せます。するとディエンドの背後にコウモリのような紋章を象った障壁が現れます。ダークキバはディエンドを障壁に引き寄せ、拘束すると同時に電撃を流します。異世界のユリア様の悲鳴と異世界のセリス様の高笑いが辺り一帯にこだまします。

このままでは異世界のユリア様があぶない……と思ったその時、大樹さんがダークキバに声をかけます。

「おい、君にそっくりな異世界の少年を連れてきたぞーっ!! さっさとお宝くれないかー!!」

ダークキバは大樹さんの声に反応したのか、この世界のユリア様への攻撃をやめました。同時に障壁も消滅します。

「ふん、命拾いしたな」

異世界のセリス様はダークキバの変身を解くと、大樹さんに「待ってたぞ大樹、別の世界の俺を連れてきてくれたか」と一瞥してかわたしたちの方へと近づいてきます。一方のユリア様もディエンドの変身が自然に解け、蓄積したダメージに苦悶する姿をさらけ出

しておりました。

「ディエンドの力は君には使いこなせない、返してもらおう」

大樹さんは、この世界のユリア様が落としたディエンドライバーを取り戻します。その傍らで、異世界のセリス様は静かにわたしたちの世界のセリス様へ歩み寄ります。二つの世界の同じの存在の、初めての邂逅——まず先に口を開いたのは異世界のセリス様でした。

「ほう、確かに俺に似ている」

「……………」

表情を見せず、冷やかな視線を送る異世界のセリス様。一方のわたしたちの世界のセリス様は一言も発さず、もう一方のセリス様の顔を見つめます。

「お前の瞳は、生気に溢れているな。産まれてからずっと天国で育てられた天使の瞳だ」

生気に満ちた宝石のような輝きを放つわたしたちの世界のセリス様の瞳と、異世界のセリス様のあたかも濁ったかのような光なき瞳。その二つの瞳が合わさった時、わたしたちの世界のセリス様は威圧感を感じたのか一瞬恐怖感を感じたようにわたしは見えました。

「だがな……そんな瞳も、一瞬の刹那で光を失う。天使は誰もが産まれた時は天使だ。だが……天国から追放された天使は墮天使となり、一生天使には戻れないんだよ……」

まさにセリス様を見下すかのような上から目線の言葉を放つもう一人のセリス様。わたしも、これがセリス様なのかと一瞬戸惑いを

覚えました。そこで、わたしたちの世界のセリス様が口を開きます。

「ねえ、あなたはファンガイアなんだよね？」

それは、異世界のセリス様への問い掛けでした。

「当然だ、何言ってやがる」

「それにしてもまるであなたが最初は別の存在だったように聞こえるんだ。ひょっとしたら今のあなたであることを、あなたは望んでいないんじゃないのかな」

セリス様は何かに気づいたかのように、異世界のセリス様を追求します。

「ほざけ、俺はファンガイアだ。ファンガイアである俺に天使も堕天使もねえんだよ」

自身がファンガイアであることを執拗に主張するこの世界のセリス様。しかもファンガイアであることを肯定しているようにさえわたしにも感じられました。でもセリス様は見えない何かを感じたのか、腑に落ちない表情をしていました。

「お前も、いつか他人に拒絶される時が来る。その時お前は、自分自身を保つことできるかな……」

他人からの拒絶——それは、人に裏切られることを指しているのでしょうか。今のセリス様は、確かに母であるディアドラ様、オイフェ様、パント様、チェイニーさんなどからの無償の優しさに囲まれている。わたしだってセリス様を慕って、時には姉のように気遣っている。その世界が一瞬で瓦解した時セリス様がどのようになっ

てしまうのか、わたしには想像に絶するものがあります。

「他にも連れがいるようだな」

続いて異世界のセリス様はわたしとディアドラ様に振り向いて、こちら側をまじまじと見つめてきます。そしてディアドラ様に視線を合わせると、距離を狭めてディアドラ様の前に立つこの世界のセリス様。ディアドラ様の黄色い瞳と異世界のセリス様の紫色の瞳が合わさったまま、時が刻一刻と過ぎていきます。

「あなたが、この世界のセリスなのですね」

ディアドラ様は異世界のセリス様に確認するように尋ねます。それに対して異世界のセリス様は一言も発さず一瞬不気味な笑みを浮かべたその刹那、鈍い音がクレーター中に響き渡りました。

「ディアドラさまぁ！！！」

「母上！！」

なんと異世界のセリス様がディアドラ様の頬を殴ったんです。よろめき、地面に崩れ落ちるディアドラ様。わたしとセリス様は思わず同時に悲鳴を上げました。

「お前の顔を見てるとなぁ、むかついて来るんだよ！」

さらに異世界のセリス様はディアドラ様の後頭部を鷲掴みにすると思い切りディアドラ様の顔を三回も地面に叩きつけます。鈍い音が鳴り響き、地面にはディアドラ様の血痕がついておりました。その時の異世界のセリス様の表情は悪魔としか形容できないものだったのです。

「ハハッ、いいザマだなあ!!」

異世界のセリス様がディアドラ様の頭を掴んだまま彼女の顔を見て、蔑みの言葉を放ちます。ディアドラ様の美しい顔立ちは、ひどく腫れ上がり口や鼻からは血が滴り落ちる無残な様相を見せていました。それは、わたしが目を背けてしまったほどの凄惨さでした。それでもディアドラ様は暴力を振るった異世界のセリス様に弱々しいながらも問いかけます。

「……………それだけ……………ですか？」

「何だと……………」

一瞬、憤怒の表情を見せる異世界のセリス様。それに対するディアドラ様の問い掛けは続きます。

「わたしに何の恨みがあるのかは知りませんが、わたしが憎いのならすぐに殺しているはずです。ファンガイアならなおさらのことでしょう」

「何を言いたい」

「わたしには、あなたがただのファンガイアとは思えません。それどころか、あなたにはわたしたちと同じ人間の心を持っているように思えます。本当はあなたも、人間のように愛することができるのではなくて？」

ディアドラ様も、異世界のセリス様の中にある何かに気づいたかのような言葉を発しました。特に最後の『愛』という言葉強調しておりました。しかし、異世界のセリス様は愛という言葉聞いたとたん、激怒の形相を見せたのです。

「愛だと……愛は俺の最も嫌いな言葉だ！ 女あ……そんなに死にたいなら、すぐ楽にしてやる……！」

すると、異世界のセリス様の頬、顎、鼻、そして瞳に紫がかつたステンドグラスの模様で覆われると同時に周囲に赤い鉤爪のような浮遊する物体が出現します。これが人間のライフエナジーを吸い取るときにファンガイアが使う『吸命牙』です。吸命牙はふわふわと漂い、ディアドラ様のライフエナジーを吸い取るべく近づいてきます。このままでは、ディアドラ様が死んでしまう。わたしは咄嗟にバースバスターを構えようとしますがそれよりも早くセリス様がバースバスターを取り出して構えていました。

「やめろ！ いくらこの世界のぼくでも、母上を殺すのなら許さない……！」

「馬鹿め、この女は人質だ！ お前が攻撃したところでこいつを盾にするだけだ……！」

セリス様と異世界のセリス様の間に挟まれているディアドラ様。確かにバースバスターを撃てばディアドラ様に当たってしまうかもしれない。セリス様は悔しさながら銃撃するのを躊躇します。そうする間にも吸命牙は確実にディアドラ様の首筋に近づいてきます。もう為す術がないと思ったその時、大樹さんのディエンドライバーが銃声を放ったのです。

「何っ……!?」

ディエンドライバーから放たれた銃弾は吸命牙を確実に撃ち落とします。その様子に啞然とする異世界のセリス様。

「美しい女性の顔は大切なお宝だ。お宝を傷つけようとする奴は、

「このボクが容赦しない!!」
「貴様ら……」

異世界のセリス様はディアドラ様を乱暴に投げ飛ばし、わたしは急いで地面に打ち捨てられたディアドラ様に駆け寄ります。大樹さんもディエンドのカードを取り出し、ディエンドライバーに挿入します。

「変身!!」

【KAMEN RIDE DIEND】

大樹さんは徘徊するシルエットに包まれ、ディエンドへと変身します。さらに二枚カードを取り出し、同様にディエンドライバーに挿入します。

【KAMEN RIDE GILLS CHALICE】

するとディエンドライバーから二つのシルエットが放たれ、一方はカミキリムシを彷彿とさせる緑色のライダー・ギルス、もう一方は黒いボディにハートのように見える紅い複眼を持つライダー・カリスが出現しました。ギルスは『アギトの世界』、カリスは『ブレイドの世界』にいるライダーだと、後で大樹さんが教えてくれました。

二体のライダーが異世界のセリス様を包囲すると、異世界のセリス様は全身を一瞬で変化させてダークキバとは別の異型の姿となります。それは、ステンドグラスのような表面を持つ三本の角と胸筋、垂直に出っ張った肩を持つ黒いドラゴンのような怪人の姿だったのです。

ギルスとカリスは同時に異世界のセリス様に攻撃を仕掛け、ディ

エンドもディエンドライバーによる援護射撃を行います。しかし、異世界のセリス様は打撃を受けながらも平然とした様子を見せておりました。

「人間ども……俺を憎め、怒れ、そして拒絶しろ！ その分だけ俺は力を増す……！」

異世界のセリス様は声高に叫びながら、間合いを詰めてきたカリスの腹部に拳を叩き込みます。カリスは三メートルほど殴り飛ばされ、地面に打ち捨てられます。そしてギルスに向けて手のひらをかざすと、突然ギルスの四肢が発火し始めたのです。

「まさか……『バイロキネシス自然発火能力』……！」

異世界のセリス様の見せた能力に、狼狽する大樹さん。さらに意識を取り戻したこの世界のユリア様が立ち上がり、「みんな、逃げて！」と叫びます。

【ATTACK RIDE BLAST】

ギルスが火達磨になって踊り狂ったように悶える最中、大樹さんは『ディエンドブラスト』による高速の連続銃撃を異世界のセリス様に見舞います。それと同時に砂埃が舞い上がり、異世界のセリス様を包みます。

「みんな、ボクの周辺に集まるんだ……！」

大樹さんの言葉に従い、わたしとセリス様、ディアドラ様、そしてこの世界のユリア様が、大樹さんの元に集合します。

【ATTACK RIDE INVISIBLE】

続いて大樹さんの発動したカードの効果によって透明になります。そしてこの世界のユリア様の先導に従って、その場を離れたのでした。

わたしたちはクレーターから北東の方角へと向かい、自分たちの世界のリューベック城にあたる位置まで逃れることができました。その城もシアルフィ同様廃墟と化していたのです。城に入ると、中には緑色の髪をもつ男性がいました。

「ユリア、無事に戻れたのか」

「はい、レヴィン様」

この男性も、レヴィンという名前なのです。無論、わたしたちの世界にもレヴィンの名を持つ男性は存在します。なんてたってわたしの故郷・シレジアの王なのですから。でもこの世界のレヴィン様は浮浪者のような出で立ちをしており、定住していないことがうかがい知れます。

「……ディアドラ？　なんで君が……君は確か……」

レヴィン様はディアドラ様の姿を見るや、大変驚いた表情をしていました。その間にもこの世界のユリア様は奥から取り出してきた杖で、ディアドラ様の傷を癒します。この世界のセリス様によってひどく傷めつけられた顔も、元の美しい顔立ちへと戻ったのです。

「これで大丈夫です。それにしても、あなたはどこかで……。……」

何も……思い出せない……」

この世界のユリア様は、ディアドラ様の顔を見て既視感デジャヴを抱かれました。しかし、彼女は何らかの要因で思い出せない様子。それに答えるかのように、レヴィン様が言葉を発しました。

「この子は名前以外記憶を失っているんだ。それより君たちは一体何者なんだ？」

名前以外の記憶を無くした異世界のユリア様とわたしたちに疑惑の念を抱くレヴィン様。わたしたちは、そんな彼らに自己紹介を始めます。

「わたしはディアドラの息子のセリスと申します。信じてもらえないでしょうが、わたしたちはこの世界の住人ではありません」

セリス様が名乗られた時にレヴィン様がピンと来たような表情を見せましたが、残るわたしたち二人の名乗りを聞くことにしたようです。

「ボクは海東大樹かいとうだいき、それでこの紫色の髪あかの女の子がフロリーナ。ボクは異世界を渡り歩くことが出来ます。それでこの世界にちょっとした用事があつて三人をこの世界に連れてきたんです」

「君たちは異世界から来たというのか、確かに私もそう確信できる。何故なら私の知るディアドラの髪の色はこんな淡紅色あかがかった銀髪ではないし、瞳の色も紫で黄色ではないからな」

どうやらレヴィン様はわたしたちの言い分を信じてくれたようです。ちなみにディアドラ様が若干紅みあかがかった銀髪であるのは母が聖戦士ファラの直系の血統であることによるものらしい、とご自身

がおつしやられておりました。続いてレヴィン様はセリス様に視線を向けました。

「それに君もセリスと言うのか。奴と顔立ちはそっくりだが、健やかに育っている。愛情を注いでくれる母親と信頼しあえる仲間を持てて、さぞ幸せなことだろう。私たちの世界でも、本当はこうなるはずだったのにな……」

最後に意味深な言葉で締めながら、レヴィン様はこの世界のことを知らないわたしたちに状況を説明してくれました。

「かつてはグランベルを拠点にロプト教団が大陸を支配し、今よりマシだが恐怖に怯える日々が続いていた。だがある日、トラキアを支配するファンガイア共が大陸を制覇せんと侵攻してきた。今まで我々人間とファンガイアの力は均衡を保っていたのだが、この時は違った。ある一人のファンガイアが我々の常識では計り知れない強大な力を振るい、大量に人間を虐殺していった。そしてグランベルは実質奴一人によって滅亡した」

「それが、この世界のセリスなのですか？ レヴィン様」

ディアドラ様の問いに、レヴィン様は頷きます。

「こんなはずではなかったのだ。奴は元々人間だった。無論、私たちの世界の君が産んだ子だ。その奴が、よりによってファンガイアと化すとは……」

「では、この世界のわたしも元は人間なのですね」

「ああ。でも何故奴がファンガイアになれたのかはわからない。全容を知るには、奴らの潜むトラキアへ行くしかないだろう」

この世界のセリス様も、元々は人間だったのです。しかもこの世

界のディアドラ様が産んだ息子だと、レヴィン様はおっしゃられました。でも彼が何故ファンガイアになったのかを明らかにするには、トラキアへ行くしかなさそうです。

わたしたちの世界にもトラキアは存在します。そこは聖戦士ダインの末裔アリオン王が統治する竜騎士^{ドラゴンナイト}たちの国なのですが、この世界ではファンガイアにとって代わられているようです。

「わかりました。わたし、トラキアへ行きます」

突然、ディアドラ様がトラキアへ行く意思を告げます。もちろん、レヴィン様はディアドラ様を止めようとします。

「危険だ、ディアドラ。仮にもファンガイアどもの巣窟だ、命あつて帰れるかどうかはわからんだぞ」

「どうしても知りたいのです、この世界のセリスがファンガイアと化した理由を。それに、わたしには大樹さんがいるから大丈夫です。彼は聖戦士と同等以上の”仮面ライダー”の力をもつ人間です、彼に同行していただければきっとなんとかなります。かまいませんよね、大樹さん？」

「ボクはお宝の匂いがいなければ興味を示さない質^{たち}なんだけど、今回はちよつとこの世界のセリス君の謎に興味がある。いいでしょう、ディアドラさん」

レヴィン様は渋々ながらわかった、と一言言つて承知なされたようです。そこでセリス様がレヴィン様たちのもとに居残るとおっしゃられました。

「母上、わたしはこの世界のユリアとレヴィン様に同行します。この世界のわたしも人間なんですよね。ひよつとしたら彼は愛する心を持った人間に戻るかもしれない。この世界の住人ではありません

んが、それまでの間に彼の代理をわたしが担いたいんです」

セリス様の目的は、本来この世界でも存在するはずだったこの世界のセリス様の代理を務めること。セリス様も信じているのでしよう、この世界のセリス様の本来あるべき姿を。だからセリス様はレヴィン様たちに同行することを決められたのですね。

では、わたしはどうすればいいの？ ディアドラ様に従ってファングイアの国に行くか、それともセリス様の護衛を務めるか……。セリス様はシアルフィの次期当主、しかしディアドラ様が亡くなれたらセリス様が悲しまれる、そしてどっちもわたしにとっての大切なお方。どちらも守る、それがわたしの使命。でも、今回は片方しか選ぶことを許されていない……。

その時わたしの記憶の中で、思い出が走馬灯のようにほとぼしります。わたしに笑顔を見せてくれて、わたしを頼りにしてくれて、わたしの悩みを聞いてくれて、わたしの心の支え……。

セリス様……

この時わたしは、胸が切なくなるような感覚を覚えます。今まで味わったことのない、初めての感覚。わたしは自分の真心に身を委ねて、選択への決断をします。

「わたしもセリス様に同行します」

「フロリーナ、いいの？」

「いいんです、わたしが決めたことですから」

もう後戻りはできない。この決断でディアドラ様を失ったとしても、心の痛みとして受け入れなければならない。

そんなわたしの複雑な思いを汲んだためか、ディアドラ様は穏や

かな表情でわたしを氣遣ってくださいましたのです。

「よく決断したわね、フロリーナ」

「ディアドラ様、すみません。今回はばかりは……」

「いいのよ。あなたが決めたことだもの、わたしが口を出すことではないわ。それに、今のあなたにはわたしよりセリスの方をよほど心配しているように見えるの。だからセリスのことをよろしくお願いね、フロリーナ」

「ありがとうございます……」

わたしの決断を尊重し、につこりと微笑んでくれたディアドラ様にわたしは心から感謝の言葉を述べました。一方のセリス様もディアドラ様と一言交わします。

「では母上、お氣をつけて」

「セリス、くれぐれも死なないでね」

あと大樹さんも、なにか伝えたい言葉があるのかわたしとセリス様に声をかけます。

「バースドライバーは君たちが使いたまえ。ボクたちにはディエンドがあるからね。それからセリス君、君に渡したいものがある。一旦外に出よう」

大樹さんのセリス様に渡したいものとは、一体何なのでしょう。わたしたちとレヴィン様、異世界のユリア様は外に出ます。

「変身！」

【KAMEN RIDE DIEND】

大樹さんは外に出るやいなや、ディエンドに変身します。その様子を初めて見るレヴィン様は、たいへん驚かれていました。

「それが仮面ライダーというやつか。ただ変身するだけなのだろうか」

「いいえ、ディエンドはカードの絵柄を実体化させることができるんですよ」

【ATTACK RIDE ETTARD】

大樹さんはカードをディエンドライバーに挿入し、引き金を引きます。すると、そこに銀色の剣が出現します。それは、蒼炎の軌跡の世界の住人である漆黒の騎士の剣・エタルドでした。大樹さんはエタルドを持つと、そのままセリス様に渡したのです。

「このエタルドは君が使うといい」

「ありがとう、大樹さん」

セリス様は大樹さんから渡されたエタルドを握り、目を輝かせて刀身を見つめます。一方レヴィン様は大樹さんに「トラキアは遠い、どうやって行くんだ」と問いかけます。

「なあに、ディエンドの能力ならトラキアなどひとつ飛びで行けます」

大樹さんはそう言うと、カードを二枚取り出して一枚目をディエンドライバーに挿入します。

【KAMEN RIDE AGITO】

ディエンドライダーから音声が流れると同時に、金の角と胸筋に赤い複眼のライダー・アギトが出現します。間髪入れず、大樹さんは二枚目のカードをディエンドライダーに挿入します。

【FINAL FORM RIDE A・A・A AGITO】

「痛みは一瞬だ」

大樹さんはカードの効果を発動させると同時に、アギトの背中を撃ちます。するとアギトは変形していき、平べったい板のようなものになっていました。

「これは召喚したライダーを別の姿に変形できるファイナルフォームライドという能力です。今アギトが変形した『アギトトルネイダー』は、ペガサスのように人を載せて飛行することができます」

大樹さんはディアドラ様をアギトトルネイダーの上に乘せて、自分もディアドラ様の後ろに乗ります。そこに、レヴィン様と世界のユリア様がディアドラ様と大樹さんに声をかけました。

「私たちはイザーク領内のティルナノグへ向かう、もし生きてたらそこで落ち合おう」

「ディアドラ様、また会えますよね……」

「ティルナノグですね、わかりました。それからわたしたちも必ず生きて帰れると信じています。だからレヴィン様、セリス、フロリーナ、そしてユリア、どうかご無事で……」

ディアドラ様が頷いた後、アギトトルネイダーは空高く飛び立ちます。しかしその初速はペガサスの比ではなく、次元の違う速さで

空のあなたへと飛び去っていかれたのです。

「ディアドラ様……大樹さん……」

今のわたしには、無事を祈ることしかできません。でも必ず会える……わたしは希望を持ってディアドラ様と大樹さんとの再会を心待ちにし、セリス様、異世界のユリア様、そしてレヴィン様と共にティルナノグを目指すのでした。

つづく

幕間 Nichts（前書き）

注：この話はT o d e s t r i e bのサイドストーリーとなるエピソードです。

読まなくても構いませんが、読んでいただいた方がこの作品への理解度が高まると思います。

幕間 N i c h t s

砂漠……

辺り一帯が砂の世界。

命すら芽生えない、死の世界。

俺が通り過ぎた後に残るのは、砂漠の大地。

死……破壊……消滅……そして無……

そう、俺を満たすのは『無』だ。

俺は、産まれてから何も与えられなかった。

いや、何かを与えられていたのかもしれない。

優しく包みこむ、親の温もり。

しかし、それも一瞬の光芒だった。

俺の世界が蒼い闇で包まれ、気づいた時は檻の中だった。

俺に優しくしてくれる人は、誰一人いなかった。

朝は顔を蹴飛ばされて目が覚める。痛みに泣いても聞き入れてくれない。

腹が減ったらカビの生えたパンと豆のスープを食する。

しかも、用意されたスープは毎回床にこぼしていく。

俺はパンを頬張り、地面に這いつくばってこぼれたスープをなめつくした。

飢えが満たされない時は、不幸にも檻に入ってきたゴキブリやムカデ、毛虫を嚙った。

『気持ち悪い』など関係ない。それで飢えが満たされるのなら、なんでも喰った。

昼は読み書きを教えられた。当然間違えれば体罰だ。

友達もつくろうとした。しかし、俺を待っていたのは暴力の嵐だった。

木に吊るされては棒で叩かれ、焼きごてを突き付けられる。心など、許しようがない。

夜が更けると、俺は寒さに耐えながら薄い夜具を被って眠りにつく。

楽しいなんて感情すら持てない日々が続いた。

それでも俺は懸命に生きてきた。はるか昔に失った、一瞬の光茫に再び巡り合えると信じて。

そんな俺に突き付けられたのは、残酷な現実のヴィジョン。

そこに映るは、俺に光を与えてくれたはずの女。

女は他人の男に寄り合い、俺に光を与えたもう片方の男が死にゆく様を見ている。

その後女が他人の男との快楽に悦び、互いの片手を握りしめ合う。

そして女と他人の男と子供たちとの幸せな団欒。他人の男との間に授かったであろう息子と娘に注がれる、暖かな愛情。

その時、世界が真っ赤に染まった。

俺は光に裏切られたのだ。その絶望に満たされ、俺は絶叫する。

それと同時に、冷たい感覚が俺の全身を支配する。

要するに俺は『人間じゃなくなった』ということだろう。

「おめでとう、お前は今日からファンガイアとなったのだ。誕生祝いに”真名”をくれてやろう……」

そう、俺はファンガイア。

人間はこの世で最も醜い生き物だ、そんな人間であつた事実には耐えられない。

だからファンガイアになるのは俺の望んだことだ。今更振り返りようもない。

俺は、この世界の全てから拒絶されている。

光も、闇でさえも、俺を拒絶している。

いくら望んでも、何も得られない。

もうこの世界のどこにも、俺の居場所なんてない。

俺は、何故産まれてきたのだろう。

親は、何故俺を産んだのだろう。

俺が産まれなければ、こんな苦しい思いをせずに済んだのに……！

そもそも、俺の生きる意味は何なのだろう。

誰も教えてくれる人は、当然いない。

俺は、自力で意味を見出そうとした。

光も闇も、火も雷も風も、水も木も金も土も……俺に見向きもしてくれない。

『無』

この世界を構成する要素で、唯一疎まれる要素。何も生み出さない要素。

光も、闇も、何かを生み出そうとする点では同じ物同士だ。

だが、『無』は違う。あらゆる物全てを消し去る。『生』などない。

言わば、イレギュラーな存在なのだ。

『生』ある限り、苦しみは無くならない。

そうだ、『無』にすぎろつ。『無』と同化しよう。

俺自身が、この世界におけるイレギュラーになろう。

そしてこの世界の全てを消しさつて、俺自身も消えて、何も無い世界にしてやろう。

これが、俺を産んだ『生』への復讐だ。

俺は、外の世界に出た。

真っ先に訪れた村、そこでは子供たちが子犬を虐めている。

俺は子供たちを殺害した。

俺に殺意を向ける大人たち、子供の死に嘆く親たち。

そいつらも「平等」に殺した。

子犬は腹減っているようだった。子犬の息の根を止めようかと思ったが、親とはぐれ人間の子供にいじめられていたこいつは俺と同じ境遇だったのだ。

俺はそこらの家から奪ってきたパンを、子犬に与えてやった。

子犬がどう感じるかなど関係ない。俺は、何も思わず村を後にした。

道中で、コウモリみたいな奴と出会った。

そいつは、俺に”キバの鎧”を与えてくれる能力を持つという。

名前はキバットバット、キバット族のモンスターらしい。

俺は、キバットバットに過去を話した。無論、奴が聞きたいと言
い出したからだ。

キバットバットは、こんな俺を憐みやがった。氣遣おうとしやが
った。

憐れみなどいらない。俺はキバットバットに暴力をふるった。会
ったばかりの奴に、俺の何がわかるのかと……。

それでもキバットバットは俺に、健気ながらついてきた。

しかし、奴を疎む理由は無かった。何故なら俺がこの世界から否
定される存在となるために利用できるからだ。

それから、俺は赴くままにあらゆる人間を殺戮していった。

人々の断末魔を聞くのが、とてもたまらない。

もう、何人殺してきたのだろう。何千人、いや何万人かな。

キバットバットはそんな俺の行動を度々咎め、その都度俺は拳を

振るった。

とうとうこの世界を支配する国が動き、俺一人に向けて軍隊を仕向けてきた。

ある兵士は俺に怯え、ある兵士は俺に殺気を向けてくる。

そうだ、これだ。俺は永遠の孤独。これこそ我が力。

孤独になればなるほど、俺の『死の衝動』が高められていく。

一瞬、「やめて」という女性の声が聞こえたような気がした。俺を止めようとする、何者かの声が。

だが、俺の背後には誰もいない。気のせいかと思いつつ、俺はフアンガイアへと姿を変えた。

俺は、襲いかかる兵士共を殺していった。

首をはね、目を潰し、脊髄をひっこぬき、脳をかち割る、グロテスクの狂想曲。

俺が動いたたびに、兵士の断末魔という名の伴奏が奏でられる。

敵将はでかい斧をもった男だった。聖戦士とか神器とか抜かして威張りやがる、髭面の冴えない男だ。

その男が振るった斧を、俺は奪い取った。

斧を持ったところで何も感じやしない、だが俺は”自分自身の力で敵を鎧ごと真つ二つに引き裂いてやった。

兵士の後退りする音が聞こえ、明らかに逃げよとする。

逃すかよ、と俺はつぶやいて斧を振り回して残党共を虐殺していった。

そして、残った一人はあろうことが、俺に命乞いをしてきた。

「助けてくれ……俺は妻と子供がいるんだ……。頼む、見逃してくれ。俺が死んだら、二人が……」

それがどうした。俺は後で妻と子供もお前の後を追わせてやると

言い、男を燃やした。

『無』の力を得たと同時に発現した、念じることで相手を燃やす能力。

男は炎に包まれながら暴れ狂い、そのまま灰となった。

俺の背後には、血の大河が流れている。そこは人間の生命のない、死の流河。

俺はさらに進み、人間どもを皆殺しにし、街や城を廃墟に変えていく。

死の旅の末に俺がたどり着いた場所は、人間どもの国の王が住む豪華な城。

その国の王……いや、皇帝が俺を出迎える。

もちろん歓迎の意思などない。俺を殺す気でいやがる。

その皇帝は、炎の魔道に通じているらしい。

皇帝とファンガイアに姿を変えた俺は、同時に右手をかざして炎を巻き起こす。

炎が、俺の身体を包んでいく。だが、俺にとっては真夏の気温程度だ。

一方の皇帝は俺の炎に焼かれて悲鳴を上げ、死の舞踏を見せる。

それは一種のアイロニーだった。炎の使い手が、炎で死んだのである。

俺は冷笑した。こんなお笑い話、今まで聞いたことがない。

そこに二人の人間が現れる。黒いローブを着た皇子と、紫のローブを着た老人だ。

二人から闇の波動が伝わってくる。この世界にまたとない、闇の使い手だ。

特に赤髪の皇子からは、黒い竜の邪悪な意思が感じられる。

素晴らしい、素晴らしいぞ。俺は今、深い孤独と拒絶の中にいる。

それを身に感じることで、俺の力は高まる。さあ俺を拒絶しろ、徹底的に俺を否定しろ……！！

しかしここで俺は、キバットバットの能力を使いたくなった。どれほどの力があるのか、好奇心があったのだろう。

俺はキバットバットを呼び寄せ、左手に噛み付かせた。

左手から魔皇力と呼ばれるエネルギーが、頬まで伝わってくる。

腰にはベルトが出現し、俺はキバットバットを右手で驚掴みにしてベルトに装着する。

すると一瞬で俺はキバの鎧を身に纏った姿に変わる。しかし何も変わったことは感じない、いつも通り人間を殺すだけだ。

皇子と老人は同時に、闇の波動を俺に放ってくる。だが俺はその闇の力すら取り込み、『無』の力に変換して更に力を増す。

奴らの狼狽する表情が、俺の目に映る。俺は左脇にあるフェイス

ルをキバツトバツトに吹かせ、右手に『無』の力を収束させる。その拳を老人に叩き込み、流れ込んだ『無』のエネルギーがの体内で暴走したことで老人は爆死する。

続けて俺はもう一本のフェッスルを使い、右脚に『無』の力を集中させる。そして飛び蹴りを皇子に向けて放つ。

その皇子は恐怖に顔を歪めながら闇の波動を俺に放つが、俺の『無』の力は易々と闇の波動をかき消していく。

そして、俺の蹴りが皇子の胸に炸裂した。老人の時よりさらに強大になった無のエネルギーがうねり、大爆発を起こす。

その爆発は城を一瞬で蒸発させ、大地を抉り微生物に至るまでのあらゆる生命が消えて行く。

そう、人間どもの国は消滅したのだ。俺が立っている地は、辺り一帯がクレーターで何も無い。

俺はこの手で、国をひとつ滅ぼした。その時味わったスリルが、とてもたまらない。

残りの人間どもも、俺の手で滅ぼす。そしてファンガイアや他の

動物も消え、大陸も消え、俺も消え、この世界は『無』の世界となるだろう……！！

天使は、産まれた時は誰でも美しい純白の翼を持った天使なんだ。だがその翼がもがれた時、天使はどうなるか知ってるか？

墮天使になるんだよ。

翼をもがれた天使は、飛ぶことさえままならない。

しかし翼ある天使は慈悲どころか翼をもがれた天使を蔑み、楽園の門戸を閉じるんだ。

だから翼をもがれた天使は、必然的に墮天使と化す。

墮天使は地上で自分の存在を否定した天使どもへの恨みを抱えながら、

やがては悪魔と化してあらゆる物全てから存在意義を否定され、

その惨めな一生を終える。

それがこの世の道理なんだ。ことわり

俺は黒き竜のファンガイアにして、『翼失き墮天使』。

『生』なき砂漠に佇む、『無』の権化。

そして俺の真名は……

『生命の樂園に響く砂漠の挽歌』

終わり

第4話 ErIk?ni g

トラキア——そこは、ファンガイアの住む魔境の地。

わたしたちの世界では竜騎士の国。しかし、この世界では人間の国ですらない。

この世界のセリスは、おそらくこの地でファンガイアとなった。異世界の同一の存在とは言え、わたしの愛する息子。その息子が、人の心を捨てた怪物となってしまった。

だから、わたしが確かめなければならない。この世界のセリスがファンガイアとなった経緯を。

わたしと大樹さんは、二人でトラキア城付近までたどり着きました。

本来、リユーベック城からトラキアまで早馬で二週間ほどかかる距離なのですが、大樹さんの召喚した『アギトルネイダー』による飛行でわずか二日間で到着することができたのです。

トラキア城……紅い虚空まで延さんとする漆黒の魔城。この城の中に、この世界のセリスの秘密が眠っている。

そんな思いを抱えながら、わたしたちは城内に踏み入れます。

「この城、禍々しい形をしていますね。まるでお伽噺に出てくる魔王の城のような……」

「きつとこれがファンガイアの美的感覚なんでしょうね、ディアドラさん」

中はカーペットなどの調度はなく材質がむき出しのままでした。

わたしたちの靴音が、コツンと城内に鳴り響くのが聞こえます。

窓ガラスは真っ赤に染まっており、時々鳴り響く雷が不気味に思えてきます。

なるべく不必要な戦闘は避けるべく、見張りのファンガイアの目を盗みつつわたしたちは最上階を目指していきます。

「ボクは敵の監視をかくぐるのは慣れてるけど、ディアドラさんはこういうの初めてですよね」

「いいえ、わたしも十代の頃はよく城を抜けだしてました。その要領のようなものです」

「やれやれ、見た目に似合わず活発な人だ」

こんな所で、わたしの経験が生かされる時が来るとは思っていませんでした。わたしがまだグランベル王女だった頃、シグルド様と結ばれるまでは箱入り同然の生活を強要されていたのですが、それがいやで度々城を抜けだしていたのです。若かった頃の経験も、決して無駄なものではなかったのですね。

「そういえばディアドラさん、何か武器は？」

「はい、この『シムベリンの書』があります」

わたしは、携帯していた一冊の書物を大樹さんに見せます。これは、チエイニーが『暁の女神の世界』から持ち帰ってきた炎魔法『シムベリン』の書物で、その世界でもとても強力な魔法の一つで、使い手を選ぶものとされています。わたしも傍系ながら炎の聖戦士ファラの血を引いているため、ひと通りは使いこなすことができます。しかしチエイニーが言うに、威力は最大一五トン。つまり三〇トン台が普通のライダーの必殺技より威力は劣っているのです。ちなみに聖剣ティルフィングで一九トン、光魔法ナーガで二四トン程

度。ですからシムベリンの攻撃力では、ライダーの力を持つ大樹さんのサポートに回ることしか出来なさそうです。

ここでわたしは背後から何者かの気配を感じ、振り向きます。これはトラキア城の城門前から感じていた気配で、ファンガイアのような禍々しいものではなく人間のそれに近いものでした。その気配がずっとわたしたちの後を追っていることについて、わたしは少々気にしていたのでした。

しかし、振り向いた先には誰もいませんでした。

「どうしました？」

「いえ、何でも」

その気配の主が何者であるのか、この時のわたしには知りえないことでした。しかし、その正体が意外な人物であることを、わたしたちは少し後になって知ることになるのです。

城の中層まで来ると、パイプオルガンの音が聞こえてきました。いくつもの管楽器が織りなす、荘厳な音色。でも、この魔城の中においてではむしろ不気味に聞こえてきます。

わたしと大樹さんは、ひたすら城の階段を駆け上がって行きました。その度にパイプオルガンの音色と雷鳴の協奏曲シンフォニーが城内に響き渡ります。そしてある部屋の扉を開けると、そこにはパイプオルガンを奏でる一人の男がいました。その男は演奏をやめると、椅子から立ち上がったわたしたちの方へと近づいてきます。

「くれない紅……おとや音也……！？」

大樹さんはデジャヴを感じたような表情でその男の顔を見つめます。

「大樹さん、どうしたのです？ 知り合いなのですか？」

「以前ボクは別の世界で紅音也という人物に会ったことがあるんですよ。その人にとっても似ていると思ひまして……」

紅音也という人物はこの世界のセリスと同じダークキバへの変身能力を持ち、さらに悪のライダーの軍団を率いていたと大樹さんは仰っておられました。その紅音也に似た男は、わたしたちに近づいてくると軽い口調で迎えました。

「レディースアードジェントルマン！ ようこそファンガイアの国トラキアへ！！ 俺はキング、ファンガイアの王だ」

ファンガイアの王・キングはわたしたちに敵意を見せず、歓迎の意思を見せているようです。

「今日はとても珍しい客が来たものだ。変な格好をした男と……」

キングはわたしに視線を向け、言葉を続けました。その内容は、わたしを戸惑わせるのに十分なものでした。

「あんたが来るのは意外だな。息子に殺されたと聞いていたんだが生きてたとは……ディアドラ”皇妃”」

皇妃！？ この世界のわたしが皇妃って、どういうことなの！！？ わたしは、戸惑いを隠せないながらもキングに尋ねます。

「わたしが皇妃って、どういうことです！？ わたしはシグルド卿の妻、この世界のわたしも同じなのではないのですか！？」

「クッククク……何を言ってるんだ。あんたはアルヴィス皇帝と愛

しあつて結ばれたじゃないか。しかもロプトの血を濃くした子供まで産んだ。前の子供を捨ててまでな……！！」

キングの語った事实に、わたしは驚愕しました。兄であるアルヴイス王とわたしは、この世界においては夫婦となり子をなしていたのです。それにしても信じられないのが前の子供——セリスを捨てたことです。わたしと同じように、この世界のセリスを愛しているはず。それなのに、どうして……。

わたしが戸惑う中、大樹さんがわたしについての説明をキングに行います。

「このディアドラさんは別の世界の住人だ。ちゃんとシグルド卿と結ばれたままだし、息子のセリス公子にも愛情をそそいでいる」

「まあ、死んだはずの人間が生きているということはその通りかもしれんな。でも我々ファンガイアにとっては、とても都合なことになった。お前たちの見たいものを見せてやろう、ついて来るかい」

キングは不敵な笑みを浮かべながらも、わたしたちを誘います。
先導するキングの後を追いつ、たどり着いた部屋はまるで牢屋のようでした。

「この部屋は……！」

「ここがセリスの育った部屋だ。セリスは孤独の中腐った飯を喰い、虐待に悶え、夜は寒さに震えながら眠っていた。奴が親の愛を断たれたことで芽生えた死デストルドーの欲動、それを我々の手で膨張させたのだ。ある計画のためにな」

この世界のセリスは、ファンガイアからの虐待を受け続けていたのです。わたしは普段はあまり怒らないのですが、この時は別でした。

た。頭が沸騰したような感覚を覚え、次の瞬間には感情で動いてしまい、キングの頬を平手打ちしていました。

「セリスはわたしの息子よ！ あの子が寂しい思いをしてるのに、虐待するなんて許せないっ！！！」

平手打ちを受けても、薄ら笑いを浮かべるキング。わたしは、完全に理性を失っていました。もう一度平手打ちしなければ気が済まない、そんなわたしを大樹さんは止めます。

「落ち着いて！ ディアドラさん！」

「離してっ！！！」

単に「落ち着いて」と言われたところでわたしの怒りは止まりません。何しろ異世界の存在とはいえ、わたしの愛する息子に危害を加えられたのですから。

「こんな所で怒っても、この世界のセリスのためにならない。だから落ち着いて！」

大樹さんの一言を受けて、わたしは理性を取り戻します。あまりに激怒したためか、わたしは息切れしておりました。キングはわたしを嘲笑う様子を見せつつ話を継続します。

「クックククツ……俺をぶったところで何にもならんぞ。あいつは『ルシファー計画』の被験者となり、見事人間ファンガイア化に成功したのだ」

「ルシファー計画……！？」

かつて光をもたらす者と呼ばれながら、墮天使になってしまった

天使の名前をもつファンガイアの計画。その内容は、あまりに凄惨きわまるものでした。

「全てはファンガイアの世界を創るため、我々は人間を元に究極のファンガイアを生み出す計画を遂行していた。そのために人間を五人ほど捕獲し、実験を行ったがいずれも失敗した。三人は死亡、二人は廃人状態になった。そいつらはいずれも人間の持つ生リフトの欲動を保ったままだった」

「つまり人間をファンガイアにするには、心をデストルドーで満たす必要があつたと？」

大樹さんがキングに問いかけた内容、それは人の心をデストルドーで支配させるということでした。

「その通り。一七年前、川から流れてきた人間の幼児がいてな、そいつの目は恐怖と孤独が芽吹いていた。我々はそいつをルシファー計画の六人目の実験体とするため、日々虐待し続けていた」

「それが、この世界のセリス……」

「セリスはそれでも精神を保ち続けていた。いつか優しい両親に会えるという希望でな。しかし我々はセリスが一三歳になった時、俺の血をセリスに与えると同時に現実のヴィジョンを見せてやった。俺アルヴィス皇帝が奴の父親を焼き殺し、母親はそのアルヴィス皇帝の名を艶やかな声で叫びながら夜を営み、そして母親”だった”女とアルヴィス皇帝とその子供が幸せそうに裕福な生活を送る光景をな。奴は目論見通り精神崩壊を起こし、絶望で流した血の涙は人間の赤からファンガイアの青に変わった。セリスの心はデストルドーで満たされ、結果として究極のファンガイアに生まれ変わったのだよ」

ファンガイアの恐るべき、人間ファンガイア化計画。親の愛を断

たれたこの世界のセリスは、ファンガイアの手によって”デストルドーの魔人”と呼ぶべき存在と化してしまった。

だとすると、この間のバーハラ跡地でわたしに暴行を働いたのも……親に裏切られたと思い込んでいるから？

それにしても、何故この世界のセリスが他人からの拒絶を望むのか、わたしにはわかりませんでした。人は一人では生きていけない、それくらいこの世界のセリスもわかってはいるはずです。ひょっとして、デストルドーと何らかの因果関係が？

……わたしは改めて、牢屋のような部屋を見渡します。よく見ると、壁に絵が描いてありました。それは、銀髪の女性が惨殺される壁画でした。しかも、一つだけではありませんでした。ある女性は内臓を飛び散らせ、別の女性は子宮の部分が破裂し、また別の女性が数人の死神の鎌に全身を刺される様が多様に描かれていました。

「この絵……セリスが描いたというの!？」

「ご名答。この絵は言わば、ファンガイアとなった奴の心を写した鏡だ」

銀髪の女性……明らかにこの世界のわたしであることが伺えました。キングは言います——もはやこの世界のセリスは人間ではない、人間だけではなくこの世界の全てへの恨みと憎しみに駆られた怪物モンスターとなっていました。そのセリスが描いた壁画は自分を裏切った実の母親への憎しみと、母親の絵で比喻された『生』への憎しみ、その二つが表現された絵であると。

「もうお前たちに奴を止めることはできん。諦めることだ……」

もう、この世界のセリスを止める術はないというキングの言葉でもわたしは、諦めきれませんでした。きっとこの世界のセリスを

救う方法はあるはず……いいえ、見つけ出してみせる。同じ名前と同じ姿の異世界の別人だけど、それでもセリスはセリス、わたしの可愛い子供なのだから……。

「これで俺の言えることは全てだ。さつさと帰るがいい」
「ちよつと待った」

キングはこの世界のセリスにまつわる真相を打ち明け、この城から立ち去ることを促しますが、大樹さんが新たな問いを投げかけました。

「そつえば、この世界のセリスにはキバツト族のモンスターがついていた。あれもあんたが与えたのかな？」
「キバツト族？ 何だそれは……」

この世界のセリスがキバツト族を従えていた事を大樹さんから伝えられたキングは、何も知らないと言いました。

セリスにダークキバの力を与えた、コウモリ型のモンスター。しかし、ファンガイアたちには知り得なかったことでした。では、キバツト族はどのようにしてセリスに従ったというのでしょうか……。

「そのキバツト族とやらが奴についていたことについては、我々の知る範囲ではない。さあ帰りたまえ」
「ありがとう。行こう、ディアドラさん」

わたしははい、と頷いて元来た道を引き返しました。その途中でわたしは一旦立ち止まり、キングの方に振り返ります。

曰くありげな笑みを浮かべた、キングの顔。

わたしは、彼の表情に漠然とした禍々しさを感じながら大樹さんに追いつきます。帰り道は一度歩いた道……しかし今回は、不気味

な静けさに包まれていました。

「とても静かですね……何か、寒気がします」

「そうですね、用心したほうがいいでしょう」

わたしたちはそう言い合いながら、目の扉を開きます。

そこはもちろん、一度通り抜けた広間。しかし、以前は一人い
なかつた広間に、ひとりの男性が佇んでいました。その男は、わ
したちを睨みつけてきます。

「久しぶりだな……ディアドラ」

その顔はわたしにとって、見覚えのある顔。そしてなにより、わ
たしにとって一番大切な人……。

「シグルド……様？」

そこにいたのは、紛れも無いシグルド様の姿。しかし、シグルド
様は不気味な笑みを浮かべながら、わたしたちを待ち構えていたの
でした。

つづく

第5話 Ambivalenz

「久しぶりだな……ディアドラ」

一度通った広間に佇む、見覚えのある人影。それはなにより、わたしにとって一番大切な人……。

「シグルド様……。いいえ、”この世界の”シグルド様……」

そこにいたのは、紛れも無いシグルド様の姿。しかし、シグルド様は不気味な笑みを浮かべながら、手には剣を携えていました。

「会えてよかったよ……なにしろ、お前に会うために私は蘇ったのだから……」

シグルド様の瞳から放たれる視線は、わたしが見てきた妻を愛でるようなものとは違う、憎しみがこめられたものでした。

「……お前のような、愛していたはずの夫と息子を裏切って別の男に走る最低の売女ばいたを始末するためにな……！！」

「そんな、わたしはあなたの妻。このわたしが、どうしてあなたのことを裏切ったと……」

「とばけるな！！ お前はロプトの血に苦しんでいた。そんなお前を一生守ると私は誓い、愛しあった。なのに、私とセリスを捨ててアルヴィス卿と不倫し、あまつさえロプトの子供を産んだではないか！！ これを裏切りと言わずしてなんと言うんだ！！」

この世界のシグルド様は、別世界から来たわたしをこの世界のわたしと思い込んでいるようでした。しかも、憎しみに彩られた表情

で剣の鋒をわたしの眉間に向けてきたのです。

（やはりこの世界のわたしは、シグルド様を裏切ってしまったというの……！？）

この世界のわたしが、シグルド様とセリスを捨てたことは事実であつたのでしょうか。目を背けたくなるこの世界での現実を突き付けられて、この時のわたしは狼狽していたのです。

「ディアドラさんっ！！」

大樹さんがわたしの危機的状況を察知し、ディエンドライバーをシグルド様に向けて構えます。しかし、突然大樹さんの周囲に結界が発生し、大樹さんはその中に閉じ込められたのです。

くおっと、駄目ではないか。せつかくの”ゲーム”に水をさす行為は……>

「キング……！」

どこからともなく聞こえてくる、ファンガイアの王キングの声。

くこの世界の”元夫”と対面した感想はどうかね、ディアドラ>
「一体、どういふつもりなのです！ この世界のシグルド様に、一体何を！！？」

く見ての通り、死んだシグルドの魂をファンガイア化実験に失敗して廃人化した人間の肉体に植えつけて蘇らせたのだ。自分を捨てた元妻に対しての憎しみに駆られた復讐鬼としてな。このまま帰るのもつまらないだろう、そこで用意したのがこの余興だ。さあ、夫婦水入らずの殺し合いを楽しんでいくがいい……>

キングが言い終えると同時に、シグルド様はその剣でわたしに斬りかかってきます。わたしは間一髪で剣をかわし、切り離された数本の前髪がひらひらと地面に落ちていきます。

「この不貞の裏切り者め、ただ殺すだけでは満足せぬ！ 四肢を切断し、内臓を抉られる地獄の苦しみを味わせてやる……！！」

シグルド様は憎悪のままに斬撃を繰り出してきます。それは、愛情の欠片もない敵意のみの行為。

わたしは、今もなおシグルド様への愛に満ちている。何故わたしとシグルド様が殺し合わなければならぬのか……。そんな思いを胸に、わたしは必死にシグルド様の剣を回避していきます。

「おやめください！ わたしとシグルド様は心から愛しあう夫婦なのに、互いに傷つけ合いたくないのに……何故殺しあわなければならぬのです……!?」

「黙れ！ いくらお前が謝ろうとも、他の男と戯れたお前の虚言でこの私の憎しみが消えるものか……！」

シグルド様の怒りに任せた剣が、縦一直線に振り下ろされます。わたしはこれも回避しますが、上着の胸元が縦に裂けてわたしの胸の谷間が顕わになります。

やがて、わたしは壁際に追い詰められてしまったことに気づきます。わたしは背を壁に、シグルド様の剣の先をただ見つめるしかない状況に追い込まれたのです。

「さあ、今までの恨み……ここで報いを受けてもらっぞ」

「シグルド……様……お願い、やめて……」

怒り狂うシグルド様の剣、そしてわたしの無益な争いを止めたい

切実な願い。

しかし、今のシグルド様にわたしの願いは届かず、憎しみの剣舞が繰り広げられるのみ。

わたしは、この時死を覚悟しました。そして、ティルナノグに向かっているであろうわたしが産んだセリスや、わたしの世界にいる二人のユリアに対する謝りの言葉を、心のなかで呟きます。

（ごめんね……セリス……ユリア……。もう、帰ってあげられそうにないの……こんな駄目なお母さんでごめんね……）

しかし、その刹那にわたしは意識を何者かに乗っ取られた感じがして、一瞬で意識を失いました。次の間何が起きたのか、わたしには知る余地はありませんでした。

<シグルド様、私です。ディアドラです>

「お前……!!」

<私、あなたと離れてからずっとお逢いしたかった。そしてようやく、私の願いが叶いました>

「ふざけるなっ！ 貴様は裏切り者だ！ 面の皮の厚い女め!!」

<私は、ロプト教団に連れ去られてから記憶を失い、アルヴィス皇帝への偽りの愛を強いられていました。そしてあなたが処刑される様を何も出来ずに傍観することしか出来ず、とても悲痛な思いを抱えておりました>

「……………」

<シグルド様、私はここにいます。あなたを愛するディアドラはここにいます。これからはずっと一緒です、もうあなたの側を離れません。だから、どうか剣をお納めください……！>

「うあああああっ……!!」

わたしが意識を取り戻した時に見たものは、剣が心臓の部分に刺

さり仰向けに倒れたシグルド様の姿でした。そして横たわるシグルド様に寄り添う、この世界のわたしの霊体。

もう一人のわたしは、服装以外瓜二つでした。しかしよほど辛い目にあったのか、悲しそうな表情をしていることが伺えます。

一方のシグルド様も邪悪な表情が、剣に貫かれたことの苦痛に悶えながら清々とした表情に変化しておりました。

「シグルド……様？」

「わかっていた。ディアドラが裏切っていないことを。わかっていたんだ……ディアドラが人を傷つけることを嫌う、とても心優しい人間であることを。私がバーハラで処刑された時のディアドラの悲しげな表情、何者かに操られていることくらいわかっていた」

この時、わたしがこの世界のわたしに意識を乗っ取られていたことに気づきました。おそらくキングに会うまで感じていた背後の気配も、この世界のわたしのものだったでしょう。シグルド様が剣に貫かれて倒れているのも、この世界のわたしによって正氣に戻り、わたしに振り下ろされるはずの剣を自らに受けたのですね。

「正氣に戻られたのですね、シグルド様」

「私もどうやら、ファンガイア共に操られていたらしい。それから君が、私たちの世界のディアドラでないことはわかる。生きているのが何よりの証拠だ。それにしても、剣に貫かれて苦しみながら死ぬのは……意外と辛いものだな……」

シグルド様は青い血を吐きながら、別の世界から来たこのわたしに頼みごとをしてきます。それは、わたしにとっても辛い思いをするものでした。

「頼む、私を一思いに殺してくれないか。確かに私を傷つけること

が辛いのはわかる。でも、こんな剣に貫かれた苦しみを……耐えられそうにもない。だから、君の手で……私を楽にしてくれないか……」

シグルド様は、苦痛に喘いでおられました。今彼を苦痛から開放できるのは、わたししかない。でも、異世界の同一人物とはいえシグルド様を手にかけるのはとても心が痛むこと。わたしが決断するのに、時間が必要でした。

「……わかりました」

これでシグルド様が楽になれるのなら……そんな思いでわたしはシムベリンの書を開き、呪文を唱えます。シグルド様の上に突如現れる、人間サイズの火球。その火球がシグルド様に降りかかり、そのまま彼の身体を焼き尽くしていきます。

「まさか二度も焼け死ぬとは思わなかった。でも、愛する妻に焼き殺されるのなら……私に悔いはない……」

シムベリンの炎に包まれる、シグルド様の身体。わたしは火葬の様を、涙をこぼしながらただ見つめていました。

「ごめんなさい……。シグルド様……ごめんなさい……」

愛するシグルド様を手には掛けた事実、わたしは泣き崩れます。火の気が収まった時に俯いた顔を上げると、床にはシグルド様の焼死体、そして靈魂の存在となったシグルド様とこの世界のわたしが抱きあう光景が映っておりまして。

「シグルド様……。私、アルヴィス皇帝を愛してしまったことを……」

…>

<いいんだよ、ディアドラ。君は偽りの愛を強いられて、心に深い傷を負ってしまった。でも、もう大丈夫。これからは私と一緒にだよ。私と一緒に、君の心の傷を癒そう>

<シグルド様……私の愛するシグルド様……>

嬉し涙を流しつつ、接吻を交わす二人。

わたしは安堵しました。一時は引き裂かれど、やはりこの世界のわたしもシグルド様との深い愛で結ばれていたんですね。

でも……二人の愛の結晶であるこの世界のセリスは、この世界の存在非ざる怪物となってしまった。まだ、全てが終わったわけではない。むしろ、大変なのはこれからです。

「ディアドラさん……。異世界の存在とはいえ、あなたの愛する夫を……」

シグルド様の仮初の肉体が焼かれたことで、結界に封じられていた大樹さんが解放されたようです。

「いいのです。おかげでこの世界のシグルド様の死の苦しみを和らげることができたのですから。それに……」

「それに？」

「シグルド様を手に掛けることで、この世界のわたしの心の痛みを分かち合えたような気がしました。それよりもこの城を出て、ティルナノグへ行きましょう。あそこに、わたしのセリスが待ち遠しくしているでしょうから」

大樹さんは頷き、共に出口に向けて動き始めました。しかし、扉を開けると、そこにはファンガイアの大群が待ち構えていたのです。

「ファンガイア！」

大樹さんはディエンドライバーを構えてファンガイアに銃撃を見舞い、わたしもシムベリンの書を開き、火球でファンガイアたちを焼き払います。

しかし次から次へと湧き出てくるように出現するファンガイア。ここにキングの声が響きわたってきます。

＜まだまだ余興は終わってたわけではない、メインディッシュ本番はこれからだよ＞

大樹さんの銃撃とわたしの魔法でも、全てのファンガイアを倒すことはできない。しかもわたしたちの撃破したファンガイアの数を上回る勢いで湧いてくるファンガイアたち。もはや万事休すかと思われた時、紅い閃光がほとばしりファンガイアたちを消し去っていきます。

風穴のように空いたファンガイアの群れの隙間から、見覚えのある一人のライダーが出現してきたのです。

「よっしゃ、間に合ったぜ！」

それは『オーズの世界』のライダー・バース。その変身ツールであるバースドライバーはフロリーナに預けたまま。それでありながら登場するバースの姿に、わたしたちは驚きを隠せませんでした。

そしてバースは変身を解除すると、顔なじみである紅い髪の青年が正体を表したのです。

「チエイニー！」

「待たせたな、みんな。さあ、この陰気くさい城をとつと脱出しようぜ！！」

わたしたちの世界に留まっていたはずのチエイニーが、バースドライバーを携えて救助に来たのです。

「なんであなたがここに？」

「話は後だ！ 早くしないと、ファンガイアどもの援軍が来ちゃう！」

チエイニーの言葉に動かされ、わたしたちは出口を目指します。道中でファンガイアたちの散発的な妨害に遭いながらも通路を駆け抜け、やっとの思いで出口にたどり着きました。しかし、目の前にはファンガイアの大群が待ち構えていたのです。

「こりゃあやべえな。一気にバースのセルバーストで一掃しないと」

チエイニーは言葉を発しながらリュックサックからバースドライバーを取り出します。しかし、この時のわたしにライダーへの興味が湧いており、変身してみたいとの思いでチエイニーのバースドライバーを取ろうとしたのでした。

「わたしもライダーに変身してみたいのです、バースドライバー貸してください！」

「ディアドラ、あなたには魔道書があるだろ！！」

「いいじゃないですか！ 貸してくださいよーっ！！」

「あんたいいトシして駄々こねてんじゃねーよー！！」

「チエイニーのケチ！ そもそも他人に変身すること出来るでしょう！？ それなのにツールでライダーに変身して贅沢すぎじゃあり

「ませんか!!」

「うわーっ! やめろーっ!!」

こうした紆余曲折の末、わたしはバーストライバーを”借りる”ことができました。わたしはバーストライバーを腰に装着し、左手に持ったセルメダルを弾くと、左肘を曲げて、右斜め上に飛んでいったセルメダルを左人差し指と中指で摘む構えを取りました。

「変身!!」

一度言ってみたかった、憧れの掛け声。わたしは感無量のままセルメダルをバーストライバーに投入し、ダイヤルを回します。するとバツクル部から「リセプタクルオーブ」が出現し、一瞬でアーマ

ーを生成すると同時にスーツがわたしの身体を包んでいきます。眼の前は、真っ赤な光景にバースの状態を表す文字列。よくわからないけれど、これでわたしもライダーになることができたのですね。

「大樹さん、見ました!? わたしの変身!!」

わたしは嬉しさのあまりついはいでしまいました。その様子に大樹さんは呆れ顔で反応しつつ、ディエンドライバーにカードを挿入します。

「二児の母のくせにやけにノリノリですね。全く……キャラクターの掴めない人だ。変身!!」

【KAMEN RIDE DIEND】

大樹さんはディエンドライバーを掲げ、引き金を引くと同時に周

遊するシルエットに包まれ、ディエンドへの変身を遂げます。

「しゃーねーな、そんならとっておきの変身を見せてやるぜ」

チエイニーも全身を発光させると同時に、半袖のシャツにブラウス、ミニスカートといった珍しい服を来た茶髪の少女に変身しました。

「チエイニー、その姿は？」

「こいつは『インデックス禁書目録の世界』の御坂美琴みさかみことっていう女の子だ。なんとこいつはものすごい威力の電撃を操る能力を持っているんだぜ！」

チエイニーはその異世界を渡り歩く能力で、さまざまな世界を旅しています。そして何よりも、チエイニーの最も得意とする能力が一度見た人間の姿と能力をコピーできること。ですからわたしたちの知りえない世界の人間に変身できても、不思議ではありませんね。

「大樹さん、チエイニー、それでは目の前のファンガイアたちをぶっ飛ばして差し上げましょう！」

わたしは、威勢よく合図を出すと視界に現れる文字列に従って、セルメダルを一枚バーストライバーに投入しました。

【BREAST CANNON】

すると、胸部のリセプタクルオーブからパーツが射出され、胸部に大砲のような形状の武装が出現します。さらにメダルを二枚投入し、バースの必殺技『セルバースト』の体勢に入ります。

【FINAL ATTACK RIDE Di・Di・Di】

END】

大樹さんが変身するディエンドも、必殺技を発動する『ファイナルアタックライド』のカードをディエンドライバーを挿入し、前方に構えます。ディエンドライバーの銃口からカード状のエネルギーがラッパのように展開する様を、わたしは赤い視界に捉えています。

「行くぜ、レールガン超電磁砲！！」

チェイニーはセルメダルを放り投げ、その手で電気の塊を発生させて先ほどのメダルにぶつけます。電気を帯びたセルメダルはチェイニーの真正面から放たれる巨大な雷となり、ファンギアをなぎ倒していきます。その威力は、わたしたちの世界の神器『トールハンマー』の威力をも遥かに凌ぐと言っても過言ではありませんでした。

わたしと大樹さんも超電磁砲レールガンに合わせ、それぞれの必殺技を放ちます。紅と蒼あか、二本の光の槍が正面のファンギアを包み込み、爆発の連鎖が巻き起こりました。

こうして正面のファンギアを一掃したわたしたちは、変身を解除してその場を離れました。

「チェイニー、ライダーの力ってこんなに凄いものだったんですね」

「ぶっちゃけあんたさ、バースに変身してる最中性格変わってなかった？」

「あら、わたしは極めて自然体でしたよ。それにしても、ライダーに変身できてとっても楽しかったわあ」

「はいはい」

呆れ顔のチェイニーにわたしはバースドライバーを返却し、ファンガイアの目の届かない所までに逃げ延びます。そして安全地帯に身を隠すと、後からこの世界のシグルド様とわたしの靈魂があとを追ってきました。

「この世界のわたしに、シグルド様……」

<異世界の君は、意外と面白い人みたいだね>

<そうですね。こんなに朗らかで、羨ましゅうございます>

「一体どうした」という靈魂を視覚できないチェイニーの問いに、わたしは二人についての素性を説明します。「異世界のあんとシグルドは、とても辛い思いをしたのか」と同情するチェイニー。そこで、この世界のわたしがセリスについての話を持ち出します。

<私は、あの子に何もしてあげられませんでした。私とシグルド様が愛しあって産んだ子なのに、あの子を辛い目に合わせてしまった……私は、母親失格ですね……>

愛する息子への罪の意識からか、儂げな表情を見せるこの世界のわたし。そして今、異世界のセリスはファンガイアとなって、世界中の生命を殺戮している。

この世界のセリスを止めなければならない、それは二人のわたしの共通認識でした。でも、絶命させるのでは真の解決とはならない。この世界のセリスに人間の心を取り戻させることが、当面の課題となったのです。

「あの子はわたしが救います。わたしとあなたは違う世界の同一の存在、あなたのセリスへの愛情をわたしが引き継ぐことが出来るはずです。それにあの子はとても寂しくて、辛そうな目をしていた……だからどうしても、わたしはあの子を救いたい。あの子に生きる

喜びを与えてあげたいのです」

この世界のセリスは、この世に生を受けてから一度も喜びを与えられなかった。殺戮に走るのも、孤独や苦痛を紛らわすために行っているのではないか。それが、この世界のセリスが持つ死デスの欲動トルドーの源。だから、この世界のセリスを救うためには、彼に生リビドーの欲動を芽生えさせること——これしかないという結論を、わたしは導きだしたのです。

「ディアドラさん、”中絶”という言葉を知っていますか？」

突然、大樹さんがわたしに声をかけます。

「いいえ、知りません」

「世の中にはどんなに相思相愛の夫婦がいても、諸事情で泣く泣く胎児を殺さなければならぬ事もあるんです。そのお腹の中の命は夫婦から産まれることを待望されていた、しかしながら生を享けることを否定される——それが中絶ってやつなんですよ」

「そんな、ひどいわ……」

中絶——お腹の中の子供を殺さなければならない、夫婦にとって非情で辛いこと。わたしは、その事象の存在に青ざめざるを得ませんでした。同様に大樹さんの話を聞いていたこの世界のわたしも、同様に青ざめた表情を見せました。

「ええ、ひどい話です。そしてこの世界のセリスは親から愛された命なのに、生きることを否定された……つまりこの世界のセリスは、”中絶された生命いのち”だ……！」

大樹さんの強調した、中絶という言葉。それを聞いたこの世界の

わたしが悲鳴を上げ、シグルド様の胸に顔を突っ伏したのです。チエイニーは大樹さんの言葉に激昂し、彼を責めました。

「お前、人の前で言っていることと悪いことがあるだろ!!」

「ボクは真実を言ったまでだ。彼の親に事情があるうと、もうこの世界のセリスは人間じゃない。あいつは、存在価値のないまま幸のない一生を終える魔物だ!」

「てめえ!」

チエイニーは怒りに任せ、大樹さんを殴り倒します。頬をさすつたまま、立ち上がる大樹さん。

「例え価値がなかうと、わたしがあの子を人間に戻します。だってわたしはあの子の母親、あの子が愛しいの。立派になつてほしいの。だから、幸せになれないままあの子の命を終えさせはしません」

産まれ出づる命に、価値のない命などない。子供を授かった母親だからわかる、命の重み。

わたしは、この世界のセリスを何としても救ってみせる。こうして決意を新たにしたわたしに、チエイニーが一本の杖を渡します。

「ディアドラ、ワープの杖だ。これでさっさとティルナノグへ行こうぜ」

「はい」

わたしはワープの杖を構え、呪文を唱え始めます。

するとわたしと大樹さん、チエイニーの周囲に魔法陣が発生し、光で包みこむと同時に風景が人間の街に変わったのでした。

「セリス……！」

わたしはティルナノグにたどり着いた余韻に浸らず、実の息子を探し始めました。この世界のわたしが哀しい末路を辿ったことを受けて、不安に駆られていたのです。

セリスは大丈夫かしら、お願い……どうか無事でいて……。

そして見つけた、青い髪の少年。

「母上！」

二日ぶりに聞く、懐かしい声。

わたしは駆け寄り、元気な姿を見せる我が子を強く抱きしめました。

「セリス……良かった。怪我はしてない？ 風邪は引いてない？

ご飯はちゃんと食べてる？ それから周りの人と仲良くしてる？」

「母上、大げさですよ。わたしはこの通り、元気でやっています」

頬を染め、照れるセリス。でもわたしにとって、シグルド様と命を分けた大切な息子。

ドクン、ドクン……と胸を通じて、腕を通じて、そして頬を通じて伝わってくるセリスの鼓動。

何よりも自分の半身とつながり、ひとつになることはとても気持ちのいいこと。

この死の世界において、息子と”生きる歓び”^{リビドー}を分かち合える愛の快楽。

だからこの瞬間^{とき}だけは感じていたい。この子の温もりと、命の鼓動をわたしの身体で……。

ティルナノグに到着しセリスと再会した翌日、ファンガイアに占拠されたガネーシャ城の奪還作戦が開始されるのでした。

しかも、その一軍の将を務めるのはなんとセリスだったのです。

つづく

第5話 Ambivalenz（後書き）

ちよつと聖戦原典の妄想補完的な内容になってしまいました。
でも今回は中絶とか倫理的にやばい単語が入ってるので総スカンくらいそうだなあと思っています。

次回は時系列をさかのぼり、セリスとフロリーナがリユーベック城からティルナノグを目指すお話で、再びフロリーナ視点に戻ります。

第6話 S t u r m

ディアドラ様と大樹さんがトラキアへ向かった後、セリス様、この世界のユリア様とレヴィン様、そしてわたし、フロリーナはイザーク王国にある街ティルナノグを目指します。

本当はワープの杖があれば一瞬でたどり着けるところなのですが、この世界のユリア様が以前ファンガイアに襲われて所持していたワープの杖を破壊されてしまったようなので、やむを得ず徒歩で行くこととなりました。

「ユリア、あの時どうやって大樹さんのディエンドライバーを奪ったの？」

わたしたちがこの世界にたどり着いたとき、ユリア様は大樹さんのディエンドライバーを遠くから奪い取ったのです。セリス様はその疑問を、この世界のユリア様に尋ねます。

「この『シーフの杖』を使いました」

ユリア様を取り出した一本の杖。それは遠くから相手の持ち物を引き寄せられるという、この世界でしか見たことのない杖でした。

「あの人を倒すには、”ライダーの力”というものを使うしかありませんでした。偶然見慣れない格好の人が異形の姿に変わるところを見まして、その時彼が持っていた道具があればあの人と闘えると思って盗んだのです」

それでも、ユリア様の変身したディエンドではダークキバの足元にも及びませんでした。

この世界のセリス様——ヒトを捨てたファンガイアであり、仮面ライダーダークキバの力を持つ魔人。その力はとても抗いきれるものではないものであると、わたしたちの記憶に焼き付いていたのです。

「いる……ファンガイアの気配!!」

突然セリス様がファンガイアの気配を察知し、わたしのポーチにあるバーストライバーを手に取ります。軽快な手つきでベルトを着すると、セルメダルを構えました。

「変身!」

セリス様は威勢のよい掛け声とともに、バーストライバーにセルメダルを投入します。しかし、バーストライバーはけたたましい音を鳴らし、リセプタクルオーブは赤く点滅したのです。むろん、バースのアーマーは生成されないままでした。

「そんな、どうして!?!」

「ひょっとして、体格の制限があるのでは」

わたしの何気ない一言に反応し、セリス様は戸惑いながらもバーストライバーを外します。セリス様は八歳、ライダーに変身するにはまだ体が小さいということなのでしょう。

「いや、ぼくにはこの『エタルド』がある!」

気を取りなおしたセリス様は、腰に下げていた剣『エタルド』を引き抜いて構えます。これは『蒼炎の軌跡の世界』の騎士・漆黒の騎士の所持していた剣で、その世界でも最強の剣の一本だとされて

います。大樹さんはトラキアに向かう直前に、アタックライドカードの力でエタルドを具現化し、セリス様に渡したのです。

その直後に、サソリの姿をしたファンガイアが飛び出し、わたしたちに襲いかかってきました。

「喰らえ、風魔法『エルウィンド』!!」

まずレヴィン様が魔道書を開き、風魔法でファンガイアを迎撃します。ファンガイアは風の刃に斬り裂かれて一瞬足が止まりますが、ファンガイアはすぐに風を押し返して突進してきます。

「行くよ、フロリーナ」

「はい!」

セリス様はエタルドを振りかざし、剣先から衝撃波をファンガイアに向けて飛ばします。わたしもバースバスターを構え、ファンガイアに狙いを定めてセルメダルの銃弾を放ちます。少なからずダメージを受け、たじろぐファンガイア。続いてセリス様が飛び上がり、わたしのバースバスターによる援護を得てファンガイアに斬りかかります。しかしファンガイアは尻尾を振り回して、セリス様の浮いた体をたたき落とします。

「うああっ!!」

そのまま地面に打ち捨てられるセリス様、その傍らでレヴィン様はエルウィンドを、わたしはバースバスターをファンガイアに見舞います。ファンガイアは三步ほどのけぞり、その隙にセリス様が立ち上がります。

「今のはちょっと油断しただけさ！」

セリス様はエタルドを構え直し、再びファンガイアに斬り込みます。ファンガイアも長い尻尾をセリス様に向けます。尻尾の先端は吸命牙と同じ形状をしたものであり、これを刺すことで人間からライフエナジーを吸い取るものと思われます。

「セリス様、吸命牙に気をつけて！」

「わかつてる！！」

わたしの言葉を受けながらもファンガイアに向かって走っていくセリス様。一方のファンガイアもセリス様に尻尾を突き刺そうと待ち構えています。

そして双方の間合いが狭まり、セリス様がエタルドの一撃を与えようとした時、ファンガイアが尻尾の先端をセリス様の背後に回してそのまま突き刺そうとします。

万事休すと思い、わたしは思わず目を覆ってしまいます。しかし、セリス様は後ろを振り向いて間一髪で尻尾を斬り落とし、続いて振り向きざまにエタルドの衝撃波をファンガイアの胴体に与えたのです。

「グオオオオ……」

ファンガイアの肉体はガラスのように碎け散り、四散します。わたしが目の覆った手をどけた時、その光景が映っていたのでした。

「セリス様！ セリス様あ！」

わたしは心配のあまりセリス様に駆け寄ります。何しろ、ファンガイアに捨て身で斬り込んだのですから、心配できないのは無理な

話です。

「セリス様……」

「もう一人のセリスよ、よくやったな」

この世界のユリア様とレヴィン様も駆け寄って来ます。

「いやあ、危なかったあ」

「危なかったあ、じゃないですよ！ もしあなたが死なれたらディアドラ様が悲しみます！」

そう、セリス様が死なれたらディアドラ様が悲しむ。わたしは、心の中が心配で満たされるあまりにセリス様を叱ってしまいます。それに……

「それに、わたしだって悲しむですよ。だってわたし、あなたが……」

「ごめんね、フロリーナ。もうこんな無茶はしないから……ね」

頭を掻きながらセリス様は謝ります。

彼だって死んだら悲しむ人があるのはわかってはいるはず。ディアドラ様も、わたしたちの世界のユリア様も、オイフェ様も、そしてわたしもセリス様の死に耐えられないでしょう。

そのことを再認識し、セリス様は二度と無茶しないと誓ったのでした。

「強いんですね、セリス様」

「いや、ただの”まぐれ”だよ」

この世界のユリア様がセリス様に声をかけます。

「昔、誰かが言っていた気がしました。私には大切な人がいる、それは私が育んだ愛の結晶……と。先ほどのあなたを見て、ふとそんな気がして……」

「君は記憶を失っていたんだっただね。きっと記憶の一部が思い出せたんじゃないのかな」

「そうかもしれませんが。でも、思い出せない。私が何者かでさえわからない……」

この世界のユリア様は、記憶喪失に対する苦悩を顕にしています。

自分の正体がわからないこと、それは人間にとってとても辛いことなのでしょう。

何しろ過去の自分が何をしていたのかわからないのだから——そしてそれは、自分のいた居場所がわからないことでもあるのです。

「ファンガイアどもに嗅ぎつけられないうちにティルナノグを目指そう」

レヴィン様の言葉を受けて、わたしたちは再び歩き始めました。しかし、上空から突然見慣れない鳥が甲高い鳴き声を上げながら現れたのです。

その姿は、生物とは思えない角張った形状でありました。

その鳥は、わたしたちに襲いかかる様子を見せず、ただ留まってわたしたちを見下ろしていたのです。

「なにこれ……」

「さあ……」

セリス様とわたしが奇怪な姿をした鳥に啞然としていたところに、

聞き覚えのある青年と少女の声が聞こえてきました。

「よう、セリス。おれたちも来たぜ！」

「兄上！ フロリーナ！」

新たに現れた二人の人影。一人は赤い髪 of 青年。そしてもう一人は青みがかった銀髪、青い半袖の上着とロングブーツに白いミニスカートといった出で立ちの、未来から来たセリス様の実妹……

「チェイニー、それにユリア。来てくれたの！？」

そう、現れたのはチェイニーさんと”わたしたちの世界の”ユリア様だったのです。セリス様とわたしは驚きましたが、輪にかけて驚かれていたのは”この世界の”ユリア様でした。

「わ……私が、もう一人！？」

「えっ……なんでわたしが……」

二人のユリア様の邂逅——瓜二つの存在は、互いに驚愕の表情を保持って対面されたのです。

「兄上！ ド……ドッペルゲンガーですっ！ わ、わたしのドッペルゲンガーが……」

「ちょっとユリア！ 落ち着いて！」

もう一人のユリア様の存在に、わたしたちの世界のユリア様は大変うろたえておりました。セリス様は取り乱すユリア様を宥めようとしてします。

「この人は、この世界のユリアなんだ。つまり異世界の同一人物っ

てこと！」

「ええっ！？ そうなのですか？」

確かに髪型と顔立ちは全く同じですが、片や清楚なローブを身に纏った儂げな表情のユリア様、片やわたしたちの知る明朗で生真面目なユリア様。同じようで違いがあり、比べるだけで面白いものがあります。

「異世界から来た、もう一人の私なのですね。よろしく願いします」

「こちらこそお見知りおきを。異世界のわたし同士仲良くしましょうね」

二人のユリア様は、互いに挨拶を交わしました。

「ねえユリア、母上から頼まれていた子守はどうしたの？」

セリス様が”三人目”である赤ん坊のユリア様の子守について指摘します。ディアドラ様はこの世界に出かける直前、未来のユリア様に赤ん坊の子守を頼んでいたのです。実はディアドラ様は普段自分で赤ん坊の世話をするためか乳母を雇っていないのです。そこで未来のユリア様が赤ん坊の世話することになっていたのですが彼女までシアルフィを離れるとなると乳母を雇う必要が出てきます。そこで未来のユリア様は、この世界に来る直前に意外な人物に乳母を頼んでいたのです。

「大丈夫です。フロリーナのお姉さんのフィオーラさんに頼みました」

「ええっ！？ お姉ちゃんに頼んだんですか！！？」

なんと未来のユリア様はフィオーラお姉ちゃんに子守を頼んでいたんです。それも、わざわざシレジアまで出向いてお姉ちゃんのいるわたしの実家を訪問されたのだとか。

「フィオーラさんはすんなり承知してくれたわ、フロリン。だってあなたが長い間母上にお世話になっているのですもの。フィオーラさんも母上へのご恩に尽くしたいみたいだったわ」

「はあ……そうですか……」

フィオーラお姉ちゃんに赤ん坊のユリア様の子守を任せた後、未来のユリア様とチェイニーさんはいくつか異世界を回ってこの世界に来るまでの準備をしていたそうです。

「それでオーズの世界にまた行つてさ、鴻上^{こうがみ}のおっさんからバースドライバーをもう一つ貰ってきたんだ。さらにカンドロイドってやつを幾つかもちこんできたぜ！」

チェイニーさんは上空に視線を配ると、先ほどの奇怪な鳥が円筒状の物体になり、チェイニーさんの掌の上に乗ったのです。

「これがカンドロイドさ」

オーズの世界で造られた、動物を象つた”機械^{からくり}”・カンドロイド。チェイニーさんの持つ赤い円筒はタカカンドロイドというもので、鳥に変形し情報収集に力を発揮するものだそうです。

「持ってきたのはタカカンドロイドだけではありませんよ」

未来のユリア様はそう言うと、ポーチから緑色の円筒を取り出しました。

「これはバッタカンドロイド。二台あれば遠くに離れていても会話できるものなのですよ。さらにタカカンドロイドが見た風景を映すことができる優れものなのです！」

未来のユリア様が円筒を放り投げると、空中で円筒が変形し、バッタのような姿をした”からくり”となって未来のユリア様の手に戻りました。

「そっといえばディアドラはどうした？」

チェイニーさんが話題を変え、ディアドラ様の行方の話となります。

「母上なら大樹さんと一緒にトラキアへ行つたよ」

「トラキア？ 竜騎士ドラゴンナイトの国に何の用があるんだい」

「この世界でのトラキアはファンガイアの国になってるんだ。この世界のぼくがそこでファンガイアになつたみたいで、母上はその真相を知るために行つたんだ」

セリス様の話を聞いたチェイニーさんは「やれやれ」とつぶやき、全身から淡い光を発して未来のユリア様の姿になりました。

「ユ……ユリアの姿に変わった……！？」

「わ、私が……もう一人！？」

チェイニーさんは一度見た他人への変身能力を持っていることをわたしたちは以前から知っているのですが、それを知らないこの世界のユリア様とレヴィン様は彼の変身に驚きを隠せないようでした。

「まったく、あいつはセリスのことになると見境もなくなるからな
しゃーねー、助けに行くか」

チェイニーさんは背中に背負っていた二本の杖を取り出し、一本
を未来のユリア様に投げ渡しました。

「ユリア、そのワープの杖を使って先に行ってくれ。おれはもう一
本のワープの杖でトラキアに行つて、ディアドラたちを助けに行つ
てくる」

未来のユリア様は頷きますが、わたしは丸腰では危険だとチェイ
ニーさんに伝えました。

「わかつてるよ。そのためにオーズの世界からもう一個バースドラ
イバーを借りてきたんだからな、そんじゃ行つてくるぜ」

視線をチェイニーさんの腰に配ると、そこにはバッグに下げられ
たもう一つのバーストライバーがありました。その瞬間彼の足元に
魔法陣が発生し、チェイニーさんの体が一瞬強烈な光に包まれて消
えました。

「それでは皆さん、このワープの杖でひとつ飛びしましょう。そう
いえば目的地はどこなのですか？」

意気揚々とワープの杖を構える未来のユリア様に、セリス様が目
的地を教えます。

「イザークのティルナノグだよ」

「わかりました、兄上。では行きますよ！」

未来のユリア様が呪文を唱え始めると、わたしたちの足元に巨大な魔法陣が発生しました。そしてわたしたちが強烈な光に包まれ視界が真っ白になったかと思いきや、見慣れない街の光景が映っていたのです。

「ここがティルナノグだ」

レヴィン様の言葉を受けて、わたしたちはティルナノグにたどり着いたことを理解します。

わたしはティルナノグへは一度も行ったことはありませんが、シレジアやシアルフィの城下町に似たごくありふれた街並みであると感じました。

わたしたちはレヴィン様の先導のもと城下町を歩き、一軒の屋敷にたどり着きます。そして中に入ると、長い黒髪の男性がわたしたちを出迎えました。

「帰ってきたぞ、シャナン」

「レヴィン殿、それにユリア」

わたしたちの世界ではイザークの王位に就かっていたシャナン様。そのシャナン様も、ファンガイアの勢いづくこの世界ではティルナノグに身を隠しざるを得なかったようです。

彼の表情はこの世界のユリア様と同様に憂鬱で、甞れた感じさえ見受けられました。

「お……お前は……」

「わ、わたし……ですか？」

この世界のシャナン様が、セリス様を見るやいなや驚いた表情を見せました。

「わたしは別の世界から来たセリスです。あなたがシャナン殿ですね、よろしく願いします」

セリス様はうるたえるシャナン様に対し、礼儀正しく挨拶しました。つづけてわたしと未来のユリア様も自己紹介します。

「フロリーナに、別の世界のユリアか。それにしても異世界のセリスよ、幸せそうで何よりだ」

シャナン様はセリス様を見て和む素振りを見せたものの、依然として憂鬱なままでした。

「シャナン様、そんなにつらそうな顔をして何かあったのですか？」

わたしは、シャナン様に対する心配のあまりに質問してしまいました。

「私のせいだ……私のせいで、セリスは……」

「あなたが、セリス様に何を？」

自責に苛まれるシャナン様。そんな彼は、意外なことをわたしたちに打ち明けてくれたのです。

「一七年前、私はシグルド公の命で幼子のセリスを連れてティルナノグを目指していた。その時山賊に襲われてしまい、私はセリスを連れて必死に逃げるのがやっとだった。しかし、私は躓いてセリスを落としてしまった。そしてセリスは川に落ちて、激流にながされてしまったのだ」

この世界のセリス様はファンガイアとして、人類の敵として舞い戻ってきた。全ては私の責任だ——と、シャナン様は罪の意識で悩まれていたのです。だから、つらそうな顔をしていたのですね。

「起きてしまったことは仕方がないのだ、シャナン。今は我々がファンガイアの脅威から生き延びられるよう考えるだけで精一杯なのだぞ、何せガネーシャ城が陥落しすでに我々人類は崖っぷちに立たされているのだからな」

「どういうことですか、レヴィン殿」

セリス様の問いに応じ、レヴィン様は説明します——一ヶ月前にティルナノグから東部にあるガネーシャ城がファンガイアに攻め落とされ、すでに人類の居住地はティルナノグしか残っていない。次はティルナノグに攻め入るだろう……そこで敗北したら、この世界の人類は滅亡する——と。

「そんなことはさせません。むしろ逆にわたしたちが攻めいるのです」

ここでなんとセリス様が大胆な提案をしたのです。わたしたちは当然ながら驚かずにいられませんでした。

「なんだと！ 異世界のセリスよ、正気か！？」

「ええ。わたしたちには、ファンガイアを撃破しうる”ライダーの力”があります。これを使ってファンガイアを殲滅^{せんめつ}し、ガネーシャ城を奪還するのです」

セリス様は自信に満ち溢れていましたが、一方のレヴィン様は懐疑的な姿勢を崩しませんでした。

「しかし、そのライダーの力とやらの真価がよくわからぬ。しかも君はまだ年端もいかぬ子供ではないか。そんな君の意見を安易に取り入れるなど、我々は愚かではない」

「ガネーシャ城が陥落したのは一ヶ月前、そろそろファンガイアの物資も切れるころです。敵の本体もガネーシャ城に向けて補給部隊を送るでしょう。そこでフロリーナにバースドライダーを持たせてペガサスナイト部隊率いてもらい、ライダーの力を持ってして敵の補給部隊を撃破します。前哨戦ではありますが、ガネーシャのファンガイアも飢えてライダーの力を示すことができましょう」

まずは敵の補給を断ち、物資を尽かせる。オイフェ様が講義されていた戦略の基本に沿ってセリス様は作戦プランを立てていたのです。

「確かに君の作戦には一理あるが、幼い君の言葉など説得力を感じぬ。認めるわけには……」

「待ってください、レヴィン殿」

それでも疑問を捨てられないレヴィン様に、シャナン様が声をかけます。

「このまま手を拱こまねいてもファンガイアに攻められるだけです。ここは異世界のセリスの作戦に賭けてみるのもひとつの手ではないでしょうか」

「そうだな……確かに我々は厳しい状況下にある。猫の手も借りたいほどだ。わかった、幼いセリスの策を試してみることにしよう」

ガネーシャ城奪還作戦——まずは補給を断つことによって敵の体力を削ぐための前哨戦。わたしは、仮面ライダーバースに変身して補給部隊を殲滅する大役を担うことになったのです。今まで戦闘の

経験のないわたしに作戦を成功させるほどの自信はなく、それに対する不安を屋敷の裏庭にてセリス様に打ち明けます。

「セリス様、本当にわたしで大丈夫でしょうか……正直うまくいくか不安なんです」

「君ならやれるよ、フロリーナ。今までぼくたちの役に立ちたくて訓練を頑張ってたじゃない。アレクやノイッシュも君のことを褒めてたよ、とても上達してるってね。だから、絶対うまくいくからも」と自信を持ちなよ。少なくともぼくはそう信じてるから」

「はい、がんばります……」

セリス様の励ましを受けて、がんばろうと決心するわたし。何しろ慕っている人から励まされると自信を持つというものです。

突然ここでセリス様が、この世界のセリス様についての話を持ち出します。

「そういえばこの世界のぼくは、とても寂しそうな目をしてたんだ」
「あのセリス様とは思えない超がつくほどの極悪人がですか？」

この世界のセリス様は、何もしていないディアドラ様を容赦なく傷めつけたのです。まさに絵に描いたような悪人ではありませんか。でもセリス様には何か考えがあるようです。

「確かにこの世界のぼくのしたことは許されるものじゃない。でも、彼の心には何かやりきれないものがあると感じたんだ。一見凶悪そうに見えるけど、砂漠のように乾いたあの目……あれからして孤独に対するやりきれなさがあるんじゃないかな」

「ええ……思い返してみればなんとなくあの人が孤独だったと思えますね」

人は恵まれていたら、そもそも悪いことなんてしないはずですが、しかし、彼は全てにおいて満たされない空虚さを持っている。いや、むしろ満たされることさえ”拒絶”しているのかもしれない。「人間ども……俺を憎め、怒れ、そして拒絶しろ！」という、この世界のセリス様の意味ありげな言葉——わたしの直感なのですが、あの人は自ら人間をやめようとしているという感じがしてならなかったのです。

「この世界の人間の業が、彼を悪魔に変えたのです」
「誰だ！」

突然、声と共に見かけない服を着た謎の男性が現れました。セリス様とわたしは用心深く身構えましたが、その人は危害を加えようとする素振りを見せませんでした。

「僕は紅渡。くれないわたる 今回はこの世界の住人でないあなたたちに警告するために来ました」
「警告？」

セリス様とわたしは、紅渡という名の青年から不思議な感覚を感じ取っていました。その感覚はどちらかと言うと、神性に近いものだったのかもしれませんが。次に彼の放った一言は、わたしたちを驚愕させるのに十分な内容でした。

「この世界は、いずれ滅びの時を迎えます。あなたたちはこの世界の住人ではない、直ちにあなたたちの世界に帰るのです」

「滅びるって、何故？」
「裏切り、強欲、身勝手さ……人間の醜悪さが、この世界に最悪の奇形児を産み落しました。その奇形児はこの世界で癌細胞のよう

に肥大化し、やがて世界そのものを無に還すのです」
「それって、この世界のわたしのことなのですか？」

青年は静かに頷き、話を続けます。

「親の愛を奪われたときに芽生え、ファンガイアによって膨張させられた彼の絶望、そして彼が本来持つ聖戦士の血とファンガイアの血が混ぜ合わさったことで、彼は『無』の力を会得しました。それはこの世そのもの、自分自身さえも否定した者のみが行使できる、全てを破壊する力なのです」

この世界のセリス様の『無』の力は、異次元へ干渉する能力という副産物も得た。その力で異次元の力を幾つか習得した。以前大樹さんの召喚したギルスをも焼き殺した『自然発火能力』バイロキネシスはその一つである——と、青年は言いました。

「この世界のわたしは、その『無』の力で一体何を？」
「全ての生命と秩序の消滅、つまり全てを『無』に還すことです。もう、この世界の誰も彼を止めることはできません。彼の『無』の力によって全てが消え去り、この世界は”空”からになる。それは、この世界の生きとし生けるものたちが贖うべき原罪なのです」

青年は、いたって冷徹でした。

もうこの世界が救われることはない、だからあなたたちは一刻でも早く元の世界に戻るべきだ……と。

でも、セリス様は諦めていないようでした。必ずもう一人の自分を救えると信じていたのです。

「そんなことはありません。彼は、ただ寂しいだけ。寂しさを憎しみと怒りで誤魔化しているだけなんだ。わたしは、そんなもう一人

の自分を救いたい」

「無駄なことです。彼の持つ死の欲動及び『無』の力は、すでに取り返しの付かないほど肥大化しています。しかも彼はデストルドーと同化し、さらに『無』の力を増大させようとしている——それは徹底的な拒絶・孤独の中でしか成し得ないこと。それゆえ彼は他人からの拒絶を望んでいるのです」

わたしたちの疑問点・この世界のセリス様が拒絶を望む理由を知りたい気持ちを汲み取ったかのように、青年は解答を提示します。
『無』の力はデストルドーを根源とする力。孤独に身をゆだねればゆだねるほど、その力は加速度的に増す。だから彼は自ら孤独になるうとしている。これが、”この世界のセリス様は他人の拒絶を望んでいたこと”の真相だったのです。

「彼のデストルドーがもたらした『無』の力はやがて世界を喰らい尽くし、全てを消し去ります。早くこの世界から去らないと、取り返しの付かないことになりますよ……」

そう言っ、紅渡という名の青年は静かに立ち去りました。

もうこの世界も、この世界のセリス様も救うことはできないという、青年の言葉。

それでも、彼を寂しさから救いたいとセリス様は決意したのです。

「母上も同じ気持ちを持っていると思う。だって、母上は寂しそうなお子供を救ってあげたくなる人だから……君だってそうだったでしょ、フロリーナ」

「ええ。ディアドラ様がいてくれたからこそ、今のわたしがいます」
「それに、彼は母上にとってかけがえのない息子。ぼくにとってもかけがえのない兄弟なんだ」

この世界のセリス様は、セリス様と魂を同じくする異世界の同一人物。その彼を”兄弟”と呼んだセリス様。きっと、セリス様は身内の情を持たれていたのでしょう。それだけではないと思いますが、彼を救いたい気持ちは変わらない……そうですね、セリス様。

「兄上、ペガサスナイト隊の出撃準備ができました！」

ここで、未来のユリア様が報告するために現れます。わたしはすでに持ち物は整えており、いつでも出撃体勢に入れるよう心がけていました。それからバースドライバーに適合したことも確認済みです。

「それじゃあユリアはワープの杖でフロリーナたちペガサス隊をガネーシャ城近くの峡谷まで送って。そこをペガサス隊の前線基地とするんだ」

「はい、兄上」

わたしとユリア様はセリス様の指示の下、わたしはペガサス隊を束ね、未来のユリア様はワープの呪文を唱えます。

「フロリーナ、危なくなったらすぐに撤退するんだよ。君を死なせてしまったら、母上が泣いちゃうからね」

「わかりました、では行ってきます！」

セリス様が見送る中、わたしたちペガサス隊は未来のユリア様が唱えたワープの光に包まれます。そしてティルナノグとガネーシャの中間ほどにある山岳地帯の峡谷に一瞬で移動したのです。すでに空は暗くなっており、一晩明かす必要がありました。

「ひとまず、タカカンドロイドをガネーシャ城南の平原地帯に向け

て放ちましょう。一晩明かしながら、ファンガイアの動向を探るのよ」

「そうですね、ユリア様」

未来のユリア様は荷持からタカカンドロイドを五個取り出し、南東の平原地帯に向けて飛ばしました。タカカンドロイドの目はカメラという風景を映し撮る機械がついていて、これで撮った映像をバツタカンドロイドの空中に投写する機能で見られると言うわけです。

「それからこのゴリラカンドロイドはタカカンドロイドがファンガイアを感知した時、音を立てて知らせてくれるの。目覚ましの鶏の鳴き声替わりにもなると思うわ」

さらに一個のカンドロイドを取り出したユリア様は、それをゴリラのような形に変形させます。

「今日のところは寝ましょう。明日は忙しくなるはずよ」

未来のユリア様に同調し、わたしたちペガサス隊はテントの寝床につきます。

わたしが就寝するテントは、なんと未来のユリア様と同じ場所。つまりユリア様とふたりきりで夜を明かすのです。

わたしたちは眠りに付くまでの間、水入らずの会話を楽しみました。

「ねえフロリン、もうあなたも一三になったでしょう。好きな人の一人くらい出来たんじゃない？」

「そうですね、気になってる人が一人います。ちょっと恥ずかしくて言えないのですが」

「名前聞きたかったけど、まあいいわ。それならどんなタイプか教

えて」

「タイプですか、わたしの好きなタイプはお互いに支え合える人……でしょうか。そういえばユリア様の好きなタイプは何ですか？」

「そうね、わたしはもちろん兄上のような格好良くて心優しい人よ」

所謂恋愛話こわいというもので、いつの時代もわたしたちのような年頃の少女にとっては気になる話題を未来のユリア様と話し合っていたのです。

わたしには、おぼろげながら気になる人がいる。それはわたしを楽園に導く、円な瞳の小さな天使……。

ここで目がトロンとした感じがして、眠気を感じたわたしたちはお休み、と一言交わして眠りにつきました。

翌朝、朝食のおかゆを食べて身支度を済ませた時、ゴリラカンドロイドがけたたましく音を立てました。

「ウホッウホッウホッウホッ！」

音を立てながら全身を震わせるゴリラカンドロイド。未来のユリア様がバツタカンドロイドの映写機能を使って、ファンガイアが動き出した事を確認します。

「フロリン、イザーク城の方向からファンガイアが動き出したわ。戦闘態勢に入って！」

「は、はいっ！」

タカカンドロイドが峡谷の南方にあるイザーク城から補給部隊が

出撃したことを感知し、その映像はバッタカンドロイドでわたしたちに知らされます。

ついに始まった、補給部隊襲撃作戦。

わたしは緊張と不安を胸に、バースドライバーとセルメダルの入ったバッグをペガサスの鞍に下げて跨ります。

「ペガサス部隊発進！ 目標、ガネーシャ城南ファンガイア補給部隊！」

ペガサスたちが翼をはためかせ、赤い虚空へ向けて飛び立ちます。

「タカカンドロイドの映像によると、前方に弓兵はいないわ。そのまま進んで！」

未来のユリア様とはバッタカンドロイドで連絡し合います。また、タカカンドロイドをもう三体ほど飛び立たせることで進路の障害の確認も行うことができ、行軍はスムーズに行われたのです。

そして数刻の後、平原に巨大な檻を引きずったファンガイアの群れを見つめます。

「二時方向にファンガイア出現！ 敵は計四体、そのうち一体が部隊長よ！」

「全軍、フォーメーションD！ 手槍用意！」

ユリア様の通報を受けて、わたしは編隊を部隊全員に指示します。わたしが今回指示したフォーメーションは、前衛に多くの兵力をアーチ状に配置し後衛にわたしと数人の兵士がつく火力と防御に秀でた陣形です。

そしてわたしは手槍による攻撃を指示し、一体のファンガイアに

集中攻撃します。多量の手槍が刺さり、ガラスのように砕け散るファンガイアの手下。しかし、ファンガイアも吸命牙を放ちます。二体のファンガイアが放った吸命牙が一人のペガサスナイトとペガサスに命中し、そのペガサスナイトたちはライフエナジーを吸われたことによつて透明化しつつ落下します。一方のカマキリを象つた部隊長・マンティスファンガイアの吸命牙がなんとわたしのペガサスに当たってしまったのです。

力が抜け、身体が透き通っていくペガサス。高度が落ち始め、危ないと感じたわたしは急遽バースドライバーを装着し、セルメダルを装填します。

でも、高度を飛行するペガサスナイトとはいえ、飛び降りるのは怖い。なによりファンガイアと闘うことが怖い。でも、やるしかない。

（セリス様、ディアドラ様、そして天国のシグルド様……わたしをお守りください）

「変身……！」

わたしは不安に満ちた胸に手を当てて一呼吸し、ペガサスから飛び降りながらダイヤルを回します。その間にも高度からの落下によりスカートがめくれてしまいましたが、戦闘に集中しているわたしにとって気にする余地はありませんでした。

バースドライバーに埋め込まれたりセブタクルオーブとアーマーがわたしの身体を包み込み、装着が完了します。さらにわたしはセルメダルを一枚装填します。

【CUTTER WING】

バース専用武装『バース・CLAWS』の一つ、「カッターウィ

ング」はバースが飛行するために必要な装備。わたしは高度が落ちながらもこの武装を背中に装着します。そして、地面すれすれのところで身体に浮力がかかり、ファンガイアに向けて飛び立つわたし。そのまま体当たりでファンガイアたちを蹴散らしていきます。

ファンガイアの群れが吹き飛び、わたしはとんぼ返りをうつて着地します。それと同時に手に下げたバースバスターと大量のセルメダル入りのバッグを足元に置きます。

わたしが率いていた残りのペガサス部隊も、主に手下を狙って空から槍を突き刺します。

【DRILL ARM】

わたしはメダル一枚をバックルに装填し、右腕にドリルアームを装着します。そしてフェンシングの要領でマンティスファンガイアに鋭い突きの攻撃を繰り返していきます。ドリルアームがファンガイアの身体に何度も突き刺さり、青い血が飛び散っていきます。

他のペガサスナイトたちも手下のファンガイア一体を数人がかりで撃破します。手下とはいえ、常人を超えた戦闘力を持つファンガイア。倒すのに一人ではなく、数人が時間をかけてようやく撃破できるのも当然のことでしょう。

【CELL BURST】

そしてわたしはセルメダルをバックルに二枚投入し、必殺技『セルバースト』の体勢に入りました。バースバスターの先端に凝縮されるエネルギー。一方の手下のファンガイアは、危険を感じてマンティスファンガイアの盾になります。

バースバスターから放たれる、真紅のエネルギーの潮流。そのエネルギーは手下はおろか、背後のマンティスファンガイアも飲み込みます。ビームに包まれたファンガイアたちは、砕け散るガラスの

音を立てて消滅しました。

倒した……そう、わたしは生まれて初めてファンガイアを倒したのです。

セリス様から激励を受けていたとはいえ、最初は初めての経験に
対し「失敗したらどうしよう」とマイナスのことしか頭に浮かばな
かったのですが、今回のファンガイアの戦闘で勝利を収め、次の戦
いへの自信に繋がられたような気分になれたのでした。

「おめでとう、フロリン！　よく頑張ったわ！！」

バッタカンドロイドから未来のユリア様の祝福の声が聞こえてき
ます。その声を聞き、喜びを噛み締めるわたし。

しかし、任務はまだこれで終わったわけではないのです。ファン
ガイアが引いていた檻の中、その中には数人の人間が閉じ込められ
ていました。

きっとファンガイアたちがライフエナジーを摂取するための”餌
”なのでしょう。後でユリア様のワープの杖を使って人間たちをテ
イルナノグに飛ばし、わたしたちも帰還する。これで今回の”前哨
戦”の任務は達成となります。

しかし、この頃テイルナノグではちょっとした異変が起きていま
した。

「う……うつつ……。苦しい……。体が、胸が……。苦しい……」

この世界のユリア様が突然、苦しみを訴えだしたのです。胸を手
で押さえ、息を荒げるこの世界のユリア様。

「ユリア、どうしたの！？」

心配になったセリス様が駆け寄った時、この世界のユリア様は地面に崩れ落ちてしまいます。

この世界のユリア様はベッドに運ばれますが、この時の彼女の身体に忌まわしき力が駆け巡っていたのです。そのことに関しては、ファンガイアの”餌”にされるはずだった人間の一人がティルナノグに到着後、わたしたちに打ち明けてくれたのでした。

つづく

第7話 K r i e g (前書き)

海外のホテルでインターネット接続できるみたいなので最新話を投稿させていただきました。

第7話 K r i e g

わたしたちペガサスナイト隊は、ファンガイアの補給部隊の殲滅せんめつを行った後、未来のユリア様と合流し、檻に囚われていた人間の救助を行いました。

その人間たちは子供から老人まで年代は幅広いのですが、一人だけ黒いローブを身につけた異様な雰囲気を持つ男性が目にとまりました。

「あなたは？」

「私は、ロプトの教徒セイラム。助けていただき、ありがとうございます」

セイラムと名乗った男は、ロプト教という宗教の信者でした。名前からして暗黒神ロプトウスを崇める怪しげな宗教だとすぐに感じました。

暗黒神ロプトウス——わたしたちの世界においても、この世界においても、最も邪悪なる存在。しかし、わたしたちの世界では黒き竜ドラゴンが直接大陸を脅かしたのに対し、この世界においては暗黒竜の血を受けた魔道士が帝国を建国し、その邪悪な力で大陸を支配したという違いがあるのです。

その後竜族の血を得た十二聖戦士がロプトの皇帝を滅ぼした後、ロプトを信じる人々は迫害を受けて世界の表舞台から去った——その彼らの生き残りがロプト教団を作り、ロプトの直系が出現するまで教義を信じ続けて来たのです。

「同じようで違う、わたしたちの世界とこの世界。それはロプトの位置づけにも違いがあるのですね」

未来のユリア様も、二つの世界のロプトの違いに感心したようです。

「詳しい話はティルナノグでします。ファンガイアに気づかれないうちに行きましょう」

セイラムという男の言葉に未来のユリア様は頷き、ワープの魔法を発動します。地面に現れる魔法陣から放つ光に包まれて、ペガサスナイト隊や捕らわれていた人共々一瞬でティルナノグに帰還したのでした。

「フロリーナ、ユリア、大変だよ。この世界のユリアが倒れちゃったんだ！」

迎えに来たセリス様が慌ただしい表情でこの世界のユリア様の窮状を訴えます。

「この世界のわたしが！？ 容態はどうなのですか！？」

「突然もがき苦しみ始めたんだ。今はベッドで休ませてるけど、どうなるかわからない」

セリス様の口調は緊迫した様子を見せていました。そこにセイラムが口を挟みます。

「ユリア”皇女”が、このティルナノグに……？」

「皇女……皇女ですって？」

わたしたち三人はこの世界のユリア様の肩書きが”皇女”であることに驚きます。

「やはり、”血の影響”で苦しんでおられるのか……」

続いて放たれたセイラムの曰く有りげな言葉。この世界のユリア様が苦しむという緊迫状況の中、セリス様は彼の素性を探ろうとします。

「あなたは、一体何者なのですか？」

「私はセイラム、ロプト教団の信者でした。ユリア皇女のことはある程度は知っているつもりです。何か知りたいのなら、なんなりとお尋ねください」

ロプト教団が何かについては聞かず、セリス様はこの世界のユリア様のこと”だけ”について尋ねます。

「彼女は、アルヴィス皇帝とディアドラ皇妃の間に、ユリウス皇子と共に授けられた皇女です」

ここでさらなる驚愕の真実が、わたしたち三人に知らされたのです。この世界のディアドラ様は、ロプト教団の手によって洗脳され兄であるこの世界のアルヴィス王と愛し合った。そしてディアドラ様は、兄と妹の同じ血が交じり合ったユリウス王子とユリア様を産んだ——と、セイラムは語りました。

「アルヴィス皇帝とディアドラ皇妃は、共に同じロプトの血を引いておられた。それを我々ロプト教団がロプトの直系を生み出すために、当時シグルド公子の妻であったディアドラ皇妃を拉致し、アルヴィス皇帝を愛するよう洗脳を施したのです」

「という、この世界のわたしは……ロプトの直系の血を引いていると？」

わたしたちの世界のユリア様が、セイラムに尋ねます。セイラムは同じ顔をしたわたしたちの世界のユリア様に特に驚きを示さず、話を続けます。

「いえ、特にロプトの血が強かったのはユリウス様でした。しかし、ユリウス様ほどではありませんがユリア様もロプトの血統を強く継がれておられる。そのロプトの血に体を蝕まれ苦しんでおられるのだと思います」

この世界のユリア様は、強いロプトの血統があるがゆえに苦しみ倒れられた。ここで一つの解答が示されたのですが、それはもう一つの解答への道程を進めることとなったのでした。

「そうか、ロプト教団の仕業でこの世界のわたしと母上は離された。その後この世界のわたしはファンガイアによって、全てを拒絶する怪物と化したというわけなのか……」

「しかし、我々はロプトを信ずる者として迫害されつづけ、苦しい生活を強いられてきました。ロプトの再来を望むのは無理もなかったのです」

ロプト教団にも彼らなりの正義があつたことを、セイラムは語ります。それでもこの世界のセリス様が全てを破壊する悪魔となった原因は、ロプト教団にもある。そこでセリス様が昨日突如わたしたちの目の前に現れた、紅渡くれないわたるという青年の話を思い出します。

「……母に逢えない悲しみと苦しみ、それがこの世界のわたしを悪魔に変えた。昨日の紅渡という人の話では、彼の持つ『無』の力は死デストルドーの欲動を根源としてた……そういえばフロリーナ、デストルドーって何だっけ」

元々わたしたちの世界に無かった概念である「デストルドー」の意味を、セリス様は知りませんでした。そこで以前チェイニーさんから話を聞いた未来のユリア様が説明します。

「デストルドーとは死にたい気持ち、あるいは破壊したい気持ちだとチェイニーが言っていましたよ、兄上」

「ありがとう、ユリア。この世界のわたしは、母上と離されたことでデストルドーが膨張し始めた。そのデストルドーに加えファンガイアの力を得たことで『無』の力が覚醒した。人間は、拒絶されることでデストルドーを高められる。そして、デストルドーがある限り『無』の力は無限大に強くなる……つまり、この世界は癌のように肥大化した『無』の力に飲み込まれ、消滅する！」

「チェイニーは、子供は母親の愛によってリビドー生きる欲を与えられるとおっしゃっていました。この世界の兄上は、この世界の母上の愛を受けられなかった——だからデストルドーばかりが大きくなったのでしょうかね」

『無』の力によるこの世界の崩壊——それは紅渡曰く”人間の業がもたらした原罪への贖い”。

人間のエゴが、この世界のセリス様のみならず、この世界そのものに悲劇をもたらしただ。

そう考えれば、確かに人間は罰を受けても仕方がないのかもしれませんが。

「……セイラム殿、ユリア皇女の容態を見ていただけないでしょうか」

ここでセリス様が、この世界のユリア様についての話に戻します。

「私でよろしいのですか？」

「ここで皇女に詳しいのはあなたしかおりません。それに、人類が生き延びるためにはロプトだの言ってられないでしょう？」

セリス様は正論をセイラムにぶつけます。今まで迫害されて来たロプト教徒が、人類の未来のために今までの遺恨を捨てて手を取り合う——言ってみれば皮肉なものだ、とわたしは思いました。

「ええ、そうですね。今は全ての人間が力を合わせて生きていかなければならない……わかりました。私も微力ながら力を尽くすようにしましょう」

セイラムはこの世界のユリア様のいる屋敷へと向かって行きました。但し、曲がりながらロプト教徒のため、フォローするためにセリス様と未来のユリア様が後を追って行かれたのでした。

翌日、この世界のユリア様の容態もだいぶ落ち着いてきました。わたしたちは安らかに眠るこの世界のユリア様の寝顔を見て、胸を撫で下ろしました。

「この世界のユリアは、忌まわしい血の呪いに苦しんでいたんだね」
「ええ……」

セリス様と未来のユリア様が一言交わし、複雑な表情を見せます。安らかな寝顔を見せる異世界の妹を見つめる、八歳の兄と一五歳の妹。遠くから見てみれば、絶対にありえない光景です。

「わたしたちの世界でも、こうなってしまう可能性もあったのでし

ようか……」

「……そうかも……しれないね……」

わたしたちの世界でも「セリス様とディアドラ様が離れ離れになつてしまう」運命を辿つてしまふかもしれない可能性——それでも、わたしたちの世界においてはセリス様とディアドラ様が一緒に暮らしている。わたしやオイフェ様、チェイニーさんも仲良く接している。

ディアドラ様やわたしたちに愛されるがゆえに、セリス様は天使でいられる。

だとしたら、他の世界にいるかもしれないセリス様たちは天使でいられたのでしょうか。この世界のセリス様のように墮天使となつてしまふのか、それとも天使のままなのか、それはわたしにはわからない話です。

午後になって、トラキアへ向かつておられたディアドラ様と大樹さん、チェイニーさんがティルナノグに到着しました。

「セリス……良かった。怪我はしてない？ 風邪は引いてない？ ご飯はちゃんと食べてる？ それから周りの人と仲良くしてる？」
「母上、大げさですよ。わたしはこの通り、元気でやっています」

ディアドラ様は、久々に会った息子を包み込むように抱きしめておられました。

絵画に描かれた生命を慈しむ女神のような、ディアドラ様の穏やかで恍惚しているようにさえ見える表情——ディアドラ様、セリス様のことがとても心配だったのでですね……。

「ユリアも来てたのか」

「ええ。チェイニーに頼んで連れてもらったのです」

大樹さんが未来のユリア様に気づき、声をかけます。

「母上……兄上と久々に会えてとても嬉しそう」

「まあトラキアでいろいろあつてね。それに、君の言うとおり久々に自分の息子に会えたんだ。可愛がりたくなるのも不思議じゃないさ」

セイラムの語った真実、おそらくディアドラ様もトラキアで知ることになったでしょう。案の定、大樹さんがファンガイアの王・キングに出会いこの世界のセリス様とディアドラ様が乱離された事実を聞いたと教えてくれました。

その後、ガネーシャ城攻略の作戦会議が行われました。

「敵は補給を断たれ、飢えています。正面突破するだけで十分いけるはずです。しかし、敵将は位の高いファンガイア……人間では敵わないでしょう。そこで敵将は仮面ライダー・チェイニー・海東大樹と仮面ライダー・バス・チェイニーが殲滅します、よろしいですね？ チェイニー、大樹さん」

「よっしゃ！ セリス、任せとけ！！」

「任せてくれたまえ」

会議は一五分ほどで終わりました。すでに戦略上ではこちらが勝っている、だから小難しいことを考えなくても勝てる——オイフェ様は仰っておられました。小手先の戦術よりも、大局を見渡す戦略が重要であると。

会議が終わり、会議室を出るわたしたち。そこに、ゆったりとしたローブに着替えたディアドラ様が近づいてきます。

「セリス、あなたガネーシャ城を攻略するんですって？ 聞きましてよ、あとフロリーナに補給隊を攻めさせたって」

「ええ。ここで手を拱いてもなにもなりませんから。だから逆に我々が攻めこむのです」

平然としたセリス様に、ディアドラ様が心配そうな表情で諭します。

「あなたのしていること、わかってる？ あなたは戦争をしているのよ？ 人の命があなたに預けられているのよ？」

「わかってますよ、母上」

「一軍の将は兵士の死に責任を負わなければいけないのです。それも一人だけじゃない、死んだ兵士の数だけ重くなるの。死んだ兵士の妻子や母親から恨まれることが、あなたに耐えられるの？」

「それは……」

八歳のセリス様の心ではまだ多くの恨みなどを耐えられないのは明らかです。それに、セリス様はディアドラ様の仰られたことを知らずに將軍を引き受けた。セリス様が言葉につまるのも、無理はありません。

「もう過ぎたことは仕方がないわ。このままあなたのやりたいことを全うしなさい。あなたの責任は全てわたしが背負いますから」

「そんな、母上に迷惑をかけられません」

「あなたが戦争を仕掛けた時点でもうわたしに迷惑をかけているのです。それに、あなたはまだ未熟なの。迷惑をかけないと思っていても迷惑をかけてしまうものなの。でも、それはあなたが大人にな

るために仕方のないことなのよ」

シグルド様が亡くなられてから、ディアドラ様はセリス様を叱責するようにしました。それでも決して怒鳴らず、穏やかに叱る。ディアドラ様らしい叱り方ですね。

セリス様のすることは明らかに戦争、犠牲者が出ることは避けられません。その重い責任を、ディアドラ様が肩代わりしようというのです。その重圧に耐えながら息子に愛を注ぎ続けるディアドラ様——とても立派な人だな、とわたしは改めて思いました。

夜になり、わたしはこの世界のユリア様が安静にしている部屋を通りかかると、部屋の中で二人のユリア様が話しあっておられました。

「あなたの親は、どんな人ですか？」

「父も母も、とても優しい人です。わたしが産まれた頃はすでに父が亡くなっていたのですが、過去に飛んで父に会いに行つて、母が話していた通りの立派な人だと感じました」

「父の名前は？」

「シグルドです」

父の名前を教えるわたしたちの世界のユリア様の嬉々とした表情に、この世界のユリア様がわずかに和んだかのような素振りを見せました。

「なんだか、あなたが羨ましいです。私も、あなたのように産まれたかった」

「どうしてです？」

「私の体には、邪悪な意思が眠っているのです。その意思が、私の体を度々蝕んでいます。いつか私が、私でなくなるような気がして……とても怖いのです」

そう、この世界のユリア様の体にはロボットの血が流れている。そのせいで、ロボットの侵蝕に日々苦しんでいる。

「それに、度々思うのです。親はなんで私を産んだのか——こんなに苦しい思いをするのなら生まれなければよかったと……それゆえ、産んだ親を恨めしいとさえ感じるのです」

さらに、産んだ親を恨む気持ちを伝えるこの世界のユリア様。どんなに優しい親であろうと、親のせいで自分が苦しむと恨みたくなくなるものなのでしょう。

この世界のユリア様が打ち明けた本心を聞いた未来のユリア様は、こう答えました。

「でも、あなたはそうのように生まれてしまった——それでも人は懸命に生き続けるしかないのです。わたしはあなたの苦しみがわからないけれど、これだけは言えます。きっと生きて生き続ければいいことがある……それにチエイニーが言っていました。苦しみに満ちた人間のほうが、より生きる喜びを深く味わえると。むしろ平和な世界に生まれてしまったわたしのほうが、あなたを羨むべきなのかもしれない」

未来のユリア様も、この世界のユリア様の気持ちを理解したいのでしょう。

人は誰でも、他人を理解したい気持ちがある。他人の心を理解することで、思いやりの気持ちを持てるのだから。そして、思いやり

を持つことで人はお互いに微笑み合える。それがきつと、人間の素晴らしさなのでしょうね。

翌日、ついにガネーシャ城攻略作戦が実行されました。

ディアドラ様と二人のユリア様のワープでティルナノグ軍の主力を一気にガネーシャ城前に集結させた後、セリス様は前衛にアーマーンナイト隊、右翼にわたしたちペガサスナイト隊、左翼に魔道士隊、後衛に医療部隊と投石機の配置を指令しました。

「まずアーマーンナイト隊で守衛の攻撃を引きつけるんだ。敵の吸命牙も、アーマーンの装甲ならものともしないはず。その間に魔道士隊と君の率いるペガサス隊が守衛を撃破し、投石機で城門を破壊するんだ」

セリス様の攻略プランは、基本に沿った手堅いものでした。

「投石機で城門を破壊した後、敵が出てこなければそのまま攻め入る。敵が出てくれば引き続きアーマーンナイト隊を囿に包囲殲滅。最後に敵将を大樹さんとチェイニーが撃破する。これで勝てるはずだよ」

「勝算はありなのですか？」

「多分、うまくいくと思うよ」

「多分……ですか」

「ぼくも一軍を指揮するのは初めてだからね。でも、歴代の名将だって初めて軍隊を率いた時はそれほど自信なかったと思う。まあなんとかなるよ、フロリーナ」

昨日のディアドラ様の言葉を受けたこともあって、セリス様は緊

張を隠せずにいられないようでした。でも、この世界の人類が生き残るには攻めるしかない。それは、ティルナノグの人類の総意でした。その彼らの想いを一身に背負ったからには、是非とも勝たなければならぬ。セリス様の無責任そうな言葉も、自分の鼓舞のために言い聞かせた言葉なのでしょう。

午前一〇時、セリス様はアーマーナイト隊の進軍を指令します。全身が鉄板に覆われた、重騎士の軍勢が城へと近づいて行きます。補給物資の欠乏で飢えるファンガイアの守衛隊は、アーマーナイト隊に向けて吸命牙を飛ばします。しかしアーマーナイトを包む装甲は、吸命牙を易々と弾き返したのです。

アーマーナイト隊も手槍を放ち、ファンガイアの注意を引きつけます。その間に、わたし率いるペガサスナイト隊が手槍の雨を浴びせ、レヴィン様率いる魔道士隊が魔法攻撃を放ちます。さすがのファンガイアも飢えで消耗していたのか、容易に碎け散っていきます。

「投石機発射用意！ ターゲットはガネーシャ城城門！！」

セリス様は、後衛の投石機の準備を命じます。苦しいティルナノグの情勢もあって、一台しか用意できなかったのですが、城門を破壊するには十分な数でした。

「放て！」

セリス様の指令と共に、巨大な岩石が投石機から放たれます。岩石は空高くアーチを描き、ガネーシャ城目掛けて飛んでいきます。そして岩石は城門に命中し、城に大きな穴が空けられたのです。

ガネーシャ城から出撃するファンガイア軍。作戦プランにあるファンガイアが出撃した場合のケースに当てはめて、アーマーナイト隊が攻撃を受けつつ後退していきます。さらにシャナン様率いる剣

兵隊も参戦し、味方は後退しつつファンガイアを包囲していきます。

「目標、ファンガイア軍後方！」

わたしは自ら先導し、ペガサスナイト隊でファンガイアの後方を塞ぎます。こうして完成したファンガイア包囲網、セリス様の総攻撃指令を受けて、ペガサスナイト隊とアーマナーナイト隊の槍が突き出し、剣兵隊の刃が振り下ろされ、魔道士隊の魔法が降りかかる総攻撃がファンガイアの本隊を殲滅していきます。

「○時方向、城門から敵将出現！」

「大樹さん、チェイニー、お願いします！」

ファンガイアの本隊が全滅した後、ついに敵将・ライオンファンガイアが出撃します。

「チェックメイト・フォーの一人、ルークか。厄介な奴を前線の指揮官に持つてきやがったな」

チェイニーさんはトラキアでディアドラ様たちを探す一方でファンガイアに関する情報収集を行っていたそうです。

チェックメイト・フォー——ファンガイアの中でも最上位に位置する力を持つ、四体のファンガイア。その中でも頂点に立つのがキング、その下にクイーン、ルーク、ビショップが存在するとチェイニーさんは仰っていました。

その一人、ルークことライオンファンガイアがファンガイア侵攻の指揮をとっていた。今までのファンガイアとは比べものにならないほどの力を持つ敵を、大樹さんとチェイニーはライダーとして撃破しなければなりません。

大樹さんとチェイニーさんはファンガイアの前に立つと、それぞれカードとセルメダルを構えました。

「変身！」

【K A M E N R I D E D I E N D】

大樹さんはディエンドライダーにカードを挿入してディエンドに、チェイニーさんはバースドライダーにセルメダルを投入してバースにそれぞれ変身します。

まずディエンドとバースは互いに銃撃をライオンファンガイアに見舞います。しかし、格上のファンガイアの風格を見せつけるかのように、ライオンファンガイアは怯むことなく近づいてきます。

「猫には猫か！」

【K A M E N R I D E T A I G A】

ディエンドは続けて、タイガという名の白い虎のような姿をしたライダーを召喚します。タイガは手持ちの斧を振り回してファンガイアに斬り込みます。タイガの斧の刃がファンガイアの体を引き裂き後退りさせますが、ファンガイアも拳で反撃しタイガを殴り飛ばします。

「兵隊さん、行つてらっしゃい」

【K A M E N R I D E R I O T R O O P E R S】

大樹さんはさらにライオトルーパーを三体召喚し、ファンガイアを包囲させます。

タイガの斧、ライオトルーパーの斬撃、さらにディエンドとバースの銃撃。

こうしてライオンファンガイアの飢えに苦しめられた体をさらに消耗させていきます。

「そろそろいいころだ、止めを指すぜ」
「そのようだね」

【BREAST CANNON】

バースはブレストキャノンを着着し、セルメダルをバックルに二枚投入します。さらにディエンドもファイナルアタックライドのカードをディエンドライバーに差し込みます。

【FINAL ATTACK RIDE Di・Di・Di・DI END】

【CELL BURST】

ディエンドの必殺技『ディメンションシュート』の青い光の槍と、バースの必殺技『セルバースト』の赤い光の槍が同時に放たれ、ファンガイアに突き刺さります。

「グオオオッ!!」

ライオンファンガイアは、二本の光に貫かれて爆発四散します。
どんなに強力な力を持つ者でも、飢えれば力を十分に発揮できない——まさに、勝つべくして勝利した、と言うべき戦^{いくさ}だったのです。

こうして、ガネーシャ城攻略は我が軍の勝利に終わりました。人類でもファンガイアに対抗できる——それを知ったティルナノグの住民にとって希望となり、人々は歓喜に湧いておりました。

「ガネーシャ城の守備は私がっこう。せつかく手に入れた城だ、人っ子一人いない状態であつさり奪い返されたら何もならんからな」

と言って、レヴィン様は数十名の部隊を従えてガネーシャ城に入城しました。それ以外のわたしたちは、ワープによりティルナノグに凱旋します。

ティルナノグの人々は、わたしたちを歓喜で迎えました。

「ものすごい熱気ですね、セリス様」

「人間がようやくファンガイアに勝てたんだ。喜ぶのも無理はないよ」

人々の歓声から、「小さな救世主」という声が響きわたってきた。

「小さな救世主って、きっとセリス様のことですよ」

「救世主だなんて、照れるなあ」

「すべてあなたの手柄なのです。もっと誇っていいのよ」

ディアドラ様も笑顔でセリス様を褒めます。自分の産んだ子供が活躍する、親にとって一番嬉しいことなのでしょうね。

その日のティルナノグは、飲めや歌えのお祭りムードとなりました。

しかし翌日、妙齢の女性が悲壮な顔でセリス様の前に現れ、怒鳴ったのです。

「セリス將軍つてあんたかい。このガキめ、あんたのせいでうちのせがれが死んだんだよ。この落とし前はどうつけるつもりなんだい！」

戦争に犠牲は避けられない、昨日の攻城戦で犠牲になった兵士の母親がセリス様を詰なったのです。そこにディアドラ様が前に出てきます。

「セリス將軍にガネーシャの攻略を命じたのはこのわたしです。すべてはわたしに責任があります」

「あんた、このガキの保護者かい？」

「はい、この子の母親です」

「全くこんなガキに戦争させるなんてあんたは駄目なやつでないよ。」

「しかも人殺しさせたんだ、あんたは母親として最低だ！」

「すみません……」

「すみませんで済むと思ってるのかい。謝ってもうちのせがれは生き返らないんだよ！ この人殺し、うちのせがれを返しておくれよっ……！」

ディアドラ様は、この後も女性に罵倒され続けました。セリス様も、わたしも、胸が痛い思いでこの光景を見守るしかなかったのです。

「ごめんなさい、ぼくのせいだ……ぼくのせいで、あの人の息子が……」

セリス様は、意気消沈しておりました。やはり実の母親が罵声を浴びせられる光景は、とても辛いものがあります。

「これでわかったでしょう、セリス。戦争とは悲惨なものなの。だから今後は、軽い気持ちで戦争しようだなんて思わないで。いいわね？」

「はい……」

どんなに辛い目にあっても、子供にはいつも穏やかな表情を見せるディアドラ様。

温厚に見えて、強い芯の通った心の持ち主。だからこそ穏やかさを保つことができる。きっとそれが、母親としての強さなのかもしれない。

「そうだわ、今日はお弁当を作らなくちゃ」

突然ディアドラ様が、何か思い立ったように言葉を発します。

「母上、お弁当作って何を？」

「うふふ、料理は女性の愛情が最も伝わりやすいものなのよ。その料理で、愛を伝えたい人が一人いるの。その人のためにお弁当を作るのよ」

「新しい恋人でも出来たのですか？」

「違うわ。わたしの大切な家族よ、フロリーナ」

ディアドラ様は嬉々として住居へと戻って行きました。この人も何かできることを見つけた、だから嬉しいのだろう———と思いつつ、セリス様とわたしはディアドラ様の背中をただ見送っていたのです。

つづく

第8話 Zuneigung

『敵』……それは人間。

『敵』……俺を捨てた人間。

『敵』……俺に苦しみしか与えなかったファンガイア。

『敵』……この世の全て。

『敵』……『敵』……『敵』……。

『敵』……『敵』……『敵』……。

……俺を産んで、捨てた母親。

『敵』……『敵』……『敵』……

みんな……俺の『敵』だ……！

俺は、ノディオンという城に来た。

目的は何かって？ もちろん、『敵』を根絶やしにすることだ。
ごくありふれた人間どもの城、もう見飽きちまった。

「お前、まだ殺し足りないのか？ このまま殺しつくして、人間いなくなったらどうするんだよ」

俺のそばにいる、コウモリのようなモンスター。

名前はキバットバット……って言ったかな。

こいつは、ファンガイアの俺に『キバの鎧』を与える能力がある。こいつは利用価値があるから生かしてやってるだけだ。

もちろん、人間からミジンコに至るまでこの世界の命を全て消し去ったら、こいつも消すつもりだ。

「俺に『キバの鎧』を与えろ、キバット」

「……わかったよ。ガブリ！」

キバットは俺の手に噛み付く。こいつの牙から伝わり全身を駆け巡る、キバの力。

俺は、静かに呟く。

「……変身」

ってな。

すると俺の体を魔王力のエネルギーが包み込み、一瞬にして『ダークキバ』の姿に変わる。

なあと、何も変わることはない。人間どもを皆殺しにするだけだからな。

ダークキバとなった俺は、見つけた人間を片っ端から殺戮した。

この城は、何故か黒いローブを着た奴らが多い。

なんかの宗教に染まったのだろうか。

まあいい、今日でてめえらの人生は終わりなんだからよお。

俺が手を振るうごとに、人間の首を胴体から切り離す。

俺が手を振るうごとに、人間の心臓を抉り出し、握り潰す。

俺が手を振るうごとに、人間の頭蓋骨をこじ開け、脳みそを引き

ちぎる。

俺が手を振るうごとに、人間の首を脊髄ごと引っこ抜く。

……『死』だ。

人間が一人ひとり、『死』んでいく。

人間の儚い命が、一つずつ消えて行く。

俺の手には、人間の首のついた脊髄が片手に三本づつ。その脊髄も城下町の中で投げ捨てる。

そうだ。そもそも貴様らが悪い。

貴様らがぬくぬくしている一方で、一人の人間が地獄の苦しみを味わう。

所詮、人間など自己中心的だ。

他人の悲しみなど、どこ吹く風の奴らだ。

哀れみなど、慈しみなど、全部糞食らえの奴らだ。

……いや、人間だけじゃない。

全ての生命が、徹底的に俺を拒絶する。

もう、俺は”求める”のをやめた。

いくら求めても、何も与えられない。

ならば、こちらから願い下げただけだ。

ノディオンの城が、俺の炎に包まれる。

四肢を切断して少しでも生き延びた、人間どもの嘆きが聞こえる。

そうだ、『死』だ。『無』だ。

全て、全て『無』くなってしまう。

どいつも、こいつも……、そして俺も……！

俺は、いつもの本拠地に帰ってきた。

頭蓋骨の椅子に座り、俺は”飯”を喰おうとする。

だが、その前にファンガイアが一人現れた。

「なんだ、俺に用か？」

「貴様、人間を殺しすぎだ。このままでは我々の”食糧”が無くなる」

ファンガイアは俺に敵意を向け、攻撃を仕掛けてくる。

「馬鹿め、俺を誰だと思ってやがる」

俺もファンガイアの姿に変える。そして掌を敵に向けて、念じる。

「ギャアアアッ！！」

ファンガイアが炎に包まれ、踊り狂う。そしてそのままどっかにいってしまう。

俺を倒すだと？ そんなの無理に決まってるだろうが。

俺は、拒絶の中で無限に力を増すのだぞ。

貴様らは滅びるだけだ。俺が貴様らを滅ぼすだけだ。

「さて、飯を喰うか」

俺は椅子に座り、頭蓋骨のテーブルの上に乗った一皿を取る。

その皿には、気持ち悪いほどウネウネする毛虫の群れがある。

だがこの俺にはグルメだ。マズイ喰い物も、喰い続けりゃ美味になる。

俺は、毛虫の群れを掴む。

ウネウネ、ザワザワした触覚。

だが俺には触り慣れている。どうってことない。

俺が毛虫どもを頬張ろうとした時、一人の女がそこに現れた。

「セリス……」

そこにいたのは、以前俺がいたぶってやった銀髪の女。

こいつの顔を見るたびに、奴を思い出す。

俺を苦しめた、最悪の『敵』を。

「女、俺に何の用だ？」

「また、人を殺したの？」

「くだらんことを聞く。当然だ、ノディオンの奴らを皆殺しにした」
「さっきのファンガイアも焼け死んだわ。あれも、あなたがやったの？」

「そうだ。襲いかかってきたから焼き殺してやったよ」

女は嫌悪感を抱くだろうと思っていたが、そんなことはなかった。
むしろ穏やかな表情を見せていた。

「今日はあなたのために、お弁当を作ってきたの」

女は小さな箱を開けて、俺に人間の料理が詰まった中身を見せる。

「あなたの口に合うことを考えて、味付けも工夫したのよ。きっと、
あなたも喜ぶと思うわ」

女は微笑みを俺に見せる。それは、女の好意——つまり、『愛情』

だ。

しかし、俺はファンガイアだ。人間を辞めたんだ。しかも、今更俺を捨てといて好意を与えるだと？ 愛情を与えるだと？

俺は、愛されたかった。ずっと俺を愛して欲しかった。

だが、俺は愛に裏切られた。

だから俺は、愛が嫌いなんだ。

「こんなもん、喰えるか！！」

俺は立ち上がり、女の持つ弁当箱を払いのける。

弁当箱は宙を舞い、中身が飛び出したまま打ち捨てられる。

「さつさと俺の前から失せろ！ 俺の気が変わらないうちに消えろ！！」

それでも、女は穏やかな顔を崩していなかった。

「ううん、いいのよ。でも、これだけは覚えておいて。どんなことになってもお母さんはあなたを愛しているわ。またお弁当を作って来るわね」

女はそのまま帰っていった。

そう言えば俺はなんですぐに、あの女を殺さなかったのだろう。

あの女を殺すことくらい、どうってことないはずだ。

——どんなことがあっても、お母さんはあなたを愛しているわ。

”お母さん”……。

母.....○

愛している……だと？

赤ん坊の俺を捨てて、別の男に走ってぬくぬくと家庭を築いていたあの女が？

あの女のせいで、俺はどれほど苦しい目にあつて来たと思う？

俺は、愛すら与えられなかった。

ファンガイアどもの人間ファンガイア化実験のせいで、俺は喜びのない人生を強制されたのだぞ。

所詮、愛などまやかした。虚構だ。

でも、
なんだろう。

今まで感じなかった、この苦しみは。心の痛みは。

あの女の微笑みが、忘れられない。

続いてフラッシュバックする、俺の母が別の男に走る光景。

ファンガイアのキングに見せられたヴィジョンだ。

憎しみがこみ上げてきたと思ったら再び頭に浮かび上がる、あの

女の暖かな愛情。

「ぐっ……うおお……うああああああああああああああああああ！！！！！」

俺は、苦しさに絶叫した。

キングにヴィジョンを見せられて以来……いや、それ以上かも知れない悲痛な絶叫。

俺の頬に紫がかったステンドグラスが発現し、一瞬でファンガイアの姿に変わる。

そして、頭蓋骨の城が俺の炎で燃え盛る。
絶叫する俺の周囲を駆け巡る、炎の渦。

俺は、感情の赴くままに叫び続けた。苦しさから逃げ続けるように。

ようやく理性が戻った時、無意識に人の姿に戻っていることに気がついた。

周辺は、黒焦げた頭蓋骨の壁。

飯にするはずだった毛虫どもは、焼け焦げてしまつて喰い物にならない。

地面に転がっていた、”弁当箱”。

そこにこぼれた、焼け焦げてない喰い物。

俺は、喰い物を手で摘んだ。

——あなたのために、お弁当を作ってきたの。

あの女が作ったのか？

あの女が、俺のために作ったのか？

俺が殺した夫と子供の復讐のために、毒を盛ってるかもしれない。

俺は腹が減っていた。背に腹は代えられない。

……喰った。

柔らかい食感。甘酸っぱい味。

今まで喰ったことのないものだ。

でも、なんだろう。この気持ち。

今までに感じたことのない気持ちだ。

「……旨い」

その一言は、俺が意識して言ったわけじゃなかった。
なんでこの言葉を言ったのだろう。

……わからない。

でも、不快な気持ちで言ったんじゃない。これだけはわかるんだ。

翌朝、俺が目覚めると頭脇に弁当箱が置かれていた。
あの女がつくった弁当だろう。

俺は弁当を喰った。

弁当の味を味わいながら喰った。

味わうなんて、今までしたことなかった。でも今はしてみたかった。
った。

その度に思う、”旨い”という気持ちと共に。

翌日も、翌々日も、俺のもとに弁当が届けられていた。

俺はあの女に会ってみたくなった。

何故かはわからない。とにかく会いたいのだ。

とりあえず物陰に隠れて、待ち伏せしてみた。

「セリス、今日の晩御飯よ。たくさん食べて良い子になってね」

銀髪の女が現れて、つぶやきながら弁当箱を置く。
とにかく話しかけてみよう。

「あら、セリス。そこにいたのね」

「あんた、毎回俺のために飯を作ってくれるなんて。気でも狂ったのか」

「あなたのために作っているのよ。あなたはわたしの息子だから。あなたを愛しているから……」

再び聞く、”愛している”の言葉。

再び見る、女の優しい笑顔。

「愛するだと？ 化物になっちまったこの俺をか……！？」

俺は意識を集中し、ファンガイアの姿へと変わる。

「俺はファンガイアだ、貴様らの敵だ！ それなのに俺を愛するといふのか……！？」

俺は辛かった。親に捨てられた事実を知ったことを。

俺は逃げたかった。親に捨てられた事実から。

俺は捨てたかった。ヒトの心を。捨てられた親から産まれた人間であることを。

「俺は親に捨てられた！ 俺を拾ったファンガイアからも虐待された！ 俺に愛を与える奴などどこにもいなかった！ そうだ、みんな敵だ！ 敵！ 敵！ 敵！ 敵！ どれくらいいつも俺の敵だ！ 俺を捨てた母親も！ 人間も！ ファンガイアも！ 動物も！ 草木も！ 夜空の星も！ そして貴様も！！ みんな敵だつ……！！」

俺は心から叫んだ。心から叫ぶのは初めてだった。

本当は愛されたかった。人間のままでいたかった。

だが、世界は俺を拒絶した。

その結果が、このファンガイアの体。

人の温もりを知らない俺の体は、冷たいまだ。

「セリス……」

……温かい。

俺のファンガイアの肉体を包み込む、女の温かい体。

「とても、つらい思いをしてきたのね。わかるわ……あなたの辛さ、苦しみ、そして悲しみが。だって、あなたの体はこんなに冷たいもの。人の温もりを知らずに育った体だもの。だから、わたしが温めるの。あなたの体を……」

「なんの真似だ……」

「あなたの母親は、あなたを愛せなかったことを嘆いていたわ。心から愛しあった人と血を分け合った、大切な息子だというのに、愛することさえできなかった。とても、辛い思いをしていたのよ」

俺を捨てた母親が嘆いていた……だと？

母親は俺を捨てた。

母親への憎しみは、今でも捨てられない。

なのにどうして、懐かしさを感じるのだろう。

「だからその分、わたしがあなたに愛を注ぐの。わたしも、あなたの母親だから。セリスの母親ディアドラだから……」

俺が感じている、「心地良い」感じ。

それは、遥か昔に感じた親の温もりと同じものだった。

母親の胸に抱かれ、体温を感じ、匂いを感じ、鼓動を感じ、生きる歓びを感じていた。

母親の乳を飲み、母親と一体感を感じていた。

それこそ、ヒトに初めて育まれる生こころの欲動だ。
それと同じものを、今俺は感じている。

<セリス、ごめんなさい。あなたを愛することができなくて、本当にごめんなさい……>

一瞬間こえた、優しい幻聴。

一瞬女に重ね合った、女と同じ姿の優しい母親。
でも俺にとっては、憎き悪女……！

「俺に……触るなあ……！」

「きゃあ……！」

俺は一瞬こみ上げた憎しみで、女の体を強引に払いのけた。
これくらい普段はどうってことないはずだった。
しかし今抱いている気持ち——罪悪感。
女の温もりを払いのけた罪悪感が、俺の心を支配していた。

「弁当をそこにおいて、さっさと消えてくれ……！」

女は立ち上がり、弁当を置いた。そして、いつも通り「また持つてくる」と残して立ち去っていった。

それからというもの、おれは「もう一人の母親」が作ってくれた弁当を食べた。

いつ食べても、美味しいと感じる。

キバットも弁当を食べるおれの顔を見て、「今までに見たことがない、いい表情をしてる」と嬉しそうな表情で言った。

そんなある日、”もう一人の母親”はいつもの弁当とは別に、何かを持ってきていた。

「夜なべしてマフラーを編んだの。もちろん、あなたのために編んだのよ」

”もう一人の母親”は俺にマフラーを手渡した。

「巻いてあげる」との言葉と共に、”もう一人の母親”はおれの首にマフラーを巻く。

マフラーは、赤い毛糸で編まれていた。その毛糸が、おれに”暖かい”と感じさせてくれる。

「うふふ、とても似合ってるわよ」

「……そうかな」

この暖かさ、”もう一人の母親”の愛であるような微笑み。これが、”愛情”なのだろう。

”もう一人の母親”が作ってくれるお弁当もそうだ。きつと、おれへの愛があるから出来ることなのだろう。それを感じ、俺は初めて”照れる”気持ちを抱く。

「あなたの照れ顔、とても可愛い」

「……うるさい」

”もう一人の母親”はお弁当を置いていき、立ち去っていった。おれは、感じていた。

”ありがたい”という気持ち。

そうだ、これが『感謝』の気持ちだ。いままで感謝したことなどなかった。

与えられる喜びなど感じなかったからだ。
でも、今は思ふことができる。”もう一人の母親”への感謝の気持ち。

……しかし、しばらくしてからおれは殺気を感じた。
おれの周囲に集まったのは、数体のファンガイア。
そいつらを束ねるのは、『チエックメイト・フォー』の一人・ビショップ。

「キングの命により、貴様を始末する。これもファンガイア族のためなのだ」

やはり、おれを殺すことが目的らしい。今までファンガイアの糧だった人間どもを殺しつくしてきたのだからな。

「やってみるならやってみろよ！」

おれは敵意を高めて、黒き竜のファンガイアへと変化する。
いつもなら、自然発火能力バイロキネシスで一掃することができるはずだった。
使わなくても、『無』の力で圧倒することができるはずだった。
しかし、この時は違っていた。

「馬鹿な……力が、入らない！」

ファンガイアたちの殴打に揉まれながら、力が出ないことを自覚する。

何故だ。何故力が入らない！

しかも、自然発火能力も使えなくなっている。

「どうしたのだ、セリスよ。それが最強のファンガイアの力か……！」

スワロー・テイル・ファンガイアとなったビショップは、おれを嘲笑いながら攻撃する。

多勢に無勢。おれはファンガイア軍団の前に、数の暴力に圧倒される。

だが、まだおれには『キバの鎧』がある！

「キバット、来い！」

おれはキバットを呼び、キバットもこっちに近づいてくる。

「馬鹿め！」

しかしビショップがキバットに魔術をかけ、キバットはビショップの元へと飛ぶ。

「キバット、キバットオ……！」

「これがキバット族か。我が力としてくれる！」

キバットはビショップに操られてしまったのだ。

そのキバットは、ビショップの手に噛み付く。

「変身」

ビショップの腰にベルトが出現し、キバットが装着される。

そしてビショップが変身したその姿は、おれの力となっていたダークキバそのものだった。

「くそっ!!」

おれは、逃げ出した。

今までに感じたことのない、恐怖。

おれは恐怖のままにげだした。

もう体はすでに満身創痍、闘う余力を残していなかった。

クレーターの出口に達したところで、ダークキバの放った衝撃波が俺の体を包む。

「うああああ!!」

おれの周囲で爆発が起きた。おれは、初めて敗北を味わった。

それと同時に、俺は意識を失った。

しかし、意識を失う寸前で芽生えた意識。初めて抱く生の執着。

(おれは、まだ死にたくない……)

そして、世界は真っ暗になった。

つづく

第9話 F r e u d e

ガネーシャ城を奪還した後、当面は軍事行動を起こさず戦力の増強を行っていた。

確かに先の戦では勝てたけど、このままの兵力で攻め込んでも勝てるとは思えない。

だから勝率を高めるためにも軍事力強化は必須だったんだ。

ティルナノグはしばらく平穏な日々が続いた。

ぼくやフロリーナは鍛錬に励み、疲れたら母上の作ったお菓子を食べる。

二人のユリアも交流を深め、とても仲良くなってるみたい。

晩御飯はもちろん、母上が作った料理をみんなで食べる。

シャナン殿もセイラム殿も母上の料理を美味しく食べている。

みんなに喜んでもらえて、母上はとても嬉しそうだ。

そして何より母上の最近の日課は、この世界のぼくのためにお弁当をつくること。

母上は言ってた。料理は女性の愛情が最も伝わるものなんだって。母上、すっかり料理人^{シェフ}が板についたみたい。グランベルの王女だったのにね。

王位継承権は兄のアルヴィス王にあったから、母上はあまり統治者としての教育を受けなかった。

むしろ他の貴族の嫁入りのため、家事を学ぶことが多かったんだって。

だからグランベルの王女なのに家庭的なんだね、母上。

この間なんか夜なべして赤いマフラーを編んでたんだ。

赤いマフラーを編んで、ご飯を作って、一睡もしてなかったんだ。

マフラーをもう一人のぼくにプレゼントして帰ってきた後、母上はソファで眠ってた。

母上の安らかな寝顔、とっても充実してる事がわかるんだ。そうだよ、今が幸せなんだよね、母上。

だけど、平穏な日々は長くは続かなかった。
傷ついた兵士が、ティルナノグに凶報をもたらす。

「ガネーシャ城がファンガイアに陥落されました……」

「レヴィン殿はどうなされたのですか!？」

「レヴィン殿は……戦死なされました」

レヴィン殿が、戦死したんだ。

ガネーシャ城を奪還した後、守将にレヴィン殿がついた。

レヴィン殿はさらに、聖戦士セティの血統を持つ唯一の人間だった。

そのレヴィン殿が亡くなった——ここに、この世界から聖戦士の血統がまた一つ消滅した。

兵士によると、敵はダークキバの姿をしてたらしいんだ。

だとすると、さすがのレヴィン殿でもかないっこない。死ぬのは覚悟していたんだろう。

ガネーシャ城を再び敵に奪い返された。

しかも敵にはダークキバがいる。

ダークキバの変身者と言えば、彼しかない。

(この世界のぼくが、ガネーシャ城に?)

だけど、さらに混乱することが起こった。

ぼくたちの前に、見覚えのあるコウモリが現れたんだ。

<頼む、助けてくれ！ おれの大切な友達を助けてくれ！！>

「君は、キバット族のモンスター……だよね？」

それは、もう一人のぼくに付き添っていたキバット族のモンスターだった。

しかも、ぼんやりしてて実体がないように見える。実体はガネーシャ城のダークキバのもとにある。所謂精神体というものなんだろう。

<そうだ、おれはキバット。おれの友達のセリスが危ないんだ！このままだとセリスが死んでしまう。だから、助けてくれ！！>

キバットと名乗ったモンスターは、もう一人のぼくを”友達”と言った。

もう一人のぼくにも、友達はいたんだ。

でも、彼は気づいてない。むしろ、他人から心を許されることを知らないのかもしれない。

「ふざけるなっ！ お前はあの悪魔のしもべだろう！」

「おれはあの悪魔に家族を奪われた。そいつを許すんじゃない！」

ぼくの周囲にいる人間が、キバットに拒絶反応を見せる。

彼らはもう一人のぼくに大切な家族や恋人を奪われた、だから彼に常に付き添っていたキバットが叩かれるのも無理は無い。

でも、ぼくはわかってるんだ。彼だって生まれてから望んで悪魔になっただけではないことを。

「キバット、ぼくをもう一人のぼくのところへ連れてって！」

もう一人のぼくを救いたい。その意思をキバットに告げる。

しかし、周囲の人間からざわめきが起こる。

彼らはもう一人のぼくの死を願っていたんだ。彼らを突き動かすのは、”憎しみ”なのだろう。

「セリス様！ そいつの言うことを信じないでください！」

「せつかくの悪魔が惨めに死ぬんだ、いい気味だ！ 自業自得だ！
！」

でも、悪さをした人間が死んだところで全てが解決できるわけじゃない。

もう一人のぼくを殺したところで、死んだ人が生き返るわけじゃないんだ。

だったら、これ以上大切な人が死なないように彼を変えるのが一番だと思う。

彼は寂しいんだ。独りぼっちなんだ。

だから悪さをする、寂しさを紛らわすために。

彼には心を許せる人間が誰もいなかった。

暖かな愛に包まれる場所、つまり”帰る場所”が無かった。

……それが、彼を墮天使に変えたんだ。

< いいのか、少年 >

「うん、かまわない」

ぼくは、キバットについていく意思を崩さなかった。とにかく彼

を救いたい思いが、ぼくにあった。

「待つて、セリス。わたしも行くわ」

<あんたは……？>

「わたしはディアドラ、あの子の母親です」

母上が駆けつけてきた。もうすでに、母上とってもう一人のぼくはかけがえのない息子になっていた。

誰よりも、ぼく以上に彼を助けたいという思いが、母上にはあるんだ。

「セリス様あ！ わたしたちも一緒に行きまーす！」

フロリーナとユリアも駆けつけてくる。

「話はフロリーナから聞きました。兄上、わたしももう一人の兄上のところに参ります！」

「わたしももう一人のセリス様を助けたいんです。だからみんなで行きましょう！」

そう、ぼくも、母上も、みんなも、彼を救いたいんだ。

人は確かに醜い存在なのかもしれない。自分勝手な生き物なのかもしれない。

でも、可哀想な人間を憐れむことができる。

可哀想な人間に救いの手を差し伸べることができる。

たとえ醜い存在だとしても、偽善だとしても、人を救いたいと思う気持ち——慈愛があることを否定したくはないんだ。

<これで全員だな、それじゃ行くぜ！>

キバットが念じ、ぼくらは光に包まれた。すると、一瞬で川の岸辺に風景が変わった。

ぼくは周囲を見渡す。母上、フロリーナ、ユリア、キバット……あれ？

いない。キバットがいない。

そう、キバットはファンガイアに奪われた直前、ぼくたちの元に精神体を送った。

もう一人のぼくを救うのが目的なのは言うまでもない。

そしてもう一人のぼくの元にぼくたちを送る役目を終えたから、キバットは消えたんだ。

「セリス！」

母上が、満身創痍のもう一人のぼくに駆け寄る。

「ひどい怪我……今治してあげますからね」

母上は、携帯していた一本の杖を取り出し先端をもう一人のぼくの患部に当てる。すると、彼の傷がみるみる治っていく。

「これでもう、怪我は大丈夫よ」

傷の完治したもう一人のぼくを見て、母上はにつこりと微笑んだ。その後、母上は今日の晩御飯を作ると言い始めてみんなと支度に取り掛かったんだ。

「……………う……おれは……生きてるのか……………」

もう一人のぼくが、意識を取り戻した。

「うん、生きてるよ。母上が君の傷を癒してくれたんだ」

「そうか、助けられたんだな……おれは」

もう一人のぼくは、仰向けになったまま助けられたことを実感しているみたいだった。

「君も、いい友達がいるじゃない。人間よりも人思いの、素晴らしい友達が」

「友達……？」

「キバットだよ。キバットは、君のことを心配してたんだよ。ぼくたちはキバットに導かれて、君のところに来たんだ」

「キバットが……おれの友達……」

きっともう一人のぼくは、自分が好かれるなんて思っていないんだと思う。

彼には愛を注ぐ両親も、優しくしてくれる他人もいなかったんだ。だからキバットに出逢っても、友達という気持ちを持てなかったんだとぼくは思う。

「……おれは、産まれてから嬉しいと思ったことなんてなかった。毎日が苦痛の日々だった。親のいない寂しさが耐えられなかった。だから逃げたかった。おれを受け入れてくれる”楽園”に逃げたかった。でも、いくら探しても楽園なんて見つかりっこない。逃げ出した先に、楽園なんて無かったんだ……」

彼の言葉が、ぼくの思ったことを裏付けていた。

彼はただ寂しかっただけなんだ。”翼をもがれた”だけなんだ。だから産まれた時は天使だったもう一人のぼくは、堕天使に堕ち

るしかなかったんだ。

「なあ、一つ聞きたいことがある」

「何？」

「お前は、なんのために生きている？ おれは、おれ自身の生きる意味が見いだせない。存在する意味が見出せないんだ。だから聞きたいんだ、お前の生きる意味を」

「……生きる意味なんて、わからないよ」

「……何だと」

「ぼくは母上のお腹に生命いのちが宿って、産まれて父上と母上に愛されて、フロリーナたちと出逢って、父上と死別して、今まで生きてきたんだ。でもぼくは一度も、生きる意味なんて考えたことないよ。だって、知りようがないじゃない。人生、どうなるかわからないもの。でもぼくたちこの地球の生命ほしは生かされて生きてるんだ」

「……………」

「だから生きてて楽しいと思うんだ。生きる意味のある人生、それって決められた人生だよ。確かに苦痛はないかもしれないけど、決められた人生通りに生きるなんてつまらないじゃない。どんなに傷ついても、出会いと別れを繰り返して喜怒哀楽を感じていく……それが生きるってことなんじゃないのかな」

「今、お前は幸せか？ 生きてて楽しいか？」

「うん、幸せだよ。とっても楽しいよ」

「だったら、お前におれの気持ちなどわからないな。お前は親に甘やかされて、美味しい食べ物を食べられて、暖かい部屋で眠れるんだ。なのにおれは幸せなんて感じたことがない。お前などにおれを救うことなんてできないんだよ」

もう一人のぼくは、幸せのない人生を送ってきたんだ。

与えられる喜びを知らずに育って、死デスワールドの欲動ばかりが大きくなったんだ。

彼は、幸せが裕福な生活ができることだと思ってる。親に愛されることが甘やかされることだと思ってる。

でも、幸せって裕福なことなんかじゃないよ。

ぼくはたとえ貧しい家に生まれても、いろんな人に愛されて、愛していれば十分だよ。

それに親の愛って甘やかすことだけじゃないよ。厳しさも、立派な愛情なんだよ。

親の厳しさがあるから、優しさのありがたみがわかるんだ。

優しすぎても、厳しすぎてもいけない。

君は厳しさの中でしか生きてこれなかった。

だから、ぼくも、母上も、君に優しさを教えてあげたいんだよ。

「幸せだからこそ君を救ってあげたいよ。だって、人間誰だって幸せになりたいじゃない。ぼくだけが幸せのままで、君が不幸のままなんて心が痛いよ。だからぼくは、君の友達になりたいんだ。君の気持ちをわかりたいんだ」

「もう一人の、おれ……」

もう一人のぼくの瞳は、焚き火の明かりに照らされて活き活きとした輝きを放ってたんだ。

本当は、欲しかったんだよね。君がいることを肯定してくれる仲間が。

だって君は、独りぼっちだったもの。今までずっと、愛に恵まれてなかったもの。

でも、もう君は独りなんかじゃないよ。ぼくたちがついているよ。冷たい君の体は、母上が温もりを与えてくれるよ。

冷たい君の手は、ぼくたちが温もりを与えてあげるよ。

だからもう、苦しまなくていいんだよ……もう一人のぼく。

「セリス様、ディアドラ様が晩御飯にしましょうって」

晩御飯が出来たことを、フロリーナが伝えてくれる。ぼく、お腹が空いてきちゃった。今日の晩御飯は何なのかな。その前に、もう一人のぼくを誘わなくちゃ。

「もう一人のぼく、母上が晩御飯作ってくれたんだ。母上が作ってくれる料理、とても美味しいよ。だから一緒に食べようよ」

「いいのか？ おれが……」

「もちろんだよ。君が来なくちゃ始まらないよ」

焚き火の囲みに、ぼくともう一人のぼくが入る。

焚き火の上には、晩御飯の入った鍋が吊るされてる。

鍋からはいい匂いが漂ってくる。とても美味しいご飯に違いないよ。

「みんな、今日はクリームシチューよ。お腹いっぱい食べてちょうだい」

焚き火に照らされた母上は、とても朗らかな笑顔だった。

母上はお椀にシチューを注ぎ、みんなに配っていく。

「はいセリス、召し上がれ」

そしてもう一人のぼくにも、母上のシチューが入ったお椀が手渡される。

「いただきます」

もう一人のぼくは、スプーンでシチューを掬って口に入れる。

「……美味しい」

顔がほころび、喜びの表情を見せるもう一人のぼく。初めて見る、もう一人のぼくの人間味あふれる表情。きつと、嬉しさを感じているんだよね。

だってこのシチューは、母上の愛情がつまっているのだから。

もう一人のぼくは、お椀のシチューを全て飲み込み、おかわりをねだる。

「おかわり……いいかな」

「いいわよ、セリス」

母上は笑顔で頷き、もう一人のぼくのお椀にシチューを注ぐ。そして再びシチューを口にする、もう一人のぼく。

涙。

彼の目から、溢れる涙。

初めて見る、水晶のように透き通った涙。

「う……う……うああ……」

もう一人のぼくは、お椀を置いて涙を流す。

嬉しいんだよね。暖かいご飯を食べられることが、母上の愛情に包まれることが。

「泣いているの？ セリス」

母上がもう一人のぼくを見つめ、優しげな言葉で問いかける。涙を拭ったもう一人のぼくの顔。新たな涙がこぼれ、焚き火に照

らされてオレンジ色に輝く。

「とても綺麗な涙ね。どの宝石よりも綺麗だわ」

優しさに満ちた、母上の暖かな言葉。

母上は言ってた。涙はどの宝石よりも綺麗なものなんだって。

そうだよ。涙は人の素直な心が作ったものだから綺麗なんだよね。

「泣いていいのよ。わたしの胸でいいから、気が済むまで泣いていいのよ」

もう一人のぼくは、母上の豊かな胸に顔を突っ伏して、声を上げて泣く。

母上は胸に埋まったもう一人のぼくの頭を優しくなでる。

そう、もう一人のぼくは、今とても嬉しいんだ。

今まで知らなかった生きる喜び。それを初めて感じたから嬉しいんだ。

「もう一人の兄上、まるで赤ん坊みたいね」

「彼は生きることに関びを感じて来なかったんです。それにディアドラ様の、お母様の胸で泣けるのですから、とても嬉しいんですよね」

ユリアとフロリーナも、もう一人のぼくの姿に心を和ませる。

そうだよ。これでもう一人のぼくは、ようやく”生きる”ことができるんだ。

母上も、その豊かな胸でもう一人のぼくに生きる^{ニキル}喜びを与える。

産まれたての子は、母親の胸に包まれて生きることと愛されることを知る。

そうやって、人間は健やかに育っていくんだよね。

翌朝。

ぼくの寝ぼけ眼に映るのは、とても綺麗な青空。

あの血に染まったような赤い空が、青空に変わってるんだ。

それに、鳥のさえずり声も聞こえる。

つまりこの世界に、“生”が戻ってきたんだね。

「おはよう、セリス。とても澄んだ、綺麗な青空ね」

母上が、ぼくに声をかける。母上は誰よりも早く起きて、ぼくたちのために朝食を作ってくれている。

フロリーナとユリアも次々に目が覚め、最後にもう一人のぼくが目を覚ます。

「みんな、おはよう」

もう一人のぼくは、穏やかな表情で挨拶をする。

それはもう昔のとは違う、生のおふれる人間の表情。

ぼくもフロリーナも、そしてユリアも、もう一人のぼくの表情に応える。

「おはよう、もう一人のぼく」

「おはようございます、もう一人のセリス様」

「おはようございます、もう一人の兄上」

そこにあるのは、朗らかな笑顔。

笑顔で挨拶すれば、朝を気持ちよく過ごせるよね。

さあ朝御飯にしよう。母上が愛をこめて作った朝御飯を食べよう。

「これからあなたがたはどこへ行くのですか？」

朝御飯のパンとスープを食べる中、もう一人のぼくは尋ねる。

「ティルナノグに帰るわ。ガネーシャ城がファンガイアに陥落^{おと}されて、どうなるかで大変なのよ」

母上が穏やかな口調で答える。そう、ファンガイアとの戦争はまだ終わってないんだ。

ティルナノグが陥落したら、この世界の人類はおしまいだ。それに、キバットが捕らわれている。もう一人のぼくの友達を、なんとしても助けなければならぬんだ。

「君もおいでよ。キバットは、敵に捕らわれちゃったんだ。君の大切な友達でしょ？ だから一緒に助けに行こうよ」

「ああ。キバットは、おれの友達だ。こんなおれにとって、ただ一人わかるうとしてくれた大切な仲間なんだ」

もう一人のぼくは、もう魔物なんかじゃない。

一人の人間^{ヒト}として、かけがえのない友達を救おうとしてるんだ。

「セリス、これを持っておいで」

母上が、一つのポーチをもう一人のぼくに手渡す。

中身は大量のセルメダルとバーストドライバー。

相手はダークキバ、ならばこちらもライダーの力で対抗するしかない。

だから母上は、フロリーナの持っていたバーストドライバーをもう

一人のぼくに手渡したんだ。

「ありがとう、母さん」

「うふふ、わたしを初めて”母さん”と呼んでくれたのね。嬉しい」

もう一人のぼくに初めて”母さん”と呼ばれ、喜ぶ母上。

青空に覆われた大地にそよ風が巻き起こり、もう一人のぼくの赤いマフラーがたなびく。

その赤いマフラーは、もうぼろぼろになっていた。

「あなた、そのマフラー……」

「すみません、せっかくもらったばかりなのに台無しにしてしまいました」

「いいのよ。また新しいマフラーを編んであげるわ」

もう一人のぼくのマフラーは、母上が夜なべして編んでくれたマフラー。

そのマフラーが、もうぼろぼろになった。

でも母上はとても嬉しそう。愛する息子に愛を注げることが、母上にとっては一番の喜びなのだから。

ぼくたちは母上のワープで一気にティルナノグに帰還する。しかし人が少ない。

「ティルナノグとガネーシャの中腹で戦争が始まったんだよ」

という女性の言葉を受けて、その場所に向かうため母上は再びワープの杖を使おうとする。

「待つて！」

ぼくは騎乗して闘おうと思い、母上を一旦待たせる。
ぼくは白い馬、フロリーナはペガサスを引き連れ、それぞれ跨る。
そしてもう一つの馬の影、それに跨っているのはもう一人のぼく
だ。

「みんな、準備はいいわね？ それでは行きましょう」

母上が再びワープを発動する。ぼくたちはワープの光に包まれ、
瞬時に戦場へと移動する。

そこにある光景は、人間とファンガイアの正面決戦。
その中心で、ディエンドとバースがダークキバと交戦している。

「くっ……ダークキバの力、これほどのものとは……」

「何てやつだ、手も足も出ねえ！」

ダークキバの力に圧倒される二人のライダー。

【FINAL ATTACK RIDE Di・Di・Di・DI
END】

「ハアッ！」

ディエンドの必殺技『ディメンションシュート』が、ダークキバ
目掛けて蒼い光の槍を放つ。

今まであらゆる敵を一撃で斃^{たお}してきた、必殺の槍。

しかし、ダークキバはコウモリのような形をしたバリアを張り、
ディメンションシュートを反射する。

「うあああつ!!」

跳ね返されたディメンションシュートはディエンドに命中し、変身を解除されもとの大樹さんの姿に戻ってしまっただ。

「この野郎!」

【D R I L L A R M C R A N E A R M】

バースはクレーンアームの先端にドリルを装着し、ダークキバ目掛けて射出する。でもダークキバはドリルをかわしてワイヤーをつかみ、そのままバースを放り投げる。

圧倒的な強さを持つ、漆黒の仮面ライダー。

だけでもう一人のぼくは馬を駆って、友のいる場所へと向かったんだ。

「どけえ!!」

もう一人のぼくは目の前のファンガイアを馬で蹴散らし、斃れた兵士の槍を手に取り突き刺していく。

それは人間のままでありながら、ライダーやファンガイアと遜色の無い猛進ぶり。

そしてダークキバの前にたどり着くと、もう一人のぼくは馬から降りたんだ。

「キバット、おれだ! 目を覚ましてくれ!!」

「ほう、まだ死んでなかったのか」

友達の名を呼ぶ、もう一人のぼくの叫び。

もう一人のぼくをあざ笑う、ダークキバの言葉。

「もうダークキバは我が力となったのだ。諦めるんだな……ハハハハハ！」

「キバットはおれの友達になろうとした。そしていつもおれを助けてくれた。そうだ、キバットはおれのかけがえのない友達だ！だから今度はおれがキバットを助けだす！！」

そう、今のもう一人のぼくには他人を思いやる気持ちがある。

もう昔の、愛を知らない獣けだものなんかじゃない。

だから闘うんだ、初めて他人のために。

もう一人のぼくの左手から天高く舞い上がる、一枚のセルメダル。それを左腕を右上に突き出し、肘をまっすぐに伸ばしてメダルをキャッチする。

そよ風が吹き、母上が編んだ赤いマフラーがたなびく。

そしてもう一人のぼくは、心の叫びを放つ。

「変身！！」

左手の指に挟まれたセルメダルが、バーストライバーに投入される。

続いてダイヤルが、一気に回転する。

すると、バーストライバーのリセプタクルオーブがもう一人のぼくの体を包みアーマーを生成する。

キバットを救うため、ファンガイアを倒すため、もう一人のぼくは変身したんだ。

仮面ライダーバースに！！

「母上、もう一人のぼくがライダーに！」

「そうよ、セリス。もう一人のあなたは、この世界のライダーと言っても過言じゃないわね」

ダークキバに立ち向かうバース——もう一人のぼくを見て、母上は嬉しそうに語ったんだ。

今のもう一人のぼくはもうデストルドーの権化じゃない、母上の愛が育んだリビドーがあるんだ。

そう、母上によって誕生したんだ。^{バース}ぼくと同じ魂をもつ兄——もう一人のぼくが。

「そうだわ！ セリス、ユリア、ちょっと寄ってきて」

母上が何か思い立ったみたいで、ぼくとユリアが母上に駆け寄る。

「敵を正三角形に包囲して、わたしのシムベリン、セリスのエタルド、ユリアの光の剣で同時攻撃するの。わたしたち家族の愛の力を、ファンガイアに思い知らせてあげるのよ」

「母上、それって……」

「そうよ、わたしたちシアルフィー家の必殺技。名付けてトライアングル・アタックよ」

トライアングル・アタック——ぼくたち家族の力を敵にぶつける必殺技。

ぼくたちの攻撃を同時にぶつければ、どんなに強いファンガイアだってひとたまりもない。

そういえば似たような技を自分の出身世界のペガサスナイトたちが使っていてチェイニーが言ってたけど、母上はそれを参考にしたのかな。

そうしているうちにも、バースとダークキバの闘いは続いていた。

力は圧倒的にダークキバが勝っている。
パンチが交錯し互いの頬にあたっても、吹き飛ぶのはバースだった。

「キバット……!!」

パンチを繰り出してもパンチで吹き飛ばされ、キックを繰り出し
てもキックで吹き飛ばされる。

それでもなお立ち上がる、もう一人のぼく。

もう一人のぼくは、まだ諦めていない。

なによりキバットは、もう一人のぼくのかげがえのない友達。

だから、何としても救いたい。その気持ち、もう一人のぼくに
あつたんだ。

「いい加減諦めよ、お前とこの私とでは絶望的な力の差があるのだ」
「キバット、目を覚ましてくれ……キバットオ!!」

ダークキバの重い打撃によるダメージは深い。

でも、キバットを救うため、もう一人のぼくは踏み出す。

互いに走り、間合いを詰める。

そして再び、互いの拳が交錯する。

戦場に響く、鈍い音。

同時に響く、何かが割れる音。

ダークキバの拳の一撃が、バースの顔に深く食い込む。

バースの顔に亀裂が入り、鏡のように割れる。

その中から、もう一人のぼくの顔の一部が露出している。

【CRANE ARM】

だけど、もう一人のぼくには奇策があった。
拳を繰り出すと同時に、クレーンアームを装備していた。
そしてそのクレーンアームは、キバットを掴んでいた。

「小癪な!!」

ダークキバのボディブローが、バースの腹部に炸裂する。
バースは力もなく、吹き飛ばされる。
でもクレーンアームは、キバットを離していなかった。
そしてついに、ダークキバからキバットが離れたんだ。

「キバット……聞こえるか？」

地面に打ち捨てられても、クレーンアームにつかんだキバットを
見つめるもう一人のぼく。

「……セリ……ス……？」

キバットも意識を取り戻したみたいだ。

「そうだよ、おれだよ。セリスだよ」

「セリス……セリス！」

もう一人のぼくとキバットの久しぶりの再会。
友情を確かめ合う二人。

良かったね。君は今まで助けてくれた親友を助けることができた
んだ。

それは何よりの喜びだと、思えるはずだよ。

「おのれ、もう一度奪ってくれる！」

ダークキバの変身が解けた、スワローテイル・ファンガイアが再びキバットを洗脳しようとしている。
「ただ、そうはさせない。」

「母上！ ユリア！ 行きますよ！！」

「ええ！！」

「待つてましたよ、兄上！」

ぼくと母上とユリアは、スワローテイル・ファンガイアを中心に互いが頂点の正三角形となるように位置を取る。

それから、ぼくはエタルドを、母上はシムベリンを、ユリアは光の剣を構える。

「トライアングルアタック！！！」

ぼくたち三人の攻撃が、ファンガイア目掛けて放たれる。

その刹那、エタルドの衝撃波、シムベリンの火球、光の剣の光刃が同時に命中する。

「ぐおおおお！！！」

トライアングル・アタックの衝撃によるけるファンガイア。倒すことはできなかったけど、大ダメージを負っている。

その間にも、もう一人のぼくはセルメダルを投入していた。

【DRILL ARM SHOVEL ARM CUTTER W
ING BREAST CANNON CATERPILLAR
LEG】

全ての『バース・CLAWS』がバースに装着される。
これが、ぼくも初めて見るバースの最強形態『バース・デイ』。
もう一人のぼくはバース・デイになると、ファンガイアに近づいてドリルアーム、シヨベルアーム、キャタピラレッグによる打撃を次々と繰り出していく。

その怒涛の攻撃に、後退りすることしかできないファンガイア。

【CELL BURST】

ブレストキャノンの砲口から、赤い閃光がほとばしる。

閃光はファンガイアを包み込む。

エネルギーの潮流に飲み込まれる、ファンガイアの肉体。

そして、ガラスのように砕け散る、ファンガイアの肉体。

勝った。

もう一人のぼくが、勝ったんだ。

もう一人のぼくは勝利したことを認識し、割れた面を脱ぎ捨てる。

「セリス！」

母上が、もう一人のぼくのもとに駆け寄る。

「よく頑張ったわね。偉いわ」

母上はその唇で、もう一人のぼくの頬に口づけをする。
柔らかい口づけの触覚に、頬を染めるもう一人のぼく。

「キバット……」

続けてもう一人のぼくが、キバットに視線を向ける。

キバットも嬉しそうに、もう一人のぼくの周囲を飛んでいる。

「キバット、わかったよ。君は、おれにとっても一番の友達だ」

「ああ、友達だよ。おれたち」

「いつも助けてもらってばかりでさ、でも初めて君を助けることができた。とても嬉しいんだ、君のためになれて」

もう一人のぼくとキバットが、シンクロするように微笑み合う。

そしてキバットの口から出る、感謝の言葉。

つられてもう一人のぼくの口から出る、感謝の言葉。

「ありがとう、セリス」

「どういたしまして、キバット」

これで、友情を深められたよね。

君とキバットは、親友なんだ。

お互いの存在を肯定してくれる存在なんだ。

そうだよ。人間は一人では生きていけないんだよ。

自分が自分らしくあるために、肯定してくれる他人が必要なんだ。君にしてもぼくや母上やキバット……みんなが君を肯定してくれる。

それが人間にとっての”楽園”なんだとぼくは思うんだ。

余韻が覚めやらぬうちに、不吉な気配がぼくたちを襲った。

近づいてくる人影、それは母上ともう一人のぼくが見覚えのある存在。

「久しぶりだな、セリス」

「キング……！」

彼こそがファンガイアの魔王・キング。

もう一人のぼくにファンガイアの力を植えつけた張本人。

「その目、どうやらリビドーを持つちまったらしいな」

「ああ……」

「しかも人間側についたと来たもんだ。となれば悪い子はおれ自ら
賤けなきゃならんな」

キングは人間態のまま、手から衝撃波を発する。

「危ない！」

もう一人のぼくは寄り添う母上を突き飛ばし、衝撃波が直撃した
んだ。

「うぐあああ……！」

衝撃波にもう一人のぼくは吹き飛ばされ、地面に打ち捨てられる。
同時にバースの変身も解けた。

そんな彼に母上が駆け寄り、我が子をかばうように寄り添った。

「キング、あなたって人は……！」

母上が滅多に見せない、”怒り”。

ぼくでさえ見たことのない、母上の怒りの表情。

母上はそれを、キングに向けているんだ。

「ほう、別の世界のディアドラではないか。それでそいつの母親に

なつたつもりか？」

「つもりなんかじゃないわ。この子の母親よ！」

「笑わせてくれる。そいつは誰もがシグルドとディアドラの息子だ
と思い込んでやがる。確かにそいつはそんな存在”だった”よ」

「何ですって……！？」

「そいつはおれの血を継ぎ、肉体は徐々に完全なファンガイアに近
づきつつある。元々あった聖戦士の血統もいずれは消える。そう、
そいつはすでにおれの息子というわけだ」

キングの語る、衝撃の真実。

もう一人のぼくの肉体は、いずれ完全なファンガイアになるんだ。
わずかに残っていた人間の部分が消えて、人間では無くなる。

そして何よりも、キングがもう一人のぼくの”父”となったこと
を。

「知ってるか、セリス。おれはお前に対して父親の情を抱いてるこ
とをな」

「あんたはおれに優しくしなかった。そんなあんたが父であるもん
か！！」

「残念だな。お前は産みの親にすら見向きもされなかった屑人間だ。
そんなお前に生きる意味を与えたのは誰だと思う？ おれだよ。お
れはお前にファンガイアの血を与えることで、お前の存在を肯定し
ていたんだよ。大陸征服の道具としてな！」

「何！？」

「これでもお前を愛してやってるんだ。お前のおかげで、我らファ
ンガイアの世界にすることが出来るのだからな。だがお前は、あろ
うことか人間側についた。だからお前をお仕置きしてやろうってわ
けだ」

不気味な笑みを浮かべるファンガイアの王。

立ち上がり、よろけながらも歩くもう一人のぼくに再び衝撃波を放ち、もう一人のぼくが地面に転がる。

「セリス!!」

母上がもう一人のぼくの元に再び寄り添い、悶絶するもう一人のぼくの体を優しく抱きかかえ、ぼくやフロリーナ、ユリア、大樹さん、もう一人のバースに変身していたチェイニーが彼を庇うように立ちはだかる。

もう一人のぼくは、ぼくにとって大切な兄だ。

もう一人のぼくは、みんなにとって大切な仲間だ。

だから守る。もう一人のぼくを!!

「言っておくが、お前たち人類はビショップごときに手こずっていた。おれはビショップなんかより遥かに強い。お前たちなど一瞬で殺すことができる」

キングが念じると同時に、彼から出てくる威圧感と恐怖感がぼくたちの心を満たしていったんだ。

威圧感と恐怖感で、身動きの取れないぼくたち。

そう、”何もできない”んだ。

だけど、これもキングの力の一片。今のぼくたちじゃ、敵う相手なんかじゃない……!

「みんな、ティルナノグに逃げろ!!」

黒い人影が、ぼくたちとキングの間に割り込む。

その姿は、一本の剣を手にしたシャナン殿の姿だった。

手にする剣は、聖戦士オードの剣・バルムンク。

シャナン殿は、キングの魔の手からぼくたちを逃がそうとしてた

んだ。

「シャナン殿！」

「キングは私が引き受ける。そのうちに全軍を逃がせ！」

シャナン殿の表情は、悲壮なものだった。

明らかに格の違う相手。きっと敵わないと思っているはずだ。

そんなシャナン殿は、母上にこう告げたんだ。

「異世界のディアドラよ、セリスを頼む。これ以上、セリスを不幸にしないで欲しい……」

「シャナン様……」

母上は一旦目を閉じ、再び開けるとワープの呪文を唱える。

すると、ぼくたち人間の軍勢は一瞬でティルナノグへと到着する。但し、シャナン殿はいない。今頃キングと壮絶な闘いを繰り広げているんだろう。

「母上、シャナン殿が」

「これも彼の罪滅ぼしなのよ。もう一人のあなたがファンガイアになった原因、それはシャナン様がもう一人のあなたを川に落としてしまったこと。その罪を、シャナン様は自ら贖おうとしてたのよ」

「シャナン殿……」

シャナン殿はもう、生きて帰れないのかもしれない。

でもまだ可能性の話……生還できることは考えられるんだ。

ぼくは自己犠牲が罪滅ぼしになるとは思えない。生きてもう一人のぼくのために尽くすこと、それも罪滅ぼしになるんじゃないのかな。

だからぼくは、シャナン殿に生還して欲しいと願うばかりだ。

「我が名はシャナン、イザーク王国王子にしてオードの末裔。ファンガイアの王よ、我がバルムンクの鎧としてくれよう！」

「フン、くだらん前置き振りやがって。いいだろう、お前には特別に、おれの真の姿を見せてやろう」

後で知ることになるのだけれど、キングの正体は白いステンドグラス状の肉体と黄色がかった角を持つ、クワガタムシに似た姿のファンガイアだった。

「くっ……参る!!」

シャナン殿がどうなったかについては、翌日になってからのことだった。

そしてそれが、人間とファンガイアの最終決戦の幕開けであることをぼくたちはまだ知る由もなかったんだ。

つづく

第10話 M u t t e r

キングが、ついに動き出した。

ファンガイアの王にして最強の戦士・キング。

その力は人間態のままでも、バースの力が通用しないほどだった。その恐るべき力をもつファンガイアの血が、おれの体に流れている。

しかもファンガイアの血は、徐々におれの体をファンガイアに変えていく。

おれは、聖戦士の血を引く両親から産まれた。

だけど両親の血もファンガイアの血に侵蝕され、消えていく。

もう、おれはシグルドとディアドラの息子ではなくなりつつあったんだ。

おれは一度、人間^{ヒト}を捨てた。

その代償が、このファンガイアの体なのかもしれない。

恐怖……

人間でなくなることの恐怖が、おれを支配する。

今までは感じなかった恐怖を、身にしみて感じる。

そうだ、リビドーだ。

もう一人のディア^{母さん}ドラがくれた、優しい温もり。

おれは母さんの温もりに包まれて、リビドーを取り戻した。だから感じるんだ、人間でなくなることの恐怖を。

「セリス、どうしたのです？ 浮かない顔をしているわ」

もう一人の母さんが、おれの容態に気づく。

「ファンガイアの血に苦しんでいるの？」

「……はい」

おれの肉体と魂は、父と母の本当の愛が実を結んだ果実だった。しかし、その愛の果実が、一匹の化物へと変わっていく。両親にとって、これほどつらいことはないだろう。

そして化物へと変わることは、周囲からの拒絶を呼び起こすことにもつながる。

おれは手に入れた、おれを肯定してくれる存在を。

それが瞬時に失われたら、元のデストルドーに支配された魔人に戻ってしまうかもしれない。

「大丈夫よ。あなたが完全にファンガイアになっても、お母さんはあなたを愛し続けるわ」

もう一人の母さんは、悩めるおれを包み込もうとしている。

「だってファンガイアになっても、血が繋がらなくなったとしてもセリスはセリス。シグルド様とわたしの魂を受け継いだ、愛おしい息子だもの」

そう、これが”母性愛”なんだ。

子供がどんなことになっても、優しく包み込んで肯定してくれる愛情。

母胎の中で守られているような、暖かくて気持ちいい感じ。

この母性愛が、子供に安心感をもたらすんだ。

「だから恐れなくてね。わたしはいつでも、あなたの味方よ」

「ありがとう、母さん」

気分が楽になった感じがする。

そう、母親に愛されているからだ。

母親の愛が、おれの心を癒してくれるんだ。
でも疑問が残る。

なぜそこまでして母さんは優しくしてくれるのだろう。

母さんのお腹が育んだもう一人のおれと同じ存在だとしても、疑問は消えない。

お産の痛みに喘いだわけでもないのに、なぜ愛を注いでくれるのだろう。

「あなたのお産の痛みなら、十分味わっているわ。わたしの顔をあなたに傷つけられて、この世界のわたしの真実を知って、体を痛めつけられながらもあなたに愛を注いだ。そう、あなたに接するときでも、お産の時と同じくらいに心も体も痛めていたのよ。だから、たとえわたしのお腹から産まれなくてもあなたはわたしの息子、あなたはわたしたちの家族なのよ」

女神のような、母さんの微笑み。

慈愛に満ちた、母さんの微笑み。

そうだ、この人はおれの母親なんだ。

替え玉なんかじゃない、”本当”の母親なんだ。

ティルナノグの邸宅の廊下――

おれにとって初めて踏み出す、人類最後の地。

その邸宅の一室の前に、もう一人のセリス^{おれ}が立っていた。

「やあ、もう一人のぼく」

「そこで何してる？」

「ユリア皇女が嬉しそうに、母の霊と話し合っているんだ」

おれが滅ぼしたグランベル帝国唯一の生き残りであるユリア皇女が、母親の霊と話し合っている。

「兄のユリウス皇子は、ロプト教団によってロプトに覚醒した。彼はその力で彼女と母を殺そうとしたんだ。だけど母はユリアをワープで逃し、ユリウス皇子に殺されたんだ」

その影響でユリアは記憶を失っていたが、母親と再び会うことで全てを思い出した、ともう一人のおれが説明した。

おれももう一人のおれと同様に部屋を覗き見るが、ユリア以外に一人もいない。ユリア以外の声すらも聞こえてこない。

「ユリアが独り言を言ってるようにしか見えないけど……」

「あ、そうだったね。君はファンガイアになりつつあったんだったね……」

おれには霊を視ることはできない。

ファンガイアの血を注入される以前は霊視能力があったかも知れないが、今では俺の体の人間の血が消えかかっている。能力を喪失するのも仕方ないことだろう。

おれは立ち去ろうとするが、もう一人のおれに呼び止められた。

「もう一人のぼく、ユリア皇女の母親が誰だか知ってる？」

「知らないよ」

「ディアドラ皇妃。君を産んでくれた母親でもあるんだよ」

「おれを産んだ、母親が？」

今まで憎んできた、おれの母親。

キングが見せたヴィジョン——父を捨て、他の男に抱かれ、悦び、

そいつとの間に設けた息子と娘と共に贅沢な暮らしをしていた銀髪の女。

でも今はもう、憎しみはない。

なぜなら、もうそいつの息子じゃないからだ。

おれはファンガイア。キングの血を継いだ、キングの息子になってしまったんだ。

そんなおれに人の心を取り戻させてくれたのは、その銀髪の女と同じ魂を持つもう一人の母親母さんともう一人のおれだ。

もうおれに、産んだ母親への慕情は無いんだ。むしろ、もう一人の母親がおれの産みの母親なんだ。

「もうおれと産んだ母は、住む世界が違ってしまったのかもな」

「どうして？」

「むしろおれはそれを望んでいた。その望みを叶えたのは、皮肉にもキングだった。もうあいつなんておれにはいらぬよ。ユリア妹を愛し続けてりゃいいんだ」

おれはそう言って再び立ち去ろうとするが、今度はユリアの声がおれを止めた。

「待つて、お兄様！」

白いローブと紫のケープに身を包んだ、銀髪の少女。

そいつはおれの種違いの妹だ。

「お母様は、あなたを愛せなかったことを悔いています。幽霊になつても、あなたのことを今でも想い続けています」

「この血がなくなつた、おれをか？」

おれは、顎から頬までにファンガイアのステンドグラス状の表皮

を発現させる。

これが、おれがファンガイアであることの証明だ。
おれの身体から、産んだ両親の血が消えかかっているんだ。
だからもう、おれは家族のようで、家族じゃないんだ。

「お兄様……」

「ユリア、お前には天使の翼がある。お前もロボットの血に苦しんでるらしいが、両親から愛されて育った気高い天使だ。だからお前は
何が何でも生きて、いい夢を見続けるんだ。じゃあな」

おれは今度こそ立ち去った。

逃げるようにと言ったぼうが合っているのかもしれない。

待って、お兄様、と妹の声が聞こえても、おれは立ち止まらない。
このおれにいい夢など見られない、いい夢を見る権利なんてない
んだ。

それでも、おれにはすべき事がある。

父親との……いや、キングとの決着だ。

おれは、どうしてもキングに会わなければならない。そして闘わ
なければならない。

おれとキングの一对一で、決着を付けなければならない。^{サッ}

それは、一度は生を否定した自分への決別でもあるんだ。

そして何よりも、キング自身がテレパシーで来い、と告げている
からだ。

翌朝、朝焼けが空をオレンジ色に染める刻。

おれはみんなに内緒で馬を走らせ、キングの待つ場所へと向かつ
た。

母さんや、親友となったキバットにさえ内緒だった。

ファンガイアの軍勢が見えてきた。その中心に、キングが一人立つ。

ここで、おれの旅は終わりを告げるのかもしれない。
今までの思い出が、走馬灯のように蘇る。

ファンガイアに虐待され、精神を壊され、本能のままに全てを破壊し続けた忌まわしき自分。

そのおれを、暖かな母性愛で救ってくれた母さん。

そのおれに、無償の愛を与えてくれたもう一人のおれ。

そして、おれにとって無二の親友となったキバット。

苦しみに満ちた世界の中に差し込む、一筋の光。生きる歓び。

散々苦しんだからこそわかる、生きることのありがたみ。

そうだ、”幸せ”だ。

生きる歓びを深く味わうこと、すなわち「生きてて良かった」と思えること。

それが幸せなんだ。

「来たか、我が息子よ」

おれは、キングの目の前で馬から降りる。

「お前は人間どもを殺戮したが、少々やりすぎだ。人間は我々に栽培されるだけの”食糧”だからな。そしてお前はおれたちに叛逆した。お前を愛しく思うからこそお仕置きしなければならん」

「おれはあんたに散々お仕置きされたさ、優しさもなく」

「お前に優しさを与える奴がどこにいる？ お前を愛してくれる今の母親も、お腹を痛めてお前を産んだわけじゃない。いずれはお前を捨てる。お前が永久に心を落ち着ける居場所など、どの世界にもない！」

「そうかもな。そうになったら、おれは再び墮天使になって世界その

ものを消し去るだけだ。あんたの思い描く、ファンガイアが支配する世界も消える」

「言いたいことを言うまでになったか。まあいい、死ぬのもいい癖になるだろうよ」

おれとキングは、同時に顎から頬までをステンドグラスの表皮に覆わせ、ファンガイアに変身する。

おれの姿は、黒き竜のファンガイア。一方キングは、白きクワガタムシのファンガイア。

姿は酷似している。なぜならおれのファンガイアの血は、キングの血だからだ。

「おっと、闘いの前にこいつを手渡さなければ」

キングはそう言う、おれの足元に長い毛のついた何かを投げ渡す。

それは、長い黒髪の男の生首。

おれをファンガイアにした元凶の一人である、シャナンだ。

「所詮聖戦士の力などその程度だ。しかも聖戦士の力ごときに、人間は溺れて滅びかけた。こんなに愚かで弱い生き物が、この世界のどこにあるというのだ？」

「確かに、愚かで弱いのは人間しかいないよ。でも悪いことをするだけが人間じゃない。愚かで弱いからこそ、それを受け止めて優しさを与えられる存在にもなれるんだ。それが慈愛というものだって母さんの温もりの中で知ったんだ」

「フン！ お前とて所詮は人の子か。では始めようか、お仕置きの時間を！」

おれとキングは、駆け出して拳を握り締める。

そして交錯する、おれとキングの拳。

パワーは圧倒的にキングが勝っていた。デストルドーに満たされることでしか力を発揮できないおれでは、不利な状況だったのだ。

「うあああつ！！」

おれの体が宙に舞い、さらにキングが飛び上がって追撃する。

地面に打ち捨てられて立ち上がったところに、キングの首相撲…

…そして膝の連打。

駄目押しにボディーブローを見舞われ、おれの体はさらに吹き飛ばす。

おれは人間の姿に戻り、力もなく転がっていく。

「所詮デストルドーのないお前など、雑魚ファンガイアにも劣る。全く、どうしようもない息子だな」

勝てない……今のおれでは、勝てない。

キングの力は、圧倒的だった。

絶望的に高い壁。乗り越えることのできない高い壁。

そして死。

おれの体に忍び寄る死。

怖い……死ぬのが怖い。

命を失うのが、怖い。

「どうした、その恐怖に揺れた瞳は。笑い種だな、お前も母の愛なんて余計なものを注がれてしまったからそんな無様な姿になる。お前に母の愛などいらない、それがこのお仕置きでわかっただろう」

おれを愛してくれる母の愛情を否定する、キングの冷徹な言動。

確かにおれはようやく母の愛に出会うことが出来た。

おれは人間の心を取り戻すことが出来た。

人間の心を持つこと——それは生きる意欲。生きているからこそ恐怖も苦痛も感じる。

間違っていたのか。おれは母に愛されることが間違っていたのか。おれには、生なきまま破壊者として暴れ狂う人生しかなかったのか。

……いや、違う。

人間、産まれたときは誰でも天使だ。破壊者になることなど誰しも望んでない。

そうだ、おれだって人間だ。肉体がファンガイアになると、心は人間だ。

「違う……おれは人間だ。だから別の世界の同じ存在だろうと母さんに愛されるのが嬉しかった。それでようやくわかったんだ、生きる喜びを！ たとえここで命を落としても、母に愛される喜びを否定したくはない……そして、あんたに否定される筋合いは無い！！」

「チエックだけど、おれがここで立ち上がり啖呵を切ろうと、もうおれの詰・メイトみだった。

キングは手刀を型取り、おれの心臓に狙いを定める。
そして放たれ、血しぶきが飛んだ。

それは、おれの青い血ではなかった。

紫色の血。

おれの目の前に映るのは、キングの手刀に胸を貫かれた妹コリアの姿だった。

「ユリ……ア……？」

ワープの杖でおれとキングの間に割り込んだユリア。
彼女の口から、大量の紫の血——ロプト血族の血が吐血される。
そして崩れるように倒れる、妹の体。

「ユリア……！」

倒れた妹に寄り添い、おれは体を抱きかかえる。

「お兄……さ……ま……」

さらに後ろから響く銃声。何発もの銃弾が、キングに撃ち込まれる。

「大樹……！」

「ここはボクに任せたまえ、変身！」

【KAMEN RIDE DIEND】

海東大樹がディエンドに変身し、キングに立ちはだかる。
そんなことよりおれは、倒れたユリアが心配だ。

「馬鹿野郎、生きろと願ったのに……」

「いいの……です。私は……いつか……ユリウス兄様のように……
ロプトになってしまいかもしれないから……」

「ロプトなんて関係ない！ 両親に愛された生命いのちだろう！ その命
を粗末にするなよ……！」

「セリス兄様も……同じです。あなたは生きることを諦め……一度
は魔物になりました。でも、あなたこそ……生きて欲しかったので

す。それが……お母様の……あなたへの償い……ですから……」

おれの目から、涙がこぼれる。

もう血が繋がらないというのに、何故おれは泣くのだろう。

いや、わかつてる。今のおれは、全ての生命を慈しむ心がある。

一度は生きることが捨てたからこそ、生命を大事に思えるんだ。

「ユリア、死ぬな！……死んだら、天国の両親が悲しむ……！！」

「私のために、涙を流してくださいさるのですね……嬉しい……お母様の言った通りの、”大切な人”だったのですね……お兄様……」

おれの額から流れる青い血が滴り、ユリアの頬に落ちる。

その青い血はユリアの口から流れる紫の血に交わり、ひとつに溶け合う。

そしてユリアの命の炎が、燃え尽きようとしている。

「ユリア……」

「私はお兄様に会ったために……生きてきたのかも……しれません。お兄様に……愛されて……私、とても……幸せ……」

ユリアは静かに、目を閉じる。

おれは、この状況をすぐには飲み込めなかった。

「ユリア……ユリア……！！」

いくら体を揺さぶっても、ユリアは目覚めない。
死んだ……ユリアの命はここで散ったのだ……。

「うああああああっ！！！！」

生きることを願った妹の死に耐えられず、おれは絶叫する。

おれは、親に愛されなかった。その一方でユリアは親の愛に恵まれて育った。

ユリアの命は、おれの命なんかよりよほど価値があったんだ。生き残るなら、ユリアの方だったんだ。

「もう一人の兄上、しっかりしてください！」

活き活きとした少女の声が、おれの耳にこだまする。

その声の主は、シグルドとディアドラの愛が結実した、ユリアのもう一つの可能性。

「おれの妹は、おれをかばって死んだ。両親に愛された妹の命は、おれの命なんかよりよほど価値があったはずだ」

「そんなことはありません。命はどんなものも尊いのです、命の価値に優劣なんてないのです。もう一人のわたしも、あなたと同じようにロプトの血に苦しんで生きることを見失いかけていました。でも、もう一人のわたしはわたしとこの世界の母上を信じて懸命に生きてきました。それに、あなたが生きてきたからこそもう一人のわたしは幸せを感じることができたのです！」

「おれが……他人を幸せに……」

「もう一人のわたしは、ロプトの血のないわたしに憧れていました。わたしを幸せな人だと言ってくれました。だからわたしは生きます！ わたしの幸せがもう一人のわたしに届くように、わたしは生き続けます！」

「ユリア……」

「もう一人の兄上も生きてください！ ここであなたが死んだら、母上と兄上も、あなたを産んだお母様も悲しみます。だから、どんなに苦しくても生きて、生き続けてください！！」

もう一人のユリアが、バースドライバーを手の前に出る。

おれが使っていたバースドライバーは、昨日の闘いで破損し使用不能となった。

現存するバースドライバーがユリアの腰に巻かれ、彼女はセルメダルを上にはじき飛ばして左肘を曲げ、左の二本の指で掴みとる。

「変身！！」

バースドライバーにセルメダルが入り、ユリアの四肢をアーマーで包み込んでいく。

そしてユリアは仮面ライダーバースの姿に変貌を遂げ、ディエンドとキングの闘いに加勢する。

「もう一人のセリスよお、一人で行くなんて水臭えじゃねえか」

赤毛の青年・チェイニーも駆けつける。

「お前にとってこつそり出ていったつもりでもよ、バレバレだったんだぜ。何せ、ティルナノグの見張りがお前の行動を見ていたんだからな」

チェイニーはそう言いつつ、腰にベルトを出現させる。その後肉体が変化し、見たこともない異型の存在に姿を変える。

「こいつはクウガ・マイティフォーム。おれの変身能力を持ってるや、ライダーのコピーも可能だぜ！」

チェイニーは変身能力を持つ。先ほどのようにライダーへの”変身”も可能だが、バースのような所謂”装着系”のライダーへの変身は無理らしい。

チェイニーはクウガの姿で、キングとの闘いに加勢していく。

「セリスーッ!!」

ここで新たに現れたのは、おれの親友キバット。

「キバット!」

「黙って出ていくことはないだろ! お前はもう独りじゃないんだよ。もう一人のセリスが、ディアドラが、ユリアが、フロリーナが、チェイニーが、大樹が、そしておれが、みんなお前が必要なんだ! だからこれはお前だけの闘いじゃない、みんなの闘いなんだよ!」

「……ありがとう」

そうだ、おれはもう独りなんかじゃない。

仲間がいるんだ。おれを肯定してくれる、愛してくれる仲間が。

たとえどんなに強大な敵でも、一人ひとりの力が積み重ねれば敵の力を凌駕できる。

みんなと共に闘い、共に生きる。

それが、人間の力なんだ……!!

すると突然妹の亡骸^{ユリア}が散華し、光の粒へと変わって上昇していく。

その光の粒が集まり、光の竜へと姿を変えていく。

「光の竜……ナーガ!」

それは紛れもなく、古の戦乱にてロプトウスを打ち破った光の竜・ナーガ。

妹の体には、光と闇の意思が同時に眠っていた。

その妹の光がナーガの姿となって、おれたちの目の前に現れてい

る。

ナーガは突然発光しおれを包み込み、気づくとおれの意識だけが異空間に飛ばされていた。

異空間は歪み、ある豪華な一室へと飛ぶ。

そこで銀髪の女性と赤髪の男性が床を共にしていた。

――私は、お前を愛している。

――ああ、ああ、私も……

そつだ、見覚えがある。でも、何か様子が違う。

――ごめんなさい、セリ……

――今何か言ったか？

――いえ、何も……

女性の目は、悲しげで虚ろだった。その目から溢れる、悲しき涙。悦びの中にいるのに、儚げな表情をしていた。

異空間が歪み、次のヴィジョンが現れる。

先ほどの女性が赤髪の息子と銀髪の娘と共にいる。

――私には、”大切が人”がいるのです。

――おかあさま、たいせつなひとってだれ？

――あまりよく思い出せないのだけど、青い髪で、小さくて、愛しい、私の半身なのですよ。

――ほんと、あってともだちになりたいな。

――わたしも！

ヴィジョンが三たびかわり、今度は深い森の中。

――捜しましたぞ！ 一体どこへ行かれるのですか！

——お願い、行かせて！ 私大切な人がいるのです！ どうしても逢いたいのです！！

——そうは行きません。王宮にお連れしますぞ！！

銀髪の女性は、いつも誰かを案じ、会いたがっていた。

見るからに、よく覚えていないようだ。

でも、銀髪の女性。おれは知っている。

キングが見せたヴィジョン、そのままだ。

そうだ、あの女性は……おれを産んでくれた母親。

「セリス……」

「母……さん……？」

おれの意識は、現実の世界に戻された。

そこでおれの名を呼ぶ、母さんの声。

「おれの目の前に光の竜が現れて、ヴィジョンを見たのです」

「それはこの世界のわたしがあなたに見せた真実なのですよ」

キングが意図的に隠した、母親の真実。

母親はロプト教団に連れ去られ、洗脳されてしまった。

しかし、洗脳されて自分が自分でなくなってもなお、おれを案じ
想い続けてくれた。

母親は、おれを裏切ってなんていなかったのだ。

「母さん……」

「お産の痛みに耐えて産んだ子を見捨てる母親などどこにいますよ
う。この世界のわたしは、命を散らして霊となった今でもあなたを

愛しているわ。だからわたしはあなたの母親でありたいの。だってこの世界のわたしは、わたし自身でもあるのですから……」

心が軽くなって、洗われた感じがする。

そうだ、今までであった母親への憎しみがなくなったんだ。

そこに、キバットが現れる。黒い姿を金色、黄色い眼を赤に変えて。

「キバット、その金ピカな姿は……！？」

「セリス、ナーガがおれに力をくれたんだ！ お前の母親の想いが、おれの中に宿ったんだよ！！」

キバットは嬉しそうに、はしゃぎ回る。

キバットは、おれにとつての初めての友達。人間ならぬ、初めておれを理解してくれた他人。

産まれたての赤ん坊は、最初の他人である母親に愛されるところから人生が始まる。

そう、キバットはおれを産んだ母の愛の器となったのだ。

「セリス、それがあなたの力です。あなたの生きることを肯定する意思と、母の想う気持ちが結実した、人間であるあなただけの力なのですよ」

「はい」

もう、デストルドーに頼る必要はないんだ。

これがおれの生きる力。その象徴が黄金のキバット。

もう一度立ち上がるんだ。キングを倒して、過去と決別する時なんだ！！

「行こう、キバット！」

「よっしゃ！ キバって行くぜえーっ！！」

おれは左腕を突き出し、キバットが噛み付く。

「ガブッ！！」

すると噛み付かれた左腕から光の力が流れ込み、おれの頬に片方三本ずつの牙を象ったステンドグラス状の皮膚が発現する。そしておれは右手でキバットをつかみ、前に突き出す！！

「変身！！」

キバットを具現化されたベルトに装着し、それと同時に温かい光の力がおれの全身を駆け巡る。

それは、おれが産まれる前に感じた母胎の中の暖かさ。そして産まれた時に抱かれて感じた、母親の温もり。

こうしておれが変身した姿は、金色の体と紅い複眼の『黄金のキバ』となったのだ。

「君と共にいるのは母だけじゃないよ」

黄金のキバとなったおれの側に、もう一人のおれが現れる。

「君の父も一緒だよ。それからこんなこと言ってた。異型の姿になってもお前は私たちの息子だ。だから共に闘い、キングを倒そう……」

もう一人のおれが父の言葉を伝えた後、おれは気配のする方向へと振り向いた。

だけど、そこには誰もいない。

でも感じる、優しい父の温もり。その温もりが一本の剣へと変化する。

それは父の愛が闘う力に具現化された、おれだけの剣。

「ザンバット……ソード……」

意識せずにつぶやいた、剣の銘^な。いい名前だね、ともう一人のおれは笑顔で褒めてくれた。

「君がキバとして闘うのなら、ぼくはこの剣でキングと闘う」

もう一人のおれが取り出した剣、それは聖なる力が込められた、神器の一つ。

「ぼくも君と同じバルドの血を引く聖戦士だよ。だからこの世界から失われた聖戦士の誇りを背負ってぼくは闘うんだ、この『ティルフィング』で！」

聖剣・ティルフィング——それはおれの産みの父・シグルドの剣。もう一人のおれも、異世界のシグルドの息子だ。

おれの片割れである『白き翼の天使』が手にした剣は、聖なる光を湛えていた。

おれともう一人のおれは顔を合わせて頷いた後、キングに向かって駆け出した。

おれの手にはザンバットソード。

もう一人のおれの手にはティルフィング。

二本の剣が登りつつある太陽に照らされ、紅い輝きを放つ。

キングはライダーが三人がかりでも、なお圧倒している。

そのキングに、おれたちの剣が振り下ろされる。

「ぐあああつー!!」

後退りするキングに、さらなる剣の一撃。

キングの胸に傷が刻まれ、白い体がよろける。

「なんだ、その力は……お前は、一体……!?!」

「おれは、父と母の魂を継いだ、ファンガイアの聖戦士だ!!」

一方、遠くからは母さんとフロリーナが何やら身構えている。

「ディアドラ様、生身ですけどセルバースト撃ちます。支えてください!」

「待つて。せつかくチェイニーがナーガの書を持ってきたことですし、わたしのナーガの力をバースバスターに込めましょう。つまり、科学と魔法の融合つてところね」

「流石はディアドラ様、いいアイディアですね!!」

母さんはヘイムの直系の血統にして、ナーガの書の使い手。

そのナーガの力が、母さんの右手を通じてバースバスターに注入される。

「でも反動がさらに大きくなりませんか?」

「そうね……わたしだけでは支え切れないかも」

フロリーナの指摘に、困り顔を見せる母さん。そこに、赤い髪と黒い衣服の男が現れる。

「セイラム殿!」

「私も力になりました。私たち人類のしてきたことは、結果として文明に破滅をもたらすだけでした。その私たちの愚かさを受け止め、生き残った人々と共に生きていきたい。そのためにはまず目の前の脅威を取り除くのが先です」

セイラムは、ロプトを信ずる社会の中から人間の暗黒面を見通してきた。

それゆえ彼は理解している、人間の愚かさを。

ノアの洪水然り。ソドムとゴモラもまた然り。

生きていることを忘れ、傲慢と墮落に溺れた人類——それが最終的には破局をもたらすのだ。
カクストロフ

いつの世も、どの世界でも……。

バースバスターの砲口が黄色い光に包まれる。

本来のセルメダルのエネルギーにナーガの力が上乘せされ、溢れんばかりに増幅する。

「皆さん、準備はいいですか!？」

「ええ!」

「では行きますよ……」

フロリーナの掛け声に、頷く母さんとセイラム。

二人の手が一三歳の少女の体を支え、見た目はあたかも投石機のようなのだ。

「ナーガ・セルバーストツ!!!」

母さんとフロリーナの掛け声が、戦場にこだまする。

そして放たれる、科学と魔法が調和するエネルギーの潮流。

その反動は予想以上に凄まじく、バースバスターを持つフロリーナは歯を食いしばり、母さんとセイラムの支えがあっても後退りしてしまう。

バースバスターから放たれたエネルギーは、おれたち二人の剣に引き裂かれて後退りしたキングに直撃する。

「グオオオオオッ!!」

ナーガとセルバーストの合体技を受け、その絶大なダメージに悶えるキング。

さらにチェイニーが必殺の飛び蹴りを放ち、キングはさらなるダメージを受ける。

「行くよ、ユリア」

「はい!」

【FINAL ATTACK RIDE Di・Di・Di・DI
END】

【CELL BURST】

ディエンドのディメンションシュート、バースのブレストキャノンからのセルバーストも放たれ、二本の光の槍がキングを貫く。三度目の衝撃に耐え切れず、ついに膝をつくキング。

「もう一人のぼく、最後はぼくたちが決めないと!」

「ああ!」

おれは、ザンバットソードに内蔵されたフェッスルを取り、キバットに吹かせる。

「ウェイクアールプ！」

奏でられる笛の音色、それと同時におれは柄のザンバットバットで刀身を研ぐ。

刀身に魔皇力が行き渡り、紅い輝きを放つ。

もう一人のおれも、意識を集中しティルフィングの刀身に聖なる力が行き渡る。

「行くぞ！」

「うん！」

「ファイナルザンバット斬！！！」

おれともう一人のおれはキングに向かって走りだす。
キングがダメージに悶えながらも立ち上がるうとしても、走るのをやめない。

そして振り下ろされる、紅と白の光の刃。

キングの肉体に描く、光の軌跡。

「グアアアアアッ！！！」

倒れた。

ファンガイア最強の戦士キングは、ついに倒れたのだ。
それと同時に、人間態に戻るキング。

おれもキバの変身を解き、元の人間の姿に戻る。

「キング……」

「くくく……これが”人の想いの力”……か……」

倒れ、死に行くというのに不気味な笑いを絶やさないキング。

「あんたには感謝してる。何しろ、あんたのおかげで生きることの大切さ、そして人間の素晴らしさを誰よりも理解できたような気がするからな。ありがとう、”父さん”」

おれが初めて発する、キングへの三人称——「父さん」。

皮肉にも、敵対することで初めてキングがおれの父親であったことを認識できたのかもしれない。

それに、どれほど忌まわしい過去を持っていても、それ自体が人生の積み重ねとなるのだ。

絶望の先に差し込む光。

おれはそれを追い求めつづけ、ようやく人間というものがわかったのかもしれない。

「……お前はまだ知らないようだな」

「何だって……？」

キングは、まだ言葉を止めない。

「お前の肉体はもう、完全なファンガイアとなった。それからお前が、今日より新たなキングとなる……」

「おれが……ファンガイアのキング……」

「キングに人間の心などいらない。その邪魔なものを消しさつて、心も体もファンガイアになるのだ！」

同時に掌から放たれる、キングのエネルギー。

それはおれの左手に刻まれ、皮膚にファンガイアのキングの証・
ファイアーエムブレム
”炎の紋章”が出現する。

「キング、おれに何をした!!」

「もう手遅れよ。ファンガイアはお前を疎んでいる。お前は、孤独の中で寂しく死んでいくのだ……フハハハハ……」

キングの肉体は、ガラスのように砕け散った。

そして感じ取る、おれの体の異変。

キングの紋章が刻まれた左手から、氷のような冷たさを感じる。

その冷たさは、同様に左手から発現したステンドグラスの表皮と共に左腕へと伝わり全身へと駆け巡る。

異変は五感にも及んでいた。

視界の色彩の異常、エコーがかかるように聞こえる聴覚、ふらついて倒れ、何も感じない触った感覚。

そう、おれの心が消えて行く。

おれが、おれでなくなっていく。

もう、人間として生きることができなくなる。

身も心も、一匹の魔物になってしまう。

そしてついに五感が無くなる。

その後キングに見せられたヴィジョンが映しだされ、フェイドアウトするように世界が『無』になっていく。

きえるのやだよ。

ぼくはまだきえたくないよ。

たすけて……だれか、たすけて……

おかあさん……ぼくを、たすけて……

ぼくを、ひとりにしないで……

おかあさん……

「BGM：主よ、人の望みの喜びよ」

あたたかい……

ここは、どこなのかな。

まっくらで、なにもわからないや。

でもわかるんだ。

ひとのぬくもり、しんぞうのういき。

——シグルド様、聞こえますか？ 私たちの子の鼓動を。

——うん、聞こえるよ。

おかあさん。

ぼくは、おかあさんのなかにいるんだよね。

おかあさんとおとうさんがあいしあって、おかあさんのなかにぼくのいのちがやどったんだよね。

——私たちの子供の名前、何にする？

——『セリス』ですわ、シグルド様。

——『セリス』か、いい名前だね。

あいたいよ。

おかあさんに、あいたいよ。

だって、ぼくをまもってはぐくんでくれたもの。

これも、ぼくのことをあいしてくれているからだよね。

——早くあなたに逢いたいわ。私の愛しい『セリス』……。

おなかのそとはこわいけど、おかあさんといっしょならこわくないよ。

おかあさん、ぼくがでてきたらだいてくれるよね。

ぼく、おかあさんのことがすきだよ。だからぼくも、おかあさんにあいたいよ。

おかあさん……

おかあさん……

「お母……さん……」

僕は、涙を流していた。

人の温もり、母の温もり。

キングに侵された僕の体を温め、守ってくれる母胎の中のような温もり。

守られ愛される歓びに、僕の目から涙がこぼれる。

「わたしの温もり、感じる？」

体で感じる、女神の抱擁。

体で感じる、母の抱擁。

「わたしの鼓動、感じる？ わたしの匂い、感じる？」

胸を通じ、頬を通じ、腕を通じ、感じる母の鼓動。

鼻を通じて感じる、母の匂い。

手を通じて感じる、他人の温もり。

「もう一人のぼく。言ったでしょ？ ぼくたちが君の手を温めてあげるって」

僕の手を握る、もう一人の僕と仲間たち。

「もう一人のセリス様、わたしの温もりを受け取ってください！」

「もう一人の兄上、キングなんかに負けないで！」

「セリスの言うとおりだ、おれたちがついてるぜ！」

「ボクのお宝を受け取りたまえ、もう一人のセリス」

「ロプトなど関係ありません。あなたを救うために差し伸べましょ
う、私の手を」

「おれはお前の親友だ！ おれたちの温もりで負けるな！！」

「みんな……」

僕の全身を支配していた冷たさが消え、ステンドグラス状の表皮
が消えて行く。

そうだ。僕は、ここにいるんだ。

みんなが僕を守ってくれたんだ。

そして母さんが、僕を守ってくれたんだ……。

「わたしの声が、聞こえる？」

「……聞こえます、母さん」

「いい子、いい子ね。わたしの愛しい『セリス』……」

母さんがくれた、僕の頬への口づけ。

改めて感じる、生きることの実感。

僕は生かされているんだ。

辛いことがあるからこそ喜びがある。

そして、みんなが助けあい、笑い合えるから僕は存在するんだ。

そう、これが『生きる』ことなんだ……。

僕は涙を流し続けた。

僕の手を温めてくれた仲間への感謝、僕の体を温めてくれた母さ
んへの感謝、そして生きる喜びと共に……。

U
U
<U>

第11話 P a r a d i s

ファンガイアのキングの死をもって、わたしたちの”裏世界”における戦乱は幕を閉じたのでした。

ただし、被害は甚大でした。

まず大陸の人口が九割減少し、しかも聖戦士は直系のみならず傍系までもが全滅。

唯一の聖戦士の生き残りであるこの世界のセリス様も、完全なファンガイアとなってしまう聖戦士の血統を喪失されました。

つまりもう、この世界に聖戦士は二度と産まれてこないのです。

ロプトに始まり、ファンガイアに終わったこの世界の文明。

生存した人々は十字架を背負い、破壊された世界の中で生きていかなければならないのです。

これほどまで、人間は愚かな存在なのでしょう^{ヒト}か。

人間は、過ちを犯さずにはいられない存在なのでしょうか。

わたしたちの世界でも、このような悲劇が起こる可能性は否定できません。

でも、わたしは信じています、人間の強さ。

たとえ争いが起きても、人間には最後は手を取り合える強さがあることを。

たとえ自分を見失っても、人間には大切なものを愛する強さがあることを。

たとえ苦痛に満ちていても、人間には幸せになれることを信じて生きる強さがあることを。

「新たなキングよ、我らファンガイアはあなたに忠誠を誓います」

周囲のファンガイアたちがこの世界のセリス様の前に集まり、恭しく膝をつきます。

もうこの世界のセリス様は、ファンガイアのキングとして彼らを統率しなければいけない身なのです。

「母さん、もう一人の僕、みんな、これでお別れですね」

「セリス……」

しみりとした表情で別れの言葉を告げる、この世界のセリス様。

「これも、僕が背負うべき十字架です。表面上の忠誠心をもったファンガイアたちの中で、孤独に生きていかなければならないのです。また破壊者に戻ってしまうかもしれないけれど、なんとか頑張ります」

そう、この世界のセリス様は、これから永遠の孤独に身をゆだねることになるのです。

やっと見つかった楽園。歓びの束の間、再び地獄へと突き放されようとしていました。

「さようなら……」

この世界のセリス様は踵を返し、一人寂しくファンガイアたちの方へと歩いて行きます。

しかし、それを止める人がいました。それはこの世界のセリス様に愛と生を教えた、わたしたちの世界のディアドラ様でした。

「お待ちなさい、セリス」

「母さん……」

「今のあなたには甘えと勉強が必要です。だから、しばらくはわたしたちの世界で暮らしなさい」

「でも、僕はキングとして……」

「一国を統治するには教養がいるのです、それらはオイフェが全て教えてくれます。それに、あなたはまだわたしに甘え足りないでしょう?」

この世界のセリス様は、失ったものをほんの少ししか取り戻していない。

そのことを知っているディアドラ様が、この世界のセリス様に指摘されたのです。

「ファンガイアたちよ、まだ僕が玉座につくのは早い。どれくらい待ってくれるだろうか」

「一年間だけ待ちましょう。いいですか、一年間ですぞ」

ファンガイアたちに尋ねるこの世界のセリス様に告げられた猶予は一年間。

その間、この世界のセリス様はわたしたちの世界にお世話になります。

「みんな、一年間ですがどうかよろしくお願いします」

清々しい顔を見せるこの世界のセリス様。

セリス様も、ディアドラ様も、ユリア様も、わたしも彼と一緒にいられることに喜びました。

生きる意欲を取り戻した今のもう一人のセリス様には、すでに「

無』の力はありません。

何故なら、『無』の力は生の完全否定そのものなのですから。ただひとつだけ、残ったものがありました。

それは次元干渉能力の一部である異次元跳躍能力です。

「あなたたちはシアルフィからこの世界に来たのですね。ではこの同じ場所で異世界の扉を開けましょう」

もう一人のセリス様は念じると、前方にオーロラを発生させました。

そのオーロラはわたしたちを通り抜けて、元の世界へと帰ることができました。

わたしたちの世界に帰ってきたのはこのわたし、フロリーナとセリス様、ディアドラ様、ユリア様、チェイニーさん、そしてもう一人のセリス様とキバット。

何故大樹さんがいないのですかって？ 大樹さんはこの世界でやり残したことがあるのです。

それは、彼の求めていたお宝『ロプトウスの書』を手に入れること。

その後も別の世界へ新たなお宝を求めて旅立つので、寂しいけどここでお別れです。

「ここがぼくたちの世界だよ。ようこそ、もう一人のぼく」

ここは、わたしたちの世界のシアルフィ。

今日も活気に満ちた城下町の人々、訓練に励む兵士たち。

やっと帰ってきたという実感と共に、わたしたちは城に入ります。

「これはディアドラ様、セリス様、お帰りなさいませ」

わたしたちを出迎えたのは、赤ん坊のユリア様を抱きかかえるわたしの姉、フィオーラ。

今回は未来のユリア様の依頼で赤ん坊の子守を頼まれたのですが、わたしが世話になっているということで快く承諾してくれたのです。

「お帰り、フロリーナ」

「ただいま、お姉ちゃん」

フィオーラお姉ちゃんはとても嬉しそうでした。何故なら可愛い赤ん坊の世話ができること、それに久々にわたしと出会うことができたからです。

わたしは母親の顔を覚えていません。母親はわたしを産んだ後、すぐに山賊に連れ去られ行方不明となっていました。その中でお姉ちゃんを持ち前の母性で母親代わりとなり、わたしに愛を注いでくれました。だからわたしは、母親がいなくても寂しさを感じずにいられました。ある意味、わたしは同じく母親を奪われたもう一人のセリス様と同じ境遇だったのです。

でもシアルフィに来て、わたしにもようやく母親ができました。ディアドラ様です。

母親を知らないわたしに母の愛情を教えてくれた、慈愛に満ちたお方。

ディアドラ様がわたしの母親となっていたことで、シアルフィに来て良かった、そして生きて良かったと思えるのです。

生きて良かったという気持ち、それが人間の幸せ。

幸せを感じられるからこそ、人は頑張って生きようと思えるのですね。

フィオーラお姉ちゃんは胸に抱いたユリア様を、そのままディアドラ様の腕へと渡します。

「ユリア、寂しくさせてしまつてごめんなさいね」

自らお腹を痛めて産んだ命を慈しむ、ディアドラ様の笑顔。

でも赤ん坊のユリア様は、フィオーラお姉ちゃんに未練があるかのように手を伸ばします。

「フィオーラさん、ユリアはあなたのことを気に入つたみたい」

「そんな、恐縮です」

「いいですよ。たとえ他人でも、深い母性で愛を注げば子供は誰でも懐きますわ」

そう、子供は他人の愛情を欲しているのです。

それは肉親だけではない、どんな人でも無償の愛があれば子供にとつての神様になれるのです。

無償の愛があるからこそ、子供は自分の存在価値を感じ、生きることに自信を持つことができる。

すなわち、これが樂園。

人間は産まれた時は誰でも天使、そして天使は樂園ある限り白い翼で気高く飛べるのです。

もう一人のセリス様は人間の愛を断たれ、堕天使となつてしまつた。

彼に罪はありません。人間の闇に翻弄された結果、彼は堕天使になるしかなかったのです。

でも今は、ディアドラ様の母性愛とわたしたちの慈愛に満ちた新たな樂園がある。

だから彼は、もがれた翼を取り戻すことができた。

『翼失き堕天使』は、ようやく『白い翼の天使』に帰ることが出

来たのです。

「そうだね、もう一人のセリスのお部屋を用意しましょう」

赤ん坊のユリア様をベッドに寝かせた後、ディアドラ様がなにか思い立ったかのように廊下に出ました。

わたしたちが付いていくと、ディアドラ様は一つの部屋にたどり着きます。

そこは、亡くなられたシグルド様の個室だったのです。

「母上、ここは父上のお部屋では……」

「いいのよ。だって、今この城で空いている部屋はここしかないのだもの。それに、使ってもらう方がシグルド様も喜んでくださると思うわ」

シグルド様の個室は、少々埃を被っていました。

そこでわたしたちはもう一人のセリス様のために掃除をすることになりました。

ディアドラ様とわたしが箒ではき、未来のユリア様が調度品を拭き、チェイニーさんに肩車されたセリス様が高いところの埃をはたくといった感じに部屋をきれいにしていきます。

「チェイニー、ちょっと左」

「こうか？」

「ああつ、ずれた！ 今度は右……」

新たな家族のためにみんなで部屋掃除する、和やかな風景。これも、もう一人のセリス様のためなんですよね。

「きゃっ！」

「ちょ、フロリーナ！ ぶつかるんじゃない……うわわわ！」

「チェイニー、バランスを！」

「わーっ……！」

派手に後ろに倒れる、セリス様とチェイニーさん。新たに舞う、床の埃。

「いてて……」

「ご、ごめんなさい……」

その光景を微笑ましく見守る、ディアドラ様と未来のユリア様。こうして綺麗になった部屋に、新しい家族が入ってきます。

「ここがあなたのお部屋よ。我が家だと思って好きに使ってね」
「ありがとうございます、母さん」

互いに微笑みあう、母ともう一人の息子。
穏やかな日常に育まれる、母と息子の絆。
そう……もう一人のセリス様はもう、わたしたちの立派な家族なのです。

あなたはもう、翼を失う恐怖に怯えなくていいんですよ。

それから、わたしたちは平穏な日常を過ごしました。

朝起き、訓練に励み、オイフェ様の講義を学び、ディアドラ様の料理を食べて眠る。

そんな日々が、長々と続きます。

しかし、変わらない日常にも起伏があるというもの。

ある日、シアルフィを訪れたパント卿の提案で、もう一人のセリス様はグランベルの都バーハラを訪れることになりました。

「アルヴィス王」

「パント卿、今日は何の用だ」

「今日は是非とも陛下に会わせたい人物がおりまして、連れてきました」

「よかるう、連れて参れ」

そう、もう一人のセリス様とわたしたちの世界のアルヴィス王を会わせようと、パント様はお考えになられたのです。

「お初にお目にかかります、陛下。異世界から参りましたセリスと申します」

「よくぞ来られた。頭を下げずともよい、気楽に話しあおうではないか」

異世界のアルヴィス王は、シグルド様を叛逆者として処刑したと伝えられております。

そのことをもう一人のセリス様から伝えられ、今度はアルヴィス王が頭を下げられたのです。

「そうか、君は異世界の私によって不幸な目にあつたというのだな。すまなかった、異世界の私に代わってこの私が詫びよう」

「そんな、おやめください。あなたが頭を下げることはありません。それに、両親を失って得られたこともあるのです」

「それは？」

「どんなに辛くても、生き続ければ幸せがあるということです。陛下のおかげで、私は誰よりも生きることに向きあえたのです」

両親を失うことも、決して無駄なことではない。

つまり懸命に生きた人生は、無意味なものにはならないのです。

今まで辛い目にあってきたからこそ、もう一人のセリス様は誰より生命を大切に思える優しい人になれたのですから。

「ならばこれだけは言わせておくれ。我が先祖ファラの名において誓う、この世界の私は君の味方であると」

「ありがとうございます、アルヴィス王」

「何か力になってほしいことがあったら、遠慮せずねだってほしい。我々も出来る限りの協力はしたいと思っている」

もう一人のセリス様とアルヴィス王の会談は終わり、今度は王宮の廊下をパント卿とふたりきりで歩いて行きます。

「我がアルヴィス王について、感想は？」

「いい人でした、名君と言われるほどの器を感じましたよ」

「良かった」

パント卿は今が忙しい時です。グランベルの近代化政策を巡って、保守派のエッダ公とドズル公と対立しているのですから。

噂では『黒い牙』なる暗殺組織をドズルが雇って、パント卿を暗殺しようだなんて話もあるのだとか。

「私は、この国に種まきしたいと思っている」

「種まき？」

「もう血に縛られてはならんだ。君の世界のグランベルも世継ぎが不在でしかも国の平和をナーガの力に依存しなければならなかった。それがロプトの復活を許してしまう一因にもなった。私たちの世界でも同じく聖戦士頼みであった故に技術革新が停滞し外敵の蹂躪を許してしまった。これ以上血に縛られては国が腐る」

「なるほど。そのために、この国の近代化を行おうというわけですね」

「ああ。異世界を学び、この国の科学が進歩する。そして民衆も力をつけ、いずれは民の動かす国へと生まれ変わるのだ」

「この国の権力を握る名門貴族でありながら、変わったお考えをお持ちですね。あなたがたフリージ家も没落するかもしれませんが」
「構わんよ。私はどうであれ、後継者が権力と財産に溺れる馬鹿どもではなんにもならん。だから私は種をまく。すぐには無理にでも何百年か後に民が主役となる時代になるだろう」

パント様は、常に先の未来を見据えて政治に励んでおられました。でも、没落した聖戦士たちはどこへ行けば良いのでしょうか。

ユリウス王子には居場所があると言いましたが、ここに来て答えを出せなくなりました。

わたしには聖戦士たちの未来はわかりません、その行方は神のみぞ知るといったところ……です。

政治でてんてこまいのパント様にも、帰るべき場所はありません。そこでもう一人のセリス様は、パント様の居城へと招かれました。

「パント様、お帰りなさいませ」

「エルクか。ルリーズに紅茶を用意するよう伝えてくれ」

もう一人のセリス様とパント様は居間のテーブルに座り、ルイズ公妃の注いだ紅茶を飲みながら談話します。

「あの方が、あなたの妻のルリーズ様ですね」

「ああ、私の自慢の美人妻だ。それにルリーズは君の母とも友人だ。会ってはいつも料理の話ばかりだ」

「あらあら、パント様。私を美人と呼んでくださるなんて」

「ははは、本当のことを言っ たまでだよ」

パント様とルーズ様は、大陸でも五本の指に入るくらい仲睦まじい夫婦です。

そのルーズ様のお腹には、新たな生命が宿っておられました。

「ルーズ様、妊娠しておられるのですか？」

「ええ。あともう少しで私たちの子供が生まれそうなのです」

「楽しみです。名前は何にするつもりですか？」

「男の子だったらクレイン」

「女の子ならクラリーネだね、ルーズ」

「ええ、パント様」

ルーズ様も、もう少しで母親とられます。

男の子が産まれたらクレイン、女の子ならクラリーネ。とても素敵な名前です。

でも子供を産むことは、とても苦痛を伴うもの。でもお腹を痛めるからこそ産んだ子を可愛いと思える。

ディアドラ様だって二度のお腹の痛みに耐えてセリス様とユリア様を産み、愛でられておられるのですから。

それにルーズ様も小姓のエルク様を家族として受け入れるほど母性あふれるお方、きっと良い母親になれるのでしょうね。

もう一人のセリス様がシアルフィに帰られてから数日後、セリス様とわたしは、ディアドラ様のいる部屋の中を見て驚きます。

「は、母上……裸……！？」

「セ、セリス様！ 見ちゃダメですっ！！」

部屋の中にいるのはシアルフィお抱えであるルネス派の画家・フォルデと全裸になりソファーに寝そべるディアドラ様。

ディアドラ様の白い四肢、大きな胸と隆起する乳首、そして色気たっぷりの表情。

名だたる彫刻、名だたる絵画のような艶やかさと神々しさ。

でも思春期真っ只中のわたしには、刺激が強すぎるものでした。

そのため慌ててセリス様ごと物陰に隠れてしまいました。

でもディアドラ様はわたしたちにすぐ気づいたようで、小悪魔っぽい笑みを浮かべていたのです。

「もう、フロリーナったらウブなんだから」

「思春期の少女少女は艶やかな女性の裸を見ると興奮するものなのですよ、ディアドラ様。あなたも全裸を見られるのは恥ずかしいのでは？」

「あら、この程良い恥ずかしさがいいんじゃない。だってこんなにエロティックな気分になれるのだから。こうなったら是非とも絵にしてみらわないと、わたしだって脱いだ甲斐がないわ」

「それでもあなたをモデルにした女神の絵を描くのですからね。それでもあなたの全裸を絵にすることは、私にとって何よりの喜びですよ」

恥じらいに身を委ね、恍惚とした表情で描かれることを楽しむディアドラ様。

神経を目と手に集中し、絵筆に魂を込めて描くフォルデ。

数刻の後に出来上がったものは、母胎に宿った命を感じるために愛おしくお腹をさする裸の女神様の絵画。母性あふれる慈愛を表現したこの絵はフォルデによって『慈愛なる女神』と名付けられたのです。

生前のシグルド様は芸術家のパトロンとしても活動しており、こ

の頃は芸術が大きな隆盛を見せました。後になってこの芸術が栄えた時代は”シアルフィ・ルネサンス”と呼ばれ、ディアドラ様をモデルとされた絵画はその代表作として語り継がれることとなります。

季節は夏となり、わたしたち家族は海へ行くことになりました。一面見渡すは、広大なばかりの浜辺。

その浜辺を彩るは、水着姿になったわたしたち。

わたしは白いフリルのついたワンピース、ユリア様は下半身がミニスカート状のビキニ。

そしてディアドラ様は大胆な小さめの黒いビキニ。

もちろん二人のセリス様やチェイニーさんも一緒です。

「よっしゃ！ 海だ！！ 泳ごうぜ！！」

チェイニーさんは子供のようにはしゃぎ、波押し迫る海へ飛び込んでいきます。

「フロリン、行きましょう！」

「はいっ！」

わたしとユリア様もチェイニーさんにつられるように走りだし、水を掛け合います。

そして二人のセリス様は、なんだかもじもじしている様子。

「ふたりともどうしたの？ せっかく海に来たことだし遊んでいらつしゃい」

いたずらっぽい笑みを浮かべるディアドラ様。

「い、行こうよ。もう一人のぼく」

「う、うん。わかってるよ」

二人のセリス様は女の子の水着姿を見て顔を真っ赤にしているの
でしょうね。

うふふ、どのセリス様も可愛いところがあるんだから。

でも遠慮しないで海水浴を楽しみましょうよ。早くしないと日が
暮れちゃいますよ。

わたしたちは海水浴の他、ビーチバレーやスイカ割りを楽しみま
した。

ビーチバレーはディアドラ様がノリノリで玉を打ち返してわたし
たちを啞然とさせたり、スイカ割りでは目隠しされたもう一人のセ
リス様が思いつきりチェイニーさんの頭を叩いたり、とても楽しい
時間を過ごして行きました。

海水浴から帰ってくると、懐かしい海東大樹さんに再会すること
ができました。

「セリスとユリアに、来て欲しい世界があるんだ」

「それは？」

「マルス王子が平和を守る、『暗黒竜と光の剣の世界』さ」

暗黒竜と光の剣の世界は、マムクートなる竜が大量発生し大変な
ことになっていると大樹さんは言いました。

もちろんセリス様とユリア様は承諾し旅支度を始めるのですが、

ディアドラ様がメダルを手近寄ってきます。

「ユリア、このメダルを持って行きなさい」

「母上、これは？」

「これは、ナーガのコアメダル。チェイニーから話を聞いてわたしが作ったメダルよ。もしオーズというライダーに出会ったら、このメダルを渡してあげて」

「はい、母上。必ずこのメダルをオーズに渡します」

ディアドラ様の聖なる力が凝縮された、ナーガのコアメダル。これが暗黒竜と光の剣の世界にて残りの二つの『竜のメダル』と共に重要な役割を果たすのですが、これとは別の物語となります。

話は飛んで、暗黒竜と光の剣の世界を救い帰還したセリス様とユリア様。

特にユリア様は、何かおみやげを持ち帰ったかのような、嬉々とした表情をしていました。

「わたし、ミストって子と仲良くなったのよ」

「ミスト？」

「蒼炎の軌跡の世界の、傭兵アイクの妹よ」

誰でも、新しい友達ができると嬉しくなるものです。

子供の頃、「友達百人できるかな」と度々口にしたもの。

ユリア様も、ミストという友達ができてとても嬉しいのですね。

しかし、未来から来たユリア様とお別れの時がやって来たのです。

「母上、兄上、今までお世話になりました」

「未来のぼくによろしくね、ユリア」

「気をつけて帰るのよ」

「もう一人の兄上、わたしはこれで」

「うん、気をつけてね」

「それからフロリンも、兄上をよろしくお願いね」

「ど、どういことですか？」

「わたしが言った通りよ。それでは皆さん、未来で！」

ユリア様は意味深な言葉をわたしに告げて、レクスワープで未来へと帰って行きました。

セリス様をよろしくお願い……と。

その意味は、数年先の未来で知ることとなったのです。

秋の紅葉が踊りはじめる頃、小さな恋の物語が始まりました。もう一人のセリス様が、街の女の子に一目惚れしたのです。教会で働く、シスターの女の子が気になるのだとか。

恋心を抑えられなくなったもう一人のセリス様は、夜中突然目覚めます。

そう、夢精をなされたのです。

「この白い液体、僕は夢精しちゃったのかあ。それにしても可愛いな、あの女の子。あまりに可愛いすぎて、頭がのぼせそうだよ……」

もう一人のセリス様の夢精は、これが初めてなんだそうです。好きな女の子のことで夢精してしまうほど恋の悩みを抱えるもう一人のセリス様は、翌朝チエイニーさんに相談します。

「そんなの、果敢にアタックすりゃいいんだよ。当たって砕けるだ

「！」

「当たって砕ける？」

「そうだよ。お前の好きな子だろ？　なら声の一つくらいかけないでどうする」

チエイニーさんにそう言われ、もう一人のセリス様は考えた末に女の子に話しかけます。

「や、やあ。君、ここのシスター？」

「はい」

「僕、セリス。この国の公子様と同じ名前のセリスだよ。君の名前は？」

「マナです」

「マナって言うの……いい名前だね」

初めての出会いはまあまあ和んだ結果に終わりました。それ以来、もう一人のセリス様はマナという名の女の子と話し合うのが日課になりました。

「ねえ、今日はプレゼントがあるんだ」

「どんなプレゼントなのですか？」

「ベタだけど花束だよ」

「まあ……綺麗なお花。嬉しい、セリスさん」

一ヶ月が経ち、二人共いい雰囲気となりました。

二人の交際はおしゃべりだけのものからデートへと発展し、二人の関係はますます深まっていったのです。

「ねえチエイニー、いいデート場所ないかな」

「それならとっておきの場所があるぜ」

「そこは？」

「アカネイア王国。おれの故郷の世界にある、友人が治めている国さ」

チエイニーさんの提案で、もう一人のセリス様とマナさんは『暗黒竜と光の剣の世界』へ行くことになりました。

アカネイア王国は英雄王マルスが統治する大陸国家。かつてアカネイア大陸はいくつもの国に分かれていたのですが、マムクート大量出現の事件を受けて各国が崩壊。それをまとめるため、唯一残存していた旧アリティア王国の王子・マルス様が大陸を統一し、大陸国家アカネイアが新たに建国されたのです。

「私がアカネイア国王マルスです。異世界の旅人よ、よく参られました」

マルス様は国王になっても、落ち着いた物腰で二人を迎えます。

「私はセリスと申します」

「セリスさんの恋人のマナです」

「ふふ、とてもお似合いですね」

アカネイアの宮殿に、和やかな空気が流れます。その宮殿は復旧作業で大工さんが多く、ちよつとした賑やかさを醸しておりました。そこに新たに加わる、青い髪王妃様。

「あなた、そのお二人さんは誰なのですか？」

「シーダ、この方は異世界から来られた旅人。セリスとマナだよ」

シーダ王妃は旧タリス王国の王女。暗黒戦争の時代から故郷に亡命したマルス王と出会い、相思相愛となられて戦場を駆け抜けられ

て、ようやく結婚なされたのです。

「シーダ王妃ですか、麗しいお方ですね」

「あら。あなたも綺麗で愛らしいですよ、マナ。それにしてもこんなに可愛い子が彼女だなんて羨ましいですね」

「恐縮です、シーダ王妃」

シーダ王妃も、もう一人のセリス様とマナさんをお似合いだと褒めてくださいました。

そうですね。わたしもそう思います。

だって、お二人はあなたがたにも負けなくらい熱いカップルですもの。

この後ももう一人のセリス様とマナさんはアカネイアの街並みを散策し、ふたりきりのひとときを過ごしたのでした。

冬になり、セリス様は九歳の誕生日を迎え、より一層背が大きくなられました。

ディアドラ様は二六歳になられ、その麗しい美貌はさらに磨きがかかったように見えます。

ユリア様は生まれて初めての誕生日。乳離れしよちよち歩きを学び始める頃になりました。

わたしもあともうちょっとで一四歳になります。一四歳は思春期の中でも最も多感な年頃。わたしはこの一年間を大事にしていこうと、心に決めます。

「ねえ、母さん」

「なあに、セリス」

暖炉の火がゆらめく中、もう一人のセリス様はディアドラ様に一つの小包を手渡します。

「これ、プレゼントです」

「あらあら、一体何かしら」

息子が手渡した小包をニコニコしながら開けるディアドラ様。その中身は、赤いカーネーションのコサージュが入っていました。

「素敵、あなたが買ってくれたの？」

「はい、小遣いをためて買いました」

「ありがとう、嬉しいわ」

ディアドラ様は、喜びながらコサージュを前髪につけます。

銀髪に咲く赤いカーネーションの花。母の笑顔に息子も思わず笑みがこぼれます。

「あとそれから肩たたきもします。毎日育児や家事で大変でしょうから」

「セリスったら、サービス精神が旺盛ね」

ディアドラ様の背中に回り、露出した肩を叩いて揉み上げるセリス様。

これも全て、もう一人のセリス様の感謝を込めての親孝行。いつも愛を注いでくれるお母さんなら、親孝行の一つでもしてあげたいものですね。

「とても気持ちよかったわあ。本当にありがとう」
「どういたしまして、母さん」

母と息子の水入らずのひとときを、キバットが微笑ましく見守ります。

「あら、キバットちゃん」

「親孝行か、いい心がけだなあ。セリス」

「これも母さんへの感謝の気持ちさ。それにしても親孝行できて良かったよ」

親孝行したい時には、親はいない。

誰しも親には世話になっっているでしょう、感謝の気持ちはありますよね。

ですから、親が生きているうちにどんなに些細なものでも良いですから喜ばせたいもの。

わたしだって、育ててくれたフィオーラお姉ちゃんや母性で包んでくれたディアドラ様に感謝の気持ちを送りたい。いつかは必ずしようと思います。

もう一人のセリス様がこの世界にいられるのもあと一週間を切りました。

交際を続けていたマナさんとは、相思相愛の仲。

でももう一人のセリス様はファンガイア、愛しているけど、いつでも物事を隠すわけにはいかない。

だから自分がファンガイアであることを、マナさんに告白することを決意されたのです。

「マナ、今日は話しておきたいことがあるんだ」

「何なの？ セリス」

「実は、僕はこの世界の人間じゃない。それに人間でもないんだ」
「どういうことなの？ わからないわ」

突然の言葉にマナさんは戸惑いを隠せません。それを見つつも、セリス様はファンガイアの姿になります。

その姿に啞然とするマナさん。もう一人のセリス様は申し訳なさそうに告げます。

「騙すつもりはなかった。でも、永久に隠し通すことなど僕にはできない。ごめんね、マナ」

セリス様もきついものがあつたのでしょう。マナさんに告げる声は、とても辛そうなものでした。

それでもマナさんは、セリス様の体に寄り添ったのでした。

「あなたがどんな姿でも、あなたはあなた自身だわ。わたし、そんなあなたを愛してる。毎日あなたのことしか考えられないの！」

「マナ……」

例え正体がどうであれ、変わらない愛を貫くマナさん。その姿に安心したセリス様は、元の人間の姿に戻ります。

「ありがとう、マナ。僕も君のことを愛しているよ」

「セリス、わたしもよ。だから、わたし……あなたと……」

「分かってるよ、結婚しよう。結婚して幸せになろう」

「ありがとう。わたし、あなたと結婚する。結婚してあなたの子供を産みたいの」

セリス様とマナさんが交わす、初めてのキス。それは雪の降るシアルフィに咲いた恋の花でした。

もう一人のセリス様とマナさんの挙式は、元の世界へと帰る前日に行われました。

ヴァージン・ロードを歩く花婿と花嫁。その姿に、セリス様も、ディアドラ様も、わたしも感激しつつ見守ります。

「汝、セリスを新郎とすることを誓いますか」

「誓います」

「汝、マナを新婦とすることを誓いますか」

「誓います」

「それでは、誓いのキスを」

結婚式場で再びキスが交わされ、晴れて二人は夫婦となりました。

「セリスの晴れ舞台の立派な姿、わたしとても感激だわあ……」

「もう一人のぼくも、結婚できて良かった」

式場は盛大な拍手に包まれ、結婚式は幕を閉じました。

そしてその初夜、わたしはある部屋でマナさんの苦しそうなうめき声を聞きます。

（マナさん……幸せになったのにどうしたのかしら……）

わたしは何かがあると思いドアに手をかけますが、誰かに止められました。

「せっかく新婚さんがいいひとときを過ごしてるんだ、そっとしてやれよ」

その正体は、チエイニーさん。

「チエイニーさん、いいひとときって……」

「ちよっとした性教育をしてやろう。人間は異性への意識が強くな

ると、体が火照ってくるもんなんだ」

チェイニーさんの言葉に、わたしは無意識にイメージしてしまいます。それは成長したセリス様の遅しい体つき、甘い囁き声……。

——愛しているよ、フロリーナ。

わたしの体を包み込む、セリス様の温もり……。

「……なんだか、体が熱くなつて……」

「さつさと寝室に行つて寝な」

わたしは全身に駆け巡る衝動を抑えるため、寝室に向かってベッドに潜り込みます。でも、抑えきれずむしろ増していくばかりです。

「ど……どうしよう……わたし……わたし……」

衝動は一向に止まらず、想いにふけるわたし。

「ああ……ああ……セリス……さま……セリスさ……まあ……」

もう駄目なの。もう止められないの。

セリス様、どうか想いに溺れるわたしをお赦してください。
だって、だって……あなたのことが……好きだから……。

ついに、もう一人のセリス様の旅立ちの時が来ました。

長かったようで短かった一年間。

その沢山の思い出を胸に、もう一人のセリス様は旅立っていくの

です。

「皆様、今までお世話になりました。これでお別れですね」

礼儀正しく感謝の意を示す、もう一人のセリス様。

隣には、微笑ましく新郎を見守る妻のマナさんとキバット。

その二人に白いローブと紫色のケープに身を包んだディアドラ様が微笑みながら応えます。

「いいえ、これはお別れではないわ。あなたはもう、わたしたちの大切な家族なのだから」

「え？」

「たとえ世界の全てを敵に回したとしても、あなたはわたしの愛する息子よ。辛くなったら、恋しくなったら、何時でもここにいらっしやい。その時は美味しいご飯をつくってあげるから」

「ありがとうございます、母上」

そう、もう一人のセリス様には帰る場所があるのです。

それは、息子を案じる母親の想い。そして、わたしたち仲間の暖かな温もり。

帰る場所があり、帰りを待つ人がいるからこそ、人間は生きたいと思える。

それが、人の生きる意思なのです。

「では、いつてきます」

もう一人のセリス様の最後の言葉は、いたってシンプルなものでした。

これは一生の別れではありません。望めばいつでも帰ってこれます。

だから”いつてきます”の一言が、活き活きとした声で響くのです。

「いつてらっしゃい、もう一人のセリスよお！」

「いつてらっしゃいませ、もう一人のセリス様」

「いつてらっしゃい、もう一人のぼく」

セリス様もチェイニーさんもわたしも、家族の一人を見送る言葉を送ります。

「いつてらっしゃい、わたしの愛しいセリス」

そしてディアドラ様によって締めくくられ、もう一人のセリス様とマナさんとキバツトは旅立って行つたのでした。

これは別れではない、家族の一人の旅立ち。

これから戻る世界ではファンガイアの中で生きていかなければならない。

でも、もう大丈夫。彼には帰るべき楽園があり、そして美しい天使の翼で気高く飛べるのだから。

「天使つてのはな、楽園を追い出されると堕天使になっちまうんだ」
「チェイニーさん？」

「いくら戻ろうとしても、楽園に戻れない。行き場を失つた天使は堕天使となるしかない」

「でもチェイニー。もし慈悲あふれる女神さまが新たな楽園を作つて、その堕天使を救ってくれたら？」

「その時は再び天使に戻る、ですよね！ チェイニーさん」

「そうよ、フロリーナ。人間ヒトは一人では生きていけない、誰だつて帰る場所が必要な。帰る場所があるから人間は強く生きられるの。だから、あの子の帰る場所はわたしたちで守りましょう。あの子が

気高い天使でいられるように……」

「はい！」

もう一人のセリス様は、もう『翼失き墮天使』なんかじゃない。
あなたが天使でいられるよう、あなたの樂園はわたしたちが守ります。

だから安心して、自分に自信を持って生きてくださいね。

エピソード1へ

エピソード1 K?ken

もう一人のセリス様がこの世界を発ってから、一ヶ月くらい経ちました。

桜の花びらが舞う、暖かな季節。

わたしは、城の居間にてセリス様がテーブルに座り込んでいる姿を見つめます。

「セリス様、どうなされたのですか？」

「あつ、フロリーナ。今雛鳥を温めているところなんだ」

テーブルに置かれた湯たんぽの下から、小さな雛鳥がひょこんと顔を出しています。

ひよよと可愛らしい、雛鳥の鳴き声。

セリス様はそんな雛鳥を見て、思わず笑みをこぼします。

「この雛鳥ね、桜の樹にある巣から落っこちてたんだ」

窓から見える、白に染まる桜並木。

セリス様はそこで、巣から落ちた雛鳥を拾ってきたようです。

「雛鳥つて、温めてあげないと死んじゃうんだつて。チエイニーが言ってた」

「どうしてですか？」

「雛鳥は産まれた時は体温が調節できないから、毎日親鳥に温められているんだつて。そう、雛鳥にとって親鳥に温められて餌を与えられる巣こそ世界の全てなんだ。だけどこの子は巣から落ちてしまった。親鳥にも温められてもらえないし餌も食べられない。それつて世界から拒絶され存在を否定されることじゃない。でもこの子だ

つて卵から孵って親鳥のように青空を飛びたい……それなのに凍えてお腹を空かせながら巣を見上げてるなんて可哀想じゃない。だからぼくは巣に返してあげるまで、この子に温もりを与えてあげてるんだ」

「そうですね。生き物は死ぬために産まれたわけじゃありませんものね。産まれたからには、生を全うする権利がどの生き物にもあるのですから」

「うん。これからぼくは食べ物持つてくる。何を食べさせたらいいのかチエイニーに聞かなくちゃ」

セリス様は嬉しそうに席を外しました。

今、雛鳥はお腹を空かしていることの意味表示をしているためか口をパクパクしています。

報われない雛鳥のためにも親鳥の代わりに体を温め、餌を与える。それは雛鳥に存在することを肯定してあげることにつながります。

そしていつかは元の巣に帰してあげる——そこが、雛鳥の帰る場所なのでから。

わたしは、湯たんぽの温もりに包まれる雛鳥を見て、胸中の想いを独白します。

それは、小さな公子様に対する、わたしの淡い想い。

「セリス様、例えお母様がいなくなってもわたしがあなたの母親になつてあげます。そうすることで、あなたの楽園を守つてあげたいのです。だって、あなたはわたしの存在を肯定してくれた天使、わたしはそんなあなたのことを愛しているのですから……」

セリス様はまだ巣の中の雛鳥。まだ母親に甘え、愛されることが必要なのです。

だから、たとえあなたが巣から落ちてしまったとしても、わたし

がお母様から学んだ愛であなたを抱きしめ、体を温めてあげます。

そして、いつかはわたしを一人の女性として、包み込んでくださいますか？

その時が来るまで、わたしはいつでもあなたをお慕いし続けます。

エピソード2へ

エピソード2 E n g e l

——哀れな赤ん坊よ、お前は何故そんなに生きたいのだ？

親に捨てられた生きる価値のない赤ん坊のくせに……。

——い……生きる価値のない赤ん坊ですって、ひどいことをおっしゃるな。

あなたが誰だかは知らないが、

母親が記憶を消されて、父親を殺した男に奪われたただけなんだ。

——もう二度と母親の乳を吸えないお前が生きてなにになるというのだ？

なぜ命をそんなに惜しむのだ？

——そりゃあ、わたしはまだ産まれたばかりだからですよ。

——私はお前の先祖の下等な猿を知っているが、

お前のように未練がましくはなかったし、愚痴もいわずに死んでいった。

恥ずかしくないのかな。

——いやだ、いやだ、わたしはそんな下等動物じゃない！！

死ぬのが怖いんだ、独りぼちになるのがいやなんだ、助けてくれえ！！

——助けたいが、私には何も出来ない。あとせいぜい三日の命だろう。

——何故人間は、感情を持ってしまったのでしょうか。

元のままの下等動物でいれば、もっと楽に生きられ……死ねたらうに……

感情を持ってしまったおかげで……

——……死んだ。

今、僕はファンガイアの王宮で玉座に座っている。
手にあるのは、一冊の物語。

これは、僕の妻のマナが持ってきてくれたものだ。
何やら、遠い東の国で書かれた物語らしい。著者は元々医師だったとか。

そこには、命の儚さと尊さが生き生きと描かれている。

もちろん、生命の残酷さも。その残酷さが、犠牲を次々と生む。
それでも生命は、懸命に謳歌している。

そこにあるのは、生きる強さ。生命の素晴らしさ。
だから、続きが気になる。読みたくなる。

「あなた、またその物語を？」

「うん」

マナは、僕の権限を使って人間でありながらファンガイアのクインに列せられた。

そして僕は同様に、今後数百年は人間を襲わず領土を拡大しないようにした。

人類の方は元ロプト教徒のセイラムを中心に、生き残りの人間を集めて集落を営んでいる。

僕の帰る場所がある異世界からも、支援物資が送られてくる。
世界は緩やかだが、確実に復興していつている。

マナのお腹には、新たな生命が宿っている。

人間の血と、ファンガイアの血が交わった、新たな生命が。

マナは毎日お腹をさすり、命の鼓動を感じている。

わたしももうすぐ母親になるのね……と、嬉しがっている。

キバットも僕たちの周りを飛び回っている。

キバットと僕は、これから永遠の親友だ。

そういえば、会ってからずっと気になってたことがある。

「キバット、僕に会う前はどこにいたの？」

僕の”父さん”はキバットの存在を知らなかったそうだ。

だとすれば、キバットはどこから来たのかを僕自身を知る必要がある。

「最初は真っ暗だった。真っ暗だけど暖かい水に揺られる心地良い感覚があった。おれはその真っ暗な中から出てきた。最初に見たのは人間の女性だった。おれを産んだ女性、光り輝く全裸の姿、白金のような豊かな髪、そして儂げな表情……おれはその女性の胸に抱かれながらこう言われたんだ。セリスを寂しさから救ってあげて——って。気づいたときには、お前の近くにいたんだ」

キバットはその光り輝く女性から生まれ、僕に遣わしたのだという。

その女性の正体、それは『無』の世界に光り輝く希望。

誰も入ることのない『無』の世界に希望の光が入り込み、その女性を象ったと、キバットは言った。

「そうなんだ……でも、なんとなくわかった気がする」

「何がだよ」

「僕は、人間の心を捨ててもどこか捨てきれなかった。誰に愛し愛されたい気持ち。人間であることを素晴らしいと思いたい気持ち。きっとそれが君を呼び寄せてくれたんだと思う。それこそ、僕に残った希望。そしてその実態は母が僕を産んだ時に胸に抱いて与えて

くれた僅かな人のぬくもり。考えすぎかな」

「そうか、やっぱりお前も人間を完全に捨てられなかったんだな」

僕は人間をやめたつもりだった。それでも結局人間をやめることは出来なかった。

肉体こそファンガイアになってしまったけれど、ようやく分かったんだ。

人間の喜び、素晴らしさ。

人間らしく生きること。

そして、自分を好きになれたこと。

僕は感じている。人間として、幸せであることを。

皮肉なものだ。ファンガイアのキングなのに、人間の心があるなんて。

ファンガイアになって、初めて人間らしく生きることができたなんて。

「きっとあなたを産んだお母様は、ずっとあなたを守り温めてくれたのです。例え離れ離れになっても、あなたのことを忘れてしまったとしても、あなたの中に残ったお母様がずっと見守ってくれました。わたしはそう思うのです」

「そうかもしれないね、マナ」

僕は玉座から立ち上がり、外に出た。

空には、雲が浮かぶ青空。

小鳥たちが生を謳歌する青空。

僕は雲をつかもうとして手を伸ばす。でも、届かない。

「あの雲を掴めたら、どんなに嬉しいことだろう」

でも、僕の手では雲を掴むことができない。

それは事実なのだ。

手を伸ばしても掴めないものは、いくらでもあるのだ。

「やめよう。僕には、手に届く範囲に大切なものがあるのだから」

それは、愛する妻。信頼しあえる親友。帰りを待つ家族。

僕はもう、恐れない。

僕には翼があるんだ。気高く飛べる、白く美しい天使の翼が。その翼がある限り、僕は何も怖くない。

そんな素晴らしいことを、みんなが教えてくれた。

幸せって、こういう気持ちだったんだね。

人間っていいな、と思えるほど素晴らしい生き物だったんだね。だから言える。今なら言える。

「父上、母上、私を産んでくださって、ありがとう」

僕の楽園は、いつでも僕の帰りを待っている。

あの世界に物語がある限り、女神様は僕に微笑んでくださるのだから。

D a s E n d e .

エピソード2 Engine1（後書き）

FE&ライダークロス小説第四弾「To destrib」ついに完結しました。

但し、物語として完結しただけでまだ後書きとおまけSSがあります。

是非とも最後まで、お付き合いください。

あとがき

【あとがき】

この度は、『Todestrieb（翼失き墮天使）』をお読みくださってありがとうございました。

お読みになればわかると思いますが、テーマは「母と生命」。
拙作「DCD×聖戦」のテーマをさらに推し進めたものと思えば
よろしいです。

執筆中と同時期にエヴァンゲリオン旧劇場版や手塚治虫先生の火の鳥を見る機会がありまして、

エヴァ（特にEOE）と火の鳥の影響が強く出ています。

他にも「DED×蒼炎」の父殺し、「OOO×暗黒竜」のみんな
で力を合わせて強大な敵を倒すといったエッセンスも含まれており、
「真NOVEL大戦」の集大成にもなっています。

執筆のきっかけは聖戦原典の子世代主人公セリスの幼少期の境遇
（義理の親のオイフェやエーディンの元で健やかに育った）に納得
がいかない部分がありまして、それで悩む自分にけじめをつけるた
めにもこの作品を書いた次第でございます。

二次創作の本質は自己の補完にあると思うんです。要するに自己
満足ですね。

だからエヴァにそって「自分補完計画」の意味合いがこの作品に
あったというわけです。

ひとまずこの作品がどのようなものであったか、振り返ってみま
しょう。

1：当作品のコンセプト

この作品のコンセプトは、「ピカソのゲルニカ」です。
やたらと残酷描写が多い本作ですが、これは私が「ゲルニカのよ
うな作品にしよう」と思ったためです。

ファンガイアに虐待され親にも裏切られ、生きる意欲を持てずに
全てを憎み秩序の破壊と人間の虐殺を繰り返す異世界セリス。

まさにピカソが戦争の悲惨さをゲルニカに表したように、彼のや
るせなさが物語に表現できていると思います。

2：アダルトチルドレン

この作品ではアダルトチルドレンを題材にしています。
異世界セリスがまさにそれです。

周りに愛してくれる人がいないばかりに自分がここにいていいと
思えず、生きる価値のない人間だと破滅的な思考に陥る、アダルト
チルドレンの典型例です。

実際に原典のセリスでも可能性がないわけじゃなかったんですよ。
だって一番自分を愛してくれるのは産んでくれた肉親ですからね。
ひよっとしたらオイフェたちが「所詮は他人の子」の先入観をも
って愛を注がないかもしれない。

そうなれば世界を危機に陥れるのは実はセリスになるかもしれない
わけです。

『蒼炎の軌跡』『暁の女神』のセネリオの話になりますが、彼も
物心つく前に両親に捨てられ、育ての親からは愛なく育てられたこ
れまた典型的なアダルトチルドレンなのです。

グレイル傭兵団に入る以前はなんと言葉すらしゃべれませんでしたし
たからね。

結局は残飯漁っていたところをアイクに保護されて少しは人間らしくなるのですが、それでも達観的かつ打算的な性格で、アイクにだけ極端に依存する健やかとはいえない人間になってしまいました。

アダルトチルドレンに落ち度はありません。家庭環境に原因があります。

ファンガイアに虐げられ、心の拠り所だった母親をも失った。こうした居場所のなさ、異世界セリスを世界の破壊者へと変貌させたということです。

異世界セリスはアダルトチルドレンに陥ったもうひとつの可能性と言えます。

リイマジ版セリスは体が小さいだけで性格はほぼ原典と同様ですから。

3：当作品における術学趣味

まず1つ目は作品中に度々出てくる単語「デストルドー」、これはフロイト心理学の用語です。

エヴァンゲリオン見た方にはご存知かと思われます。20話のサルベージ計画とか。

ちなみにメインタイトルの「T o d e s t r i e b」とはデストルドーのドイツ語形です。

2つ目にキリスト教の三位一体説が取り入れられています。

ローマ・カトリックの教義には「父と子と聖霊」というものがある。これは「子が父を超え、聖霊を介して父と和解し、さらに意識を向上する」というものだそうです。

この要素はすでにディエンド×蒼炎で取り入れられているもので

すが、今作でも取り入れられています。

当てはめてみると、父「キング含む世界そのもの、子」異世界のセリス、聖霊「人の温もり・人の可能性となります」。

異世界のセリスがキングを倒し、父と認めたシーンはその現れです。

3 番目にグノーシス主義です。

グノーシス主義とは簡単にいえば「この世界は悪い神が作った悪の世界だ。しかも人間には本来の姿があるのに悪の神のせいでその姿を知らないままにいる。だから本来の姿に戻ってこの世界を脱出して善なる世界に行こう」というやつです。

特にキリスト教におけるグノーシス主義は「イエスこそが人間が本来の姿に気づかせて、善なる世界へ行ける」と説いています。

この作品をキリスト教グノーシス主義に当てはめると「人の心を失った異世界セリスがリイマジ版のディアドラたちに救われて人の心を取り戻し、リイマジ聖戦の世界に帰る場所が出来る」という感じです。

まあこれらは全部エヴァでやってることですけどね。

それほどエヴァに影響されまくったことで。EOE何度も繰り返し見たことか・・・。

4：火の鳥との関連性

この作品は手塚治虫先生の火の鳥の影響も強いです。

特に鳳凰編。異世界セリスのキャラクターは主人公の我王そのものですし劇中の描写も我王のそれを踏襲しています。

それからエピソード2の冒頭は火の鳥未来編の一シーンまるまる持って来ました（笑）

この作品も生きることがテーマであるため、火の鳥のオマージュ

は作品にとってもマッチしていると思います。

このような駄文になってしまいましたが、最後までお読みくださってありがとうございます。

それでは、また別の作品でお会いしましょう。

あとがき（後書き）

【おまけSS】

もう一人のぼくが旅立ってから一年、歳も二の桁になった。

体もだいぶ大きくなり、精通も経験した。

チェイニーは「お前も元気な男の子になったもんだ」と褒めてくれて、

母上もぼくが精通したことを嬉しそうな表情でオイフェに話す。

フロリーナのこととても気になるようになった。

フロリーナの胸も膨らんできたし、いつもスカート短いし少し動いただけで中が見えそう。

見る夢もほとんどフロリーナのことばかり。

その度に夢精して目が覚める。

これが、大人になるってことなのかな。

これが、恋愛というもののかな。

ぼくにはまだわからない。もっと年齢を重ねていけばわかるのかもしれない。

「セリス」

突然母上が声をかけ、ぼくはその方向に振り返る。

今日の母上の格好は、ゆったりとした白いローブと紫色のケープを羽織った清楚な姿。

「母上、何でしょう」

「ねえ、わたしとふたりきりにならない？」

「何故ふたりきりに？」

「たまにはあなたと水入らずで話し合いたいのです……いいでしょう?」

「は、はい」

母上とぼくは城から出て、城壁から近くの木の下へと行った。

そこには人の気配はなく、ふたりきりになるのにはうってつけの場所だった。

ぼくたちは幹にもたれかかり、座って話し始めた。

「一体何を話すのですか、母上」

「そうね、まずはあなたを産んだ時の話をしましょう」

母上の昔話、時は一一年前に遡る――

「ハア……ハア……」

「気持ちよかったかい?」

「ええ、わたしの体はまだ悦びの余韻に浸っておりますわ」

「私もだよ、ディアドラ」

「フフ、これでわたしのお腹に、あなたの子の命が宿るのですね」

「嬉しい?」

「もちろんですわ……シングル様……」

――ディアドラ様がご懐妊なされた、目出度いことだ。

――これで我が国も安泰だな。

——しかもディアドラ様はグランベル王家の血筋、つまりグランベルの王位継承権もあるってことだ。

「うふふ、あともう少いでわたしも母親になるのね。一体どんな子になるのかしら……楽しみだわぁ……」

「嬉しそうだね」

「あら、あなた。当然ですわ。だってわたしたちの子が、このお腹の中で元気に育っているのですもの」

「名前、何にする？」

「『セリス』ですわ」

「男の子にも、女の子にも、使えそうな名前だね」

「わたしは男の子を産みたいですわ。だって、男の子のほうが可愛いでしょう？」

（感じるわ、わたしのお腹からあなたの元気な鼓動が。……早くあなたに会いたいわ、わたしの愛しい『セリス』……）

「ああ、うぐっ……」

「頑張つて、あともうちよつとでお産の痛みもおさまる」

「は……はい……あなた……」

（痛い……死にそうなくらい痛い……。でも、頑張らなくちゃ。もう少いでわたしの子に会えるのだもの。だから、頑張らなきゃ……！）

オギヤア、オギヤア……

「男児です、元気な男の子です！」

「はあ……はあ……男の子、男の子なのですね……」

「よく頑張ったね、ディアドラ。せっかく産まれたばかりの私たちの子だ、胸に抱いてあげなさい」

「はい、あなた」

「可愛い……これが、わたしとシグルド様の子。よろしくね、セリス……」

「ホギヤアッ！」

「あらあら、お腹が空いたんですね。今お乳をあげますよ」

チュパ……チュパ……

「バブウ……」

「うふふ、もうあなたを離さないわ。思う存分あなたにわたしの乳を飲ませて胸に抱いてあげるから……もう過ちは犯したくないの。これからもあなたとずっと一緒よ……セリス……」

——現在

「赤ん坊のあなた、とても可愛かったのよ。一度抱きかかえたら離したくないくらいにね。わたしはいつも一生懸命に乳を飲んで胸に

抱かれて眠るあなたの顔を見て、心を和ませていたわ」

母上は、嬉しそうだった。

もちろんお産の痛みの末にぼくを産んでくださったのだから、喜びも大きかったのだろう。

「あなたを産んだ時、不安があつたの」

「不安……ですか？」

母上の表情は、一転して陰りを見せる。

それはあまり見ることもない、儚げな表情だった。

「遠い昔、産まれたばかりのあなたと離れ離れになって、あなたを寂しくさせてしまったことがあるような気がして……。わたし、怖いのです……あなたと離れることが……」

「ただの思い込みなのではないのですか？」

「セリスの言うとおりですね、ただの思いこみだわ。だけど、あなたと離れたくないの。ずっとあなたをそばに置きたいくらい……」

「母上……」

「あなたはわたしのものなの！ あなたを誰にも渡したくないの！ だって、あなたはわたしがお腹を痛めて産んだ、最愛の息子だものっ！！ 最近あなたと懇ろになつてるフロリーナにだって、絶対あなたを渡してたまるものですかっ！！！」

母上は明らかに正気を失っていた。

それどころか、フロリーナへの嫉妬さえ見せる母上。

どうかしている。母上を止めなければ。

「母上、どうなされたのです！ おかしいですよ……！」

「はぁ……はぁ……ごめんなさいね、こんなこと言っちゃって。わ

たしつて、駄目な母親ですね。あなたを溺愛するあまりに、過保護してばかりで……」

母上は、ぼくと離れ離れになるのを恐れているのだ。

一緒にいたいから、ぼくを過保護にする。

でもぼくはもう甘えるような歳ではない。

当主になるための、最後の仕上げにとりかかっているのだ。

「もうじきわたしは大人になるのです。それに、わたしを過保護にしてばかりではユリアが寂しがりますよ。だから、少しは頭をお冷やしてください」

「そ……そうね、ユリアがまだわたしの愛情を必要としているものね」

息子より子供じみた母親つて、どうなのだろう。

母上の様子から前世の記憶への恐れがあるからなのだろうが、子供を過保護にしてばかりではためにならない。

だから間違いと感じたことは、しっかりと意見しなければならぬ。

でも母上の目は、なんだか寂しそうだ。

「セリス……」

「何ですか、母上……！！」

母上は、突然ぼくに抱きつく。

母上の豊満な乳房が、僕の胸を包み込み心地よい感触を与える。

ぼくの体に伝わる母上の体温、脈動、そして匂い。

それは、母上との良き一体感。

でももうぼくには必要ないものだ。

母上は体の密着をやめると、今度はぼくの顔を見つめる。

色気づいた、母上の艶やかな表情。

ぼくは思わず心を奪われそうになるになるが、素早く理性を保つ。

「セリス、愛しているわ。だから味わって……わたしの……唇……」

母上が、ぼくに顔を近づけてくる。

そう、ぼくの唇を奪おうとしている。

これはもう、正気の沙汰ではない。

「母上、目をお覚ましく下さい!!」

ぼくは厳しい態度で母上を一喝する。

流石の母上もはつとした表情を見せ、静かにぼくの頬に口づけする。

「ごめんなさい、セリス……。わたし、わたし……」

「いい加減、子離れしたらどうですか？ あなたのしていることは虐待と変わりません。もう、わたしを物扱いするのはおやめください……!」

ぼくは立ち上がり、母上の座り込む樹から立ち去った。

いくら母性で包み込もうとしている母親でも、度を過ぎれば害ではない。

当然ぼくも母上を大切に思っている。でもここは心を鬼にしなければいけないのだ。

「セリス、わたしを置いて行かないで。あなたがいなければ、わたしはどうすればいいか……」

「わたしは母上を愛しています。母上がわたしを産んでくださった

ことには感謝しています。だからこそ、たとえ嫌われようと母上の非は正さなければいけないのです」

一旦振り返ったぼくは歩みを続け、母上との距離が遠くなっている。

今日も美味しいご飯を作ってあげるわね、との声が小さいながらも耳に入ってくる。

母上にとって、ぼくは体の一部のようなものだ。

でもぼくは、ぼくという個人だ。母上ではない。

人間はこうして、親から離れていくものなのだろう。

それが正しい、人間の育ち方だ。

母上も、わかっているはず。

ただ優しいだけでは、暖かく包みこむだけでは、子供のためにはならないことを。

今日の夕食の後、母上はフロリーナに愛憎の念を抱いていることを打ち明けた。

でも、フロリーナは母上への慕情を今でも忘れず、「みんな家族だから今まで通り一緒にセリス様を支えていけばいい」と母上に諭した。

母上はそんなフロリーナの姿勢に心を打たれ、これからもぼくたち家族で支え合うことを改めて誓った。

これが、正しい家族のあり方だと思う。嫁と姑の対立なんて馬鹿なことに発展しないことを、ぼくは願うばかりだ。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8108v/>

Todestrieb ~ 翼失き墮天使 ~

2011年11月15日18時17分発行